巻頭図版第２　谷奥古墳群

谷奥古墳群全景（北西から）

巻頭図版第３　谷奥古墳群

(1) 8 号墳全景(北西から)

(2) 8 号墳割竹形木棺検出状況(東から)

4．谷奥古墳群発掘調査報告

1．はじめに

谷奥古墳群は京丹後市弥栄町木橋・鳥取に所在し、『京都府遺跡地図』・『弥栄町遺跡地図』では５基の古墳の存在が知られていた。この丘陵上に、京都府土木建築部によって府道網野岩滝線幹線道路業務が計画され、この事前調査として平成18・19年度の２年度にわたって谷奥古墳群の調査を実施した。

平成18年度には、遺跡地図に記載されている丘陵上(第２・３図　２～12号墳が所在する丘陵、西尾根・西丘陵と呼称)に所在する古墳の基数を明らかにするために試掘調査を行い、確認された古墳のうち、５～７号墳の３基の発掘調査を実施した。平成19年度には、平成18年度に調査を実施できなかった２～４号墳、８～12号墳の調査を実施し、あわせて12号墳から南東方向に延びる尾根(東尾根、東丘陵と呼称)上を中心に試掘調査を行い、新たに見つけた13～15号墳の調査を行った。計11基の古墳の調査を実施した。

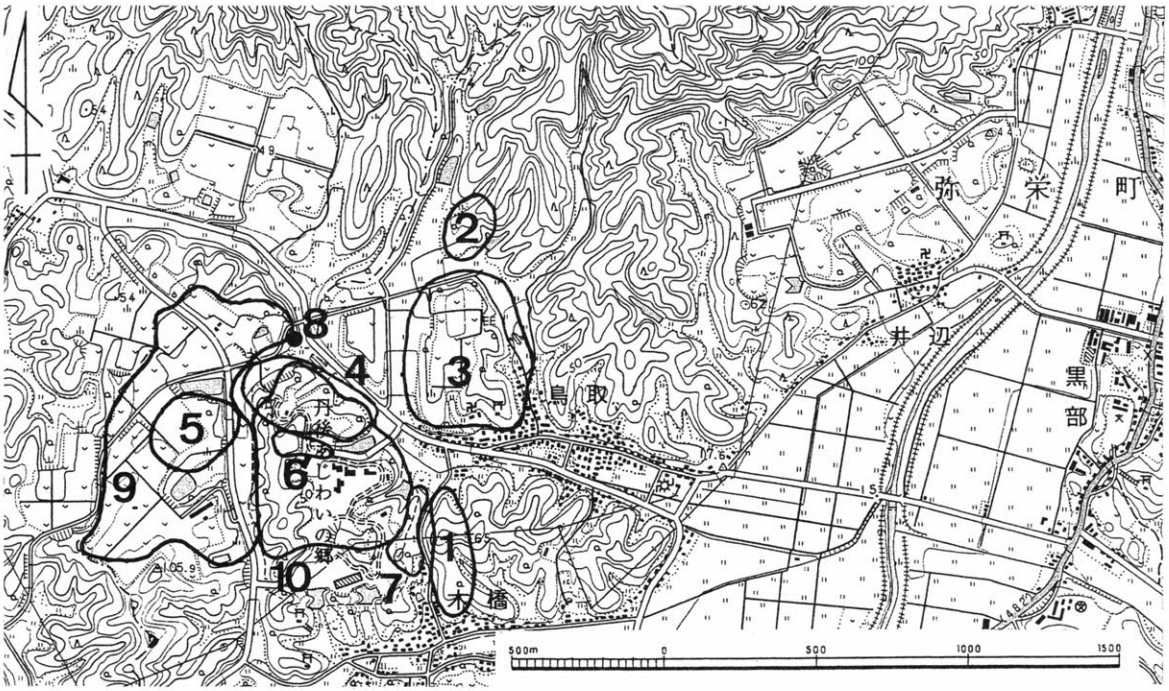
平成18年度は、古墳３基と試掘調査を含めて620㎡で、平成19年度は、古墳11基と試掘調査を含めて3,085㎡である。この報告で使用する座標は、日本測地系の座標を世界測地系の座標に変換したものである。

平成18年度の現地調査期間は、平成18年９月25日～12月22日までで、調査第２課調査第３係長石井清司、主任調査員田代　弘、調査員村田和弘が担当した。平成19年度の現地調査期間は、平成19年６月18日～11月29日までで、調査第２課課長補佐兼調査第３係長石井清司、主任調査員岩松　保、専門調査員石尾政信、調査員村田和弘が担当した。この報告書は、５・６・８号墳の主体部の項は村田が執筆し、他は岩松が執筆した。

現地調査・整理作業には、多くの方々の参加を得た。現地調査にあたっては、京都府丹後土木事務所、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会、京丹後市弥栄市民局、鳥取区、木橋区、和田野区、溝谷区、黒部区の御協力を得た。なお、発掘調査に係わる経費は全額、京都府土木建築部が負担した。

2．位置と環境(第１図)

谷奥古墳群は、京丹後市弥栄町から網野町に抜ける街道沿いに造られている。この街道は、弥栄町の竹野川流域の平野から西に山間部を約３kmにわたって越えて、網野町の福田川流域に抜けるものである。この街道に面して多くの遺跡・古墳が分布していることから、古くより、弥栄町の竹野川流域から網野町の福田川流域を繋ぐ重要な道として機能していたものと考えられる。こ



第１図　調査地位置図及び周辺遺跡分布図　（国土地理院1/25,000　網野）

１．谷奥古墳群　２．ゲンギョウの山古墳群　３．宮の森古墳群　４．鳥取古墳群　５．遠所古墳群

６．桐谷古墳群　７．鳥取峠古墳群　８．ニゴレ古墳　９．遠處遺跡群　10．ニゴレ遺跡

の街道は、現在の府道網野岩滝線である。

弥栄町・網野町の古墳時代を概観すると、弥栄町には、青龍３年銘鏡を副葬した大田南古墳群、全長105mの前方後円墳である黒部銚子山古墳、韓式土器を出した奈具岡北古墳群がある。一方、網野町には全長198mの前方後円墳の網野銚子山古墳が造られている。これらの古墳は、丹後地域の首長もしくはそれを支えた首長層と考えられ、両地域は緊密に連携を取って地域の支配権を確立していたと考えられる。その際に、この街道は、両地域を繋ぐ重要な動脈として機能していたものと考えられるのである。

谷奥古墳群の造られた丘陵は、弥栄町の竹野川流域に広がった平野から、西側の山間に約750m入った所にある。この丘陵の周囲には広い平野が認められず、山間の小河川に沿った狭小な平地に鳥取集落が展開しているだけである。しかし、鳥取集落の前面、背後の丘陵上には、数多くの小古墳が造られており、すべての尾根筋状に古墳が認められると言っても過言ではない。

今回の谷奥古墳群の周辺では、国営農地関係遺跡群の調査、丹後あじわいの郷関係遺跡などの調査が広範囲になされており、多くの古墳・遺跡が調査されている。

まず、古墳群としては、ゲンギョウの山古墳群、宮の森古墳群、鳥取古墳群、遠所古墳群、桐谷古墳群、鳥取峠古墳群、ニゴレ古墳で発掘調査が実施されている。ゲンギョウの山古墳群、宮の森古墳群、遠所古墳群の調査がなされている。宮の森古墳群では４基の古墳が調査されており、９基の埋葬主体部を検出し、うち７基が木棺直葬で２基が土壙(墓)であった。出土遺物や主体部の状況などから、２基の古墳は４世紀末～５世紀前半、２基の古墳は６世紀前半～中頃に造営されたものと考えられている。ゲンギョウの山古墳群では、木棺直葬墳７基(主体部11基)と横穴式

石室墳１基、土器棺墓２基等が調査されている。木棺直葬墳は４世紀末から５世紀前葉に、横穴式石室墳は６世紀末～７世紀初頭に位置づけられている。鳥取古墳群では２基の古墳が調査され、それぞれ１基の主体部が検出されており、出土遺物から、古墳時代前期末～中期初頭に築造されたものと考えられている。遠所古墳群では、総数22基の古墳が調査されている。竪穴系横口式石室４基、木棺直葬墳12基が確認されており、この他の６基の古墳は主体部が流出していた。この古墳群は５世紀末から６世紀中頃にかけて造墓されており、まず５世紀末に木棺直葬墳が造られて、６世紀中頃には木棺直葬墳と竪穴系横口式石室の両者が造られ、以後、６世紀末にかけては石室に追葬を行うだけで、新たな古墳が造られなくなる。

桐谷古墳群、鳥取峠古墳群でも調査がなされている。桐谷１号墳では木棺直葬の主体部を２基、２号墳では土壙墓１基を検出したが、出土遺物がなく、時期は不明である。鳥取峠１号墳は削平が著しく、主体部１基を検出したが、出土遺物はなかった。

小古墳群の他に、首長クラスの古墳も調査されている。谷奥古墳群の北西750ｍの位置には、ニゴレ古墳がある。ニゴレ古墳は直径約30ｍの５世紀前半に築かれた古墳である。墳頂20ｍの不整形な墳形をなしており、墳頂部の木棺からは衝角付冑、短甲、頸甲などの武具や鉄剣、鉄鏃などが出土している。また、墳丘裾部には円筒埴輪が立て並べられており、墳頂部には家、椅子、盾、靫、冑、舟形埴輪など、多くの種類の形象埴輪が立てられていた。

周辺の遺跡の調査で特色があるのは、古代における製鉄関係遺跡の調査である。遠處遺跡、ニゴレ遺跡で製鉄関連遺構が調査されている。遠處遺跡群では、８世紀後半以降の製鉄関連遺構が検出されており、状況証拠により、６世紀後半以降に製鉄が行われていた可能性が指摘されている。遠處遺跡群の東には、ニゴレ遺跡が隣接する。ニゴレ遺跡では、８世紀後半と10世紀初頭までに操業した製鉄炉４基が確認されている。

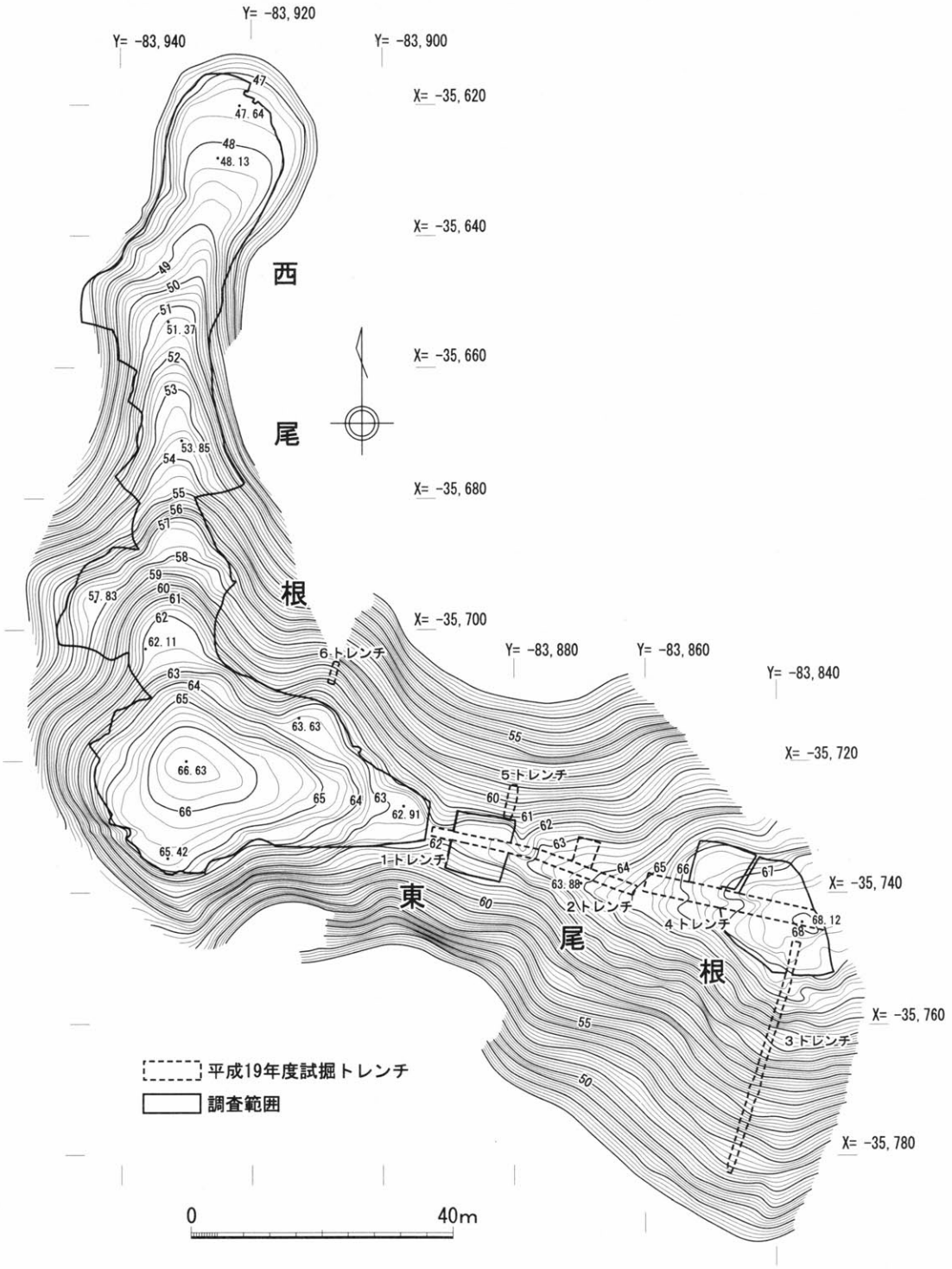
谷奥古墳群の周辺では、古代以降に鉄生産がなされていたことは間違いない。これが古墳時代にまで遡るのかどうかについては、確証がない。一方、この周辺には、さほど大きな平地が認められないにも関わらず、多くの中小古墳が造られており、また、ニゴレ古墳のような、首長クラスの古墳も造られている。こういった背景には、重要な交通路に位置しているということの外に、鉄生産という要素が、この地域の特色として関与しているのであろうか。

３．調査概要

平成18年度には、西尾根上に試掘トレンチを設定して古墳の基数の確認に努めるとともに、５～７号墳の３基の古墳の調査を実施した。

谷奥古墳群は、従来５基の古墳の存在が『京都府遺跡地図』などに記載されていたが、１号墳以外はその細かな位置と古墳であるか否かも含めて明確ではなかったため、今回の調査により古墳と確認できたものから順に、２号墳以下の番号を付した。１号墳は２号墳の西側にあり、道路予定地の路線外であるため、調査をしていない。

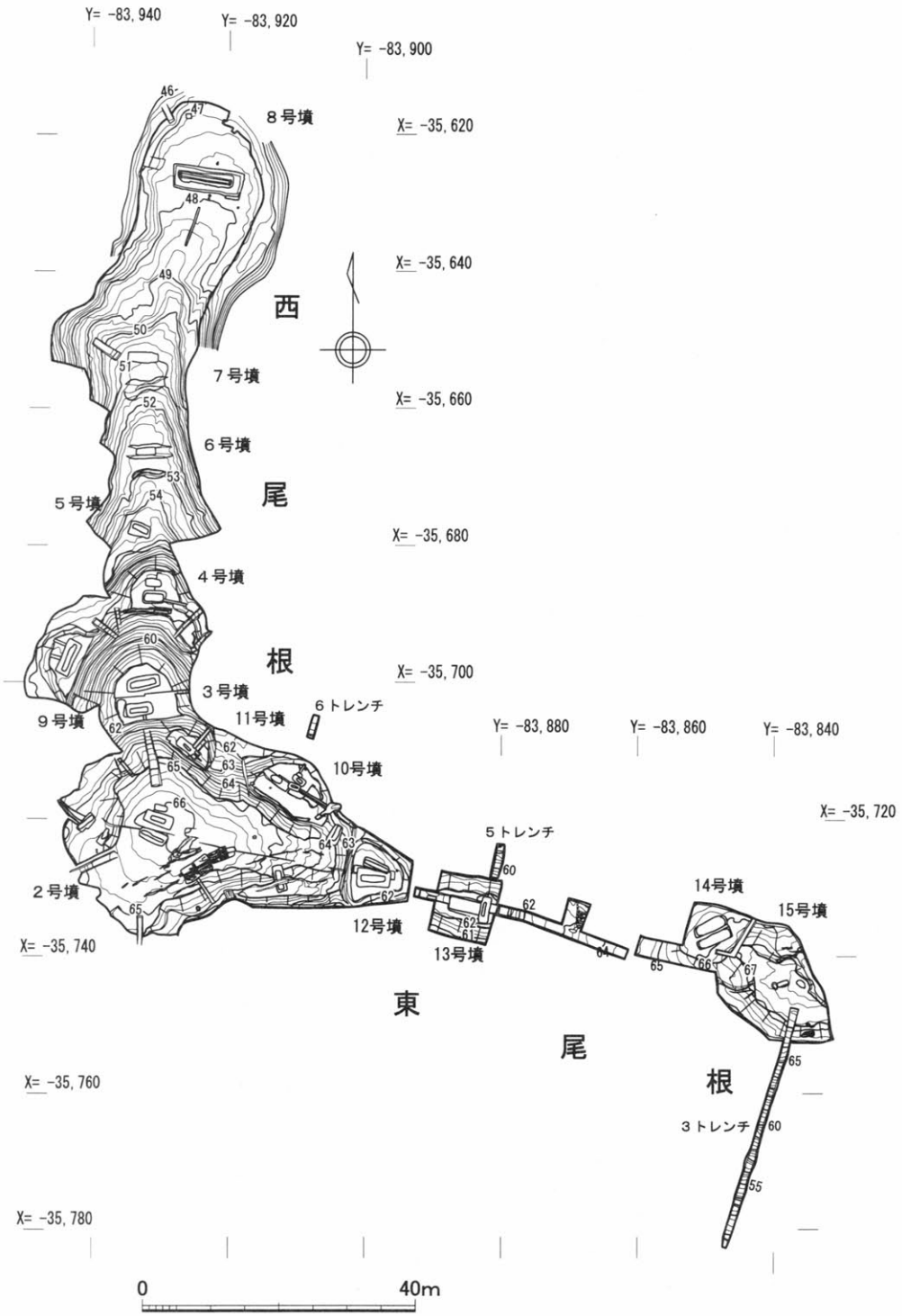
２号墳は西尾根の最高所にあり、標高64～66ｍに位置する。この２号墳から北に延びる丘陵尾



第２図　調査前地形測量図

根上に３～８号墳が造られている。２号墳から東尾根に続く尾根筋上には12号墳が造られている。これらの尾根筋からはずれた位置にも古墳が造られており、９号墳が３号墳の北西側に、10・11号墳が２号墳の北東側に取り付くように造られている(第３図)。

平成19年度は、２～４号墳、８～12号墳の調査を行うとともに、西尾根全面に古墳が分布していることが判明したことから、東尾根上にも古墳が造られていることが想定されたため、東尾根を中心に１～６の試掘トレンチを設定して、古墳の有無を確認した(第２図、図版第29)。１・



第３図　調査前地形測量図および主体配置図

２・４トレンチは西側丘陵から東側丘陵に伸びる尾根筋状に設定したトレンチで、３基の古墳を確認したため、試掘トレンチを拡張して13～15号墳として調査を実施した。３トレンチは東丘陵の南斜面に設定したトレンチで、現状では幅・長さともに数mの平坦地が数mの高低差を隔てて階段状に分布していた。調査の結果、人工的な盛り土であることは判明したが、古墳である兆候は認められなかった。５・６トレンチは、古墳の下位数mのところに平坦部が認められたため設定したトレンチであるが、調査により、自然の営力による土砂の堆積を認めただけで、古墳では

なかった。

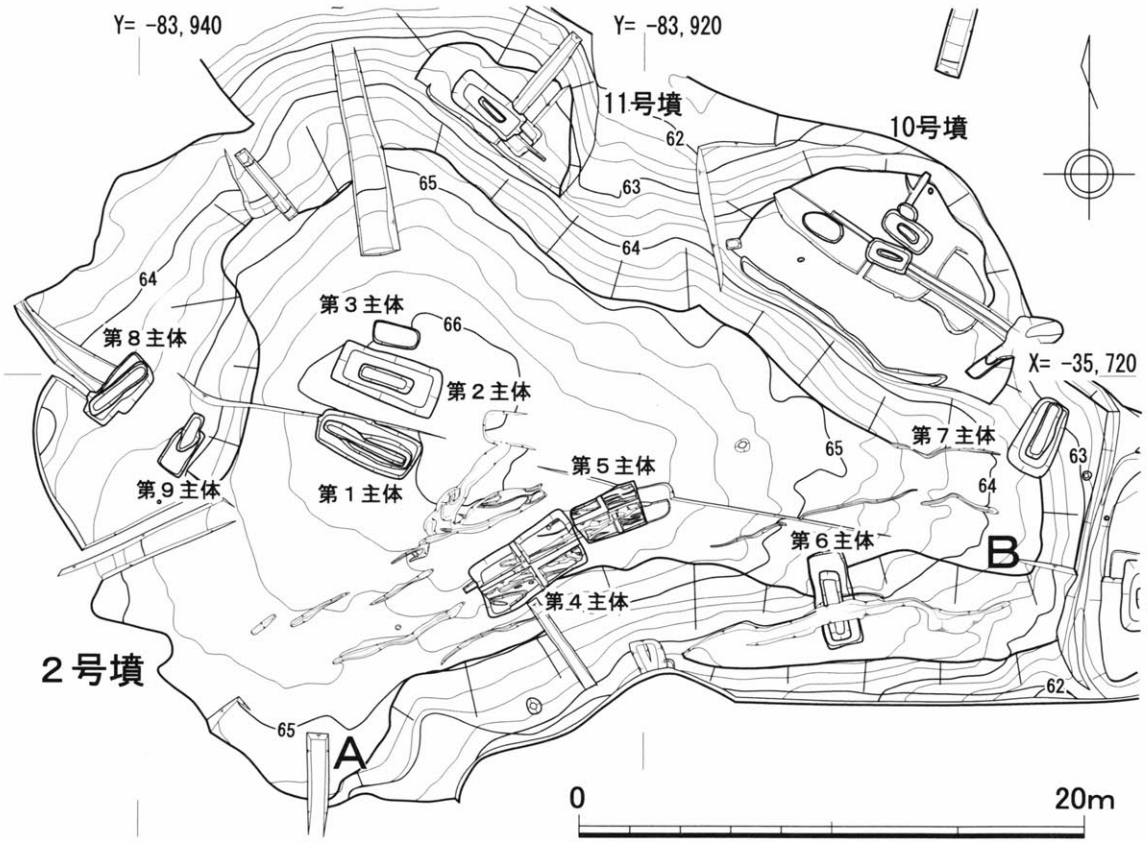
以下、古墳毎にその調査結果を記す。なお、出土遺物に関しては、主体部内の掘削作業中にも十分な注意を払ったことは言うまでもないが、主体部内の土砂はすべてふるいにかけて、細かな遺物の見落としが無いかを確認した上での判断であることをここに記しておく。

①**2号墳**(第4～9図、図版第1－(2)、3～8)

墳丘　西側丘陵の最高所に位置した古墳で、標高63～66mに位置する。丘陵頂部の地形を整形し、長径38m、短径24mの長楕円形を呈した不整形な墳丘を造っている。

2号墳の墳丘上では9基の主体部を検出した。すべて地山面で検出した。1～3基の埋葬主体部が小群をなして、5群に分かれて分布している。墳頂部に位置し、近接して平行に造られている第1～3主体、墳頂部の東南側、墳丘南斜面に位置し、長軸が一致している第4・5主体、墳丘南斜面東側で検出した第6主体、墳丘東北隅の斜面に造られた第7主体、墳丘西側斜面に造られた第8・9主体の5群である。これらの主体部の配置の在り方は、古墳のものというよりも、いわゆる共同墓地的な在り方をなしている。

墳丘上の堆積土層は、表土下に淡茶褐色土・白色砂混じり淡褐色土が約30cm堆積しており、この下位が地山となり、第1～7主体が掘り込まれた面である。一方、第8・9主体は10～30cmの墳丘盛り土の上から主体部が掘り込まれていた。また、墳丘の東辺部から4m近辺までの墳丘上には、地山の代わりに白色砂混じり淡明褐色土が厚さ25cmで堆積している。この土層の上位に、墳丘裾の区画溝内堆積土が覆っていることから、白色砂混じり淡明褐色土は墳丘盛り土の可能性



第4図　2号墳墳丘測量図

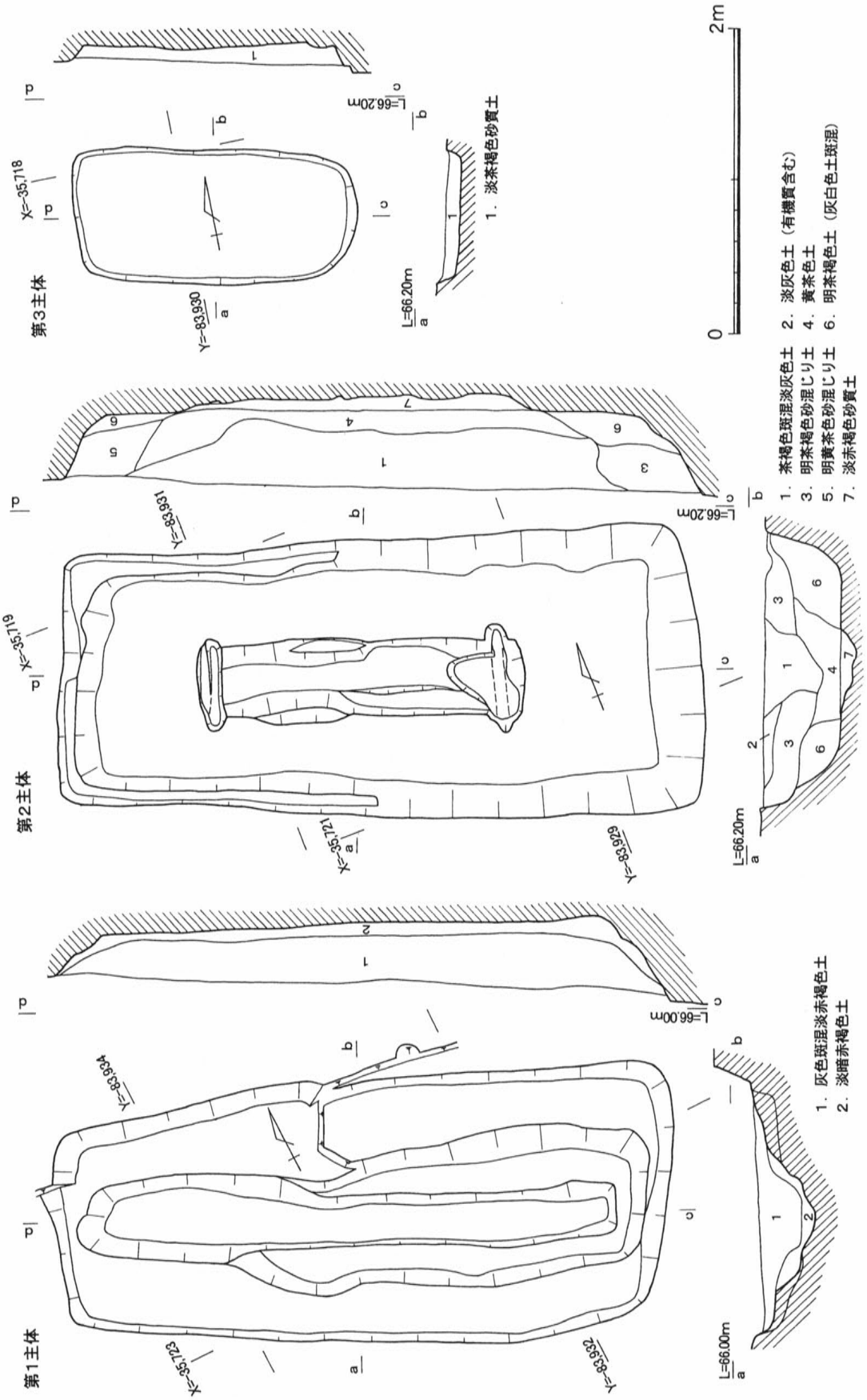
が高い。

元々の丘陵の形状を利用して墳丘を造ったものと想定されるが、どの程度、丘陵の地形を改変しているかは不明である。部分的に丘陵の地形が改変されているところが見受けられる。

最高所にある第１～３主体から東側にかけては、緩やかで平らな傾斜面をなしており、人為的な手が加えられていると判断される(図版第３)。また、墳丘の東辺である12号墳との間は、ほぼ垂直に削り出した溝状を呈しており、北東コーナーも平面がほぼ直角に成形されている(図版第８)。墳丘は基本的に地山を削り出して造っているが、盛り土をしているところも確認した。先述のように、東側墳丘斜面の裾近くでは、盛り土と判断される土層を確認した。また、第８・９主体を平面的に検出する際に30cm以上の盛り土がなされているのを確認した。北側斜面の一部でも盛り土を確認しており、北斜面・西斜面は盛り土で整形を行ったと考えられる。一方、南斜面の中央部より東側は比較的急峻な斜面となっているが、これは後述のように、地震による地滑りのためと考えられる(第４図Ａ－Ｂライン)。

墳丘の南側斜面、第４～６主体周辺では、地震の地滑りによる地割れが認められた。この地割れは南西から北東方向に走っており、幅５～30cmの地割れが、幅約５ｍの範囲に平行しており、約30ｍの長さにわたって認められた(図版第５)。これは標高64ｍ～66ｍ付近に位置している。同様の地割れは15号墳でも認められ、２号墳とほぼ同じ標高66ｍ～67ｍに分布している。独立行政法人産業技術総合研究所関西センター関西産学官連携センター招聘研究員寒川旭氏によると、この地滑りを起こした地震は、標高64ｍ～67ｍ付近を大きく揺らす振動数であったために、同程度の標高である２か所の尾根頂上付近でだけ地滑りが認められ、他の地点では地割れが認められないのであろう、とのことである。地割れ内部には深くまで腐植土が充満していることから、さほど古くない時点の地震――昭和２(1926)年の丹後地震によるものと判断された。

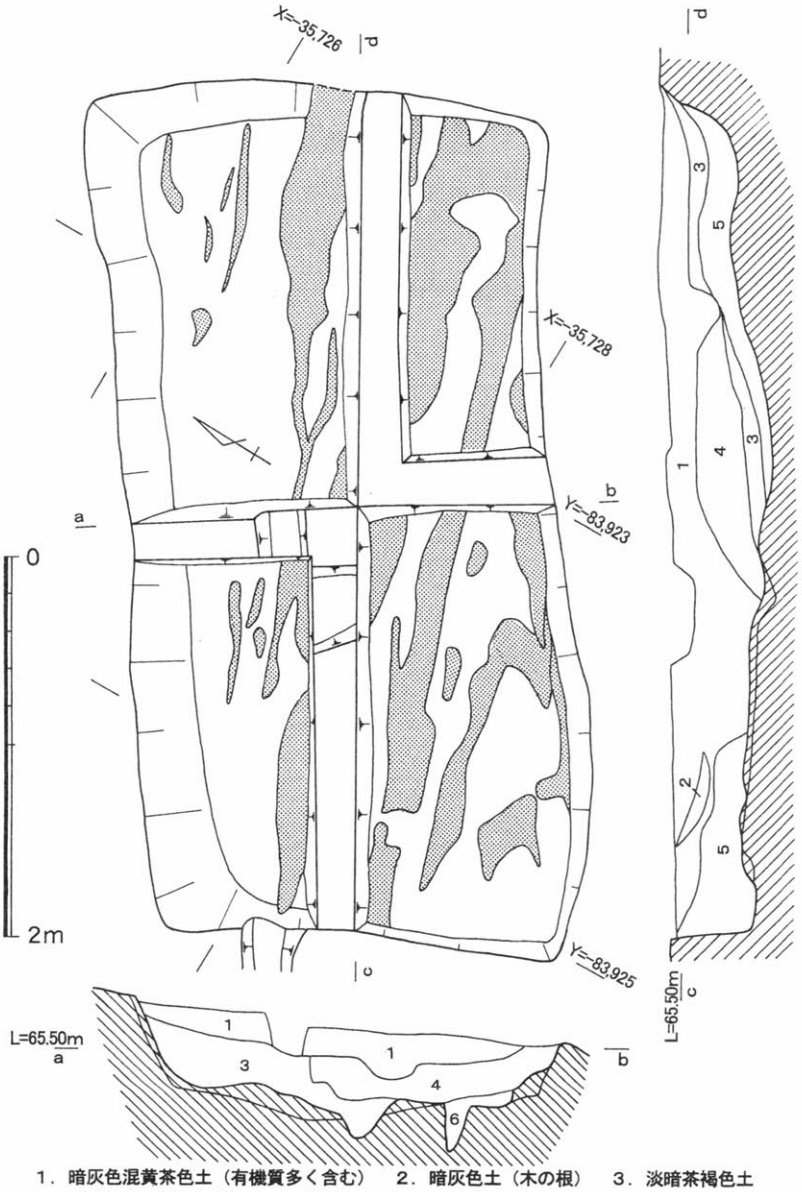
第１主体(第５図、図版第４－(1)・(2))　地山を二段に掘り込んで墓壙を構築している。一段目の墓壙は、平面形は台形状を呈し、東側が幅広となっているが、これは検出時に西半を大きく掘削したためで、本来は均整な長方形を呈していたものと判断される。この墓壙は、長辺4.1ｍ、短辺1.9ｍで、検出面より最大で0.5ｍの深さを有する。墓壙底で、木棺を納めた二段目の墓壙を検出した。東半はさらに二段に掘削されており、幅広な掘形となっている。幅が西端で0.6ｍ、東辺では上段1.05ｍ、下段35cmで、長さ3.7ｍである。西端の深さ15cm、東端の深さが25cmで、東に傾斜する。東半の段は、上段の深さが10～15cmで、下段の深さが５～10cmである。東半では三段目の掘形ライン、西半では二段目の掘形ラインに続く土壙掘形が木棺を納めた掘形と判断する。この下段の掘形は、深さが最大で25cm程度しかなく、木棺を埋め置いたというよりも、棺を安定させるために掘り窪めたものと考えられる。土層の観察では、上・下段の土壙内には灰色斑混淡赤褐色土、淡暗赤褐色土が堆積しており、棺を埋めた痕跡は認められない。箱形木棺を納める場合、木棺の幅は底面掘形の幅よりも幾分狭くなるため、この掘形には、最大でも30cmの幅の棺しか入れられないこととなり、遺体を納めるにはやや小さすぎる。また、この掘形の底面は、横断形を見ると下に丸く掘られている。以上の理由により、箱形の木棺ではなく、割竹形木棺が



第5図　2号墳第1～3主体実測図

納められていたと推測される。西端が東端よりも８cm高くなっていること、木棺を据えたと考える下段・最下段の墓壙は西側で幅広となっていることから、西頭位で葬られたものと判断される。

第２主体(第５図、図版第４－(1)・(3))　第１主体の北に位置し、平行して作られている。幅は西辺が1.65m、東辺が1.9mで、長さ4.4m、深さ0.55mの長方形を呈した墓壙底で、下段の掘形を検出した。二段目の掘形は、幅0.5m、長さ2.15mの長方形を呈しており、検出した深さは約10cmと浅い。二段目の掘形の底面は不整形な凸凹となっており、木棺を据えるには適していない。そのため、この二段目の墓壙を埋める７層の淡赤褐色砂質土は、他の埋土と較べて軟らかいことから、木棺を据える際の整地土と判断する。墓壙の両端では、小口板を立てたと判断される溝を検出したが、深さ８～10cmと浅いものである。小口の痕跡から、内法の長さは2.25m、二段目の墓壙の幅から幅0.5mの箱形木棺が納められていたと推定される。箱形木棺の形状は、小口穴の両端が二段目墓壙の外側に突出することから、小口板で両側板を挟み込むタイプと推測される。土層の観察では、木棺が腐朽した時に１・４層が木棺内に大きく落ち込み、木棺の上位に墓壙を埋め戻した土である２・３・５層がそれらに引きずられる形で動いたものと解釈できる。これらの土層の下位にある６層は、木棺を据え置く際に埋め置かれた裏込めの土砂と判断される。二段目掘形の底面の高さは、西端が東端よりも約５cm高くなっていることから、西頭位で葬られたものと判断される。遺物の出土はなかった。



1．暗灰色混黄茶色土（有機質多く含む）　2．暗灰色土（木の根）　3．淡暗茶褐色土
4．黄茶色土（汚れあり）　5．黄褐色土　6．淡茶褐色砂質土

第６図　２号墳第４主体実測図(網部は地割れ)

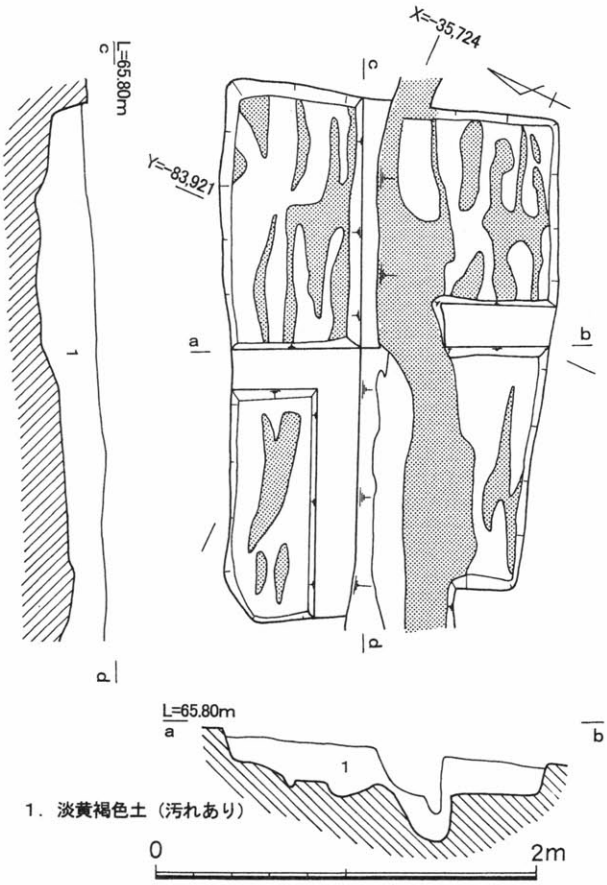
第３主体(第５図、図版第４－(1))　第２主体の北側にあり、0.85m×1.85mの土壙である。検出高は最大

で20cmで、埋土は淡茶褐色砂質土である。第１・２主体とほぼ軸を同じくして、近接して作られていることから、土壙墓と判断する。遺物の出土はなかった。

第４主体(第６図、図版第５－(1)・(2))　墳頂部からやや南東に下った墳丘南斜面に位置し、第５主体と主軸をほぼ揃えて造られている。第４・５主体の並びは等高線に平行するものである。この第４・５主体は、第６主体とともに、丘陵の南側の竹野川流域を眺望できる位置にあり、北側の平地を見渡すことができない。谷奥古墳群の他の埋葬主体が北側の眺望を意識しているのとは対照的である。また、第３・４主体の周辺は、調査着手以前より表土上から地震に伴う地割れが観察されていたが、調査により、大小多くの地割れが見つかった。

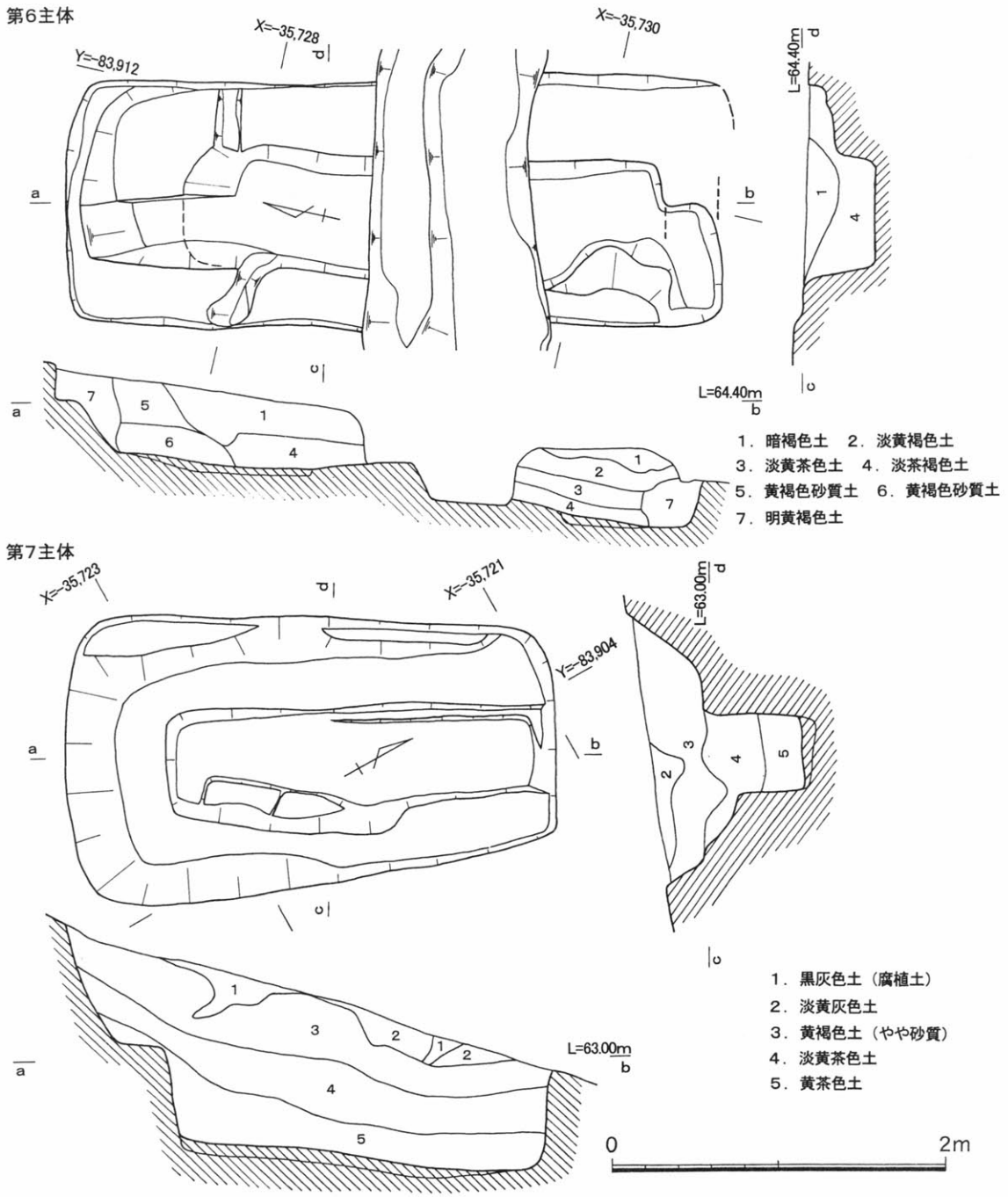
第４主体は、幅2.4m、長さ4.4m、深さ0.5mの墓壙である。昭和２年の丹後地震の際の地滑りに伴う地割れ(幅約40cm)により、南西―北東に分断されていた。墓壙底面では、地割れ状の数多くの皺を検出した。これらは幅５～20cmと狭いものであるが、南西―北東に向いており、地滑りに伴う地割れの一種と判断した。墓壙内の堆積土層は、地滑りの際の斜めに切れ込む割れ目内に現代の腐植土・土砂(１～３層)が入り込んでおり、４層以下が比較的きれいな土で、墓壙に伴う本来の埋土と判断される。この地割れのために層序の堆積順序が逆転しているものがある。この主体部には、他の主体部と同様、木棺が納められていたものと思われるが、土層の観察や平面的な観察では確認できなかった。遺物は全く出土しなかった。

第５主体(第７図、図版第５－(3))　第４主体の北東側で検出した墓壙で、幅1.55～1.75m、長さは2.5～2.8m、深さは最大で20cmを測る。第４主体と同様、地滑りの影響を受けている。埋土は淡黄褐色土(汚れあり)の一層だけで、底面には無数の皺状の溝があった。内部主体等は不明である。遺物の出土はない。



第７図　２号墳第５主体実測図(網部は地割れ)

第６主体(第８図、図版第６－(1))　２号墳の南東斜面で検出した主体部で、等高線に直交する方向に作られている。地滑りによる地割れでのため、中央部が幅0.9～1.1mにわたって分断されている。以下、現存長を記し、(　)内に復元長を記す。墓壙の規模は、幅1.4m、長さ3.9m(2.9m)、深さ0.5mである。墓壙内を約20cm掘り下げたところ、木棺を納めた痕跡を検出した。この土壙の規模は、幅70cm、長さ2.9m(1.9m)である。この土壙は、側板側は地山を掘り込んでいるのに対して、両小口側は一旦掘



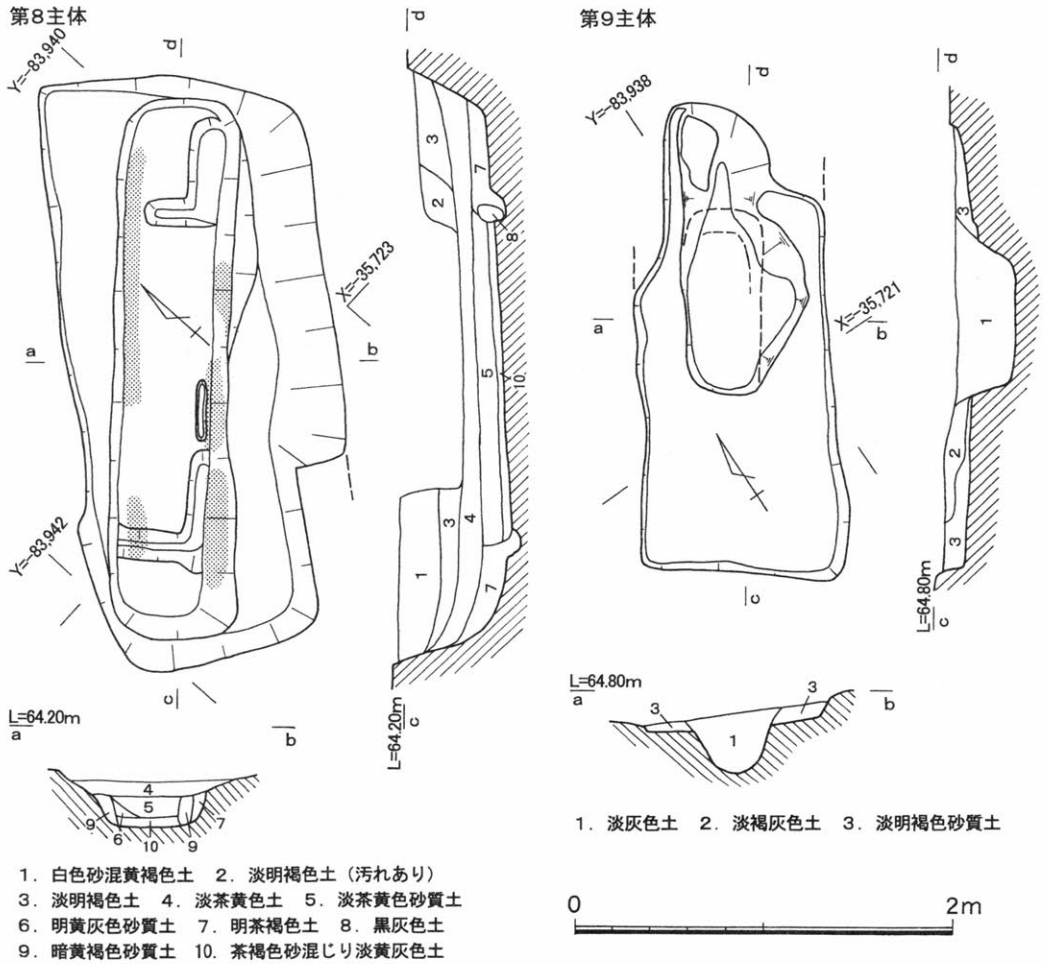
第８図　２号墳第６・７主体実測図

り込んだ墓壙内に木棺を据えた後に５～７層の土砂で墓壙を埋め戻したものである。この土壙の底面の規模より、0.5m×1.5m程度の木棺が納められていたと復元できる。墓壙の上面では北辺と南辺で約0.5mの高低差を有しているが、これは地滑りにより分断を受けているためで、地割れがないものとすると、0.2m程度の高低差に復元できる。床面の高低差も北側が0.2m高くなっており、この高低差から北頭位に復元できる。遺物は出土していない。

第７主体(第８図、図版第６－(2)・(3))　２号墳の北東隅、10号墳と12号墳との間の斜面で検出した。この主体部は、南端と北端で約0.9mの高低差を有する急斜面に作られている。平面形は台形を呈しており、幅は長辺1.7m、短辺1.25m、長さが2.95mの墓壙で、北辺に接して、幅

0.5～0.7m、長さ2.25mの二段目の墓壙が掘り込まれている。一段目の掘形は、南端で0.65m、北端で0.1mの深さで掘削されているが、底面も検出面の勾配ほどではないが、北と南で0.3～0.35mの高低差を有しており、南側が高くなっていた。この一段目の掘形の底面が検出面と同じく急勾配であることから、この主体部が掘削された時点ですでに、検出面の傾斜面が形成されていたことが窺える。二段目の墓壙はほぼ垂直に、南端で0.6m、北端で0.65mの深さで掘り込まれており、最底面は南端が北端と比べて約15cm高くなっていた。土層の観察では木棺等の痕跡は確認できなかった。二段目の墓壙上に傾斜しながらも平坦面が認められることから、土壙に木板で蓋をした有蓋土壙墓と判断される。頭位は、底面の傾斜から、南頭位と推測される。２号墳の東辺のラインと第７主体の主軸がほぼ一致している。遺物の出土はなかった。

この第７主体は、10号墳と２号墳の東北部との僅かな空間に作られていることから、10号墳との有機的な関連が想定される。10号墳は２号墳の墳丘の一部を削って造られているが、10号墳と12号墳の間には２号墳の墳丘が約４ｍの空間しかないにも関わらず第７主体が造られていること、その空間のほぼ中央に位置していること、しかも主体部を構築するには不適当と思われる急斜面に造られていることを重視すると、２号墳東辺が整備され10号墳を造営した後に、第７主体が設けられた可能性が高いと考える。２号墳の東辺を整備したのが、12号墳の構築時であるのか、



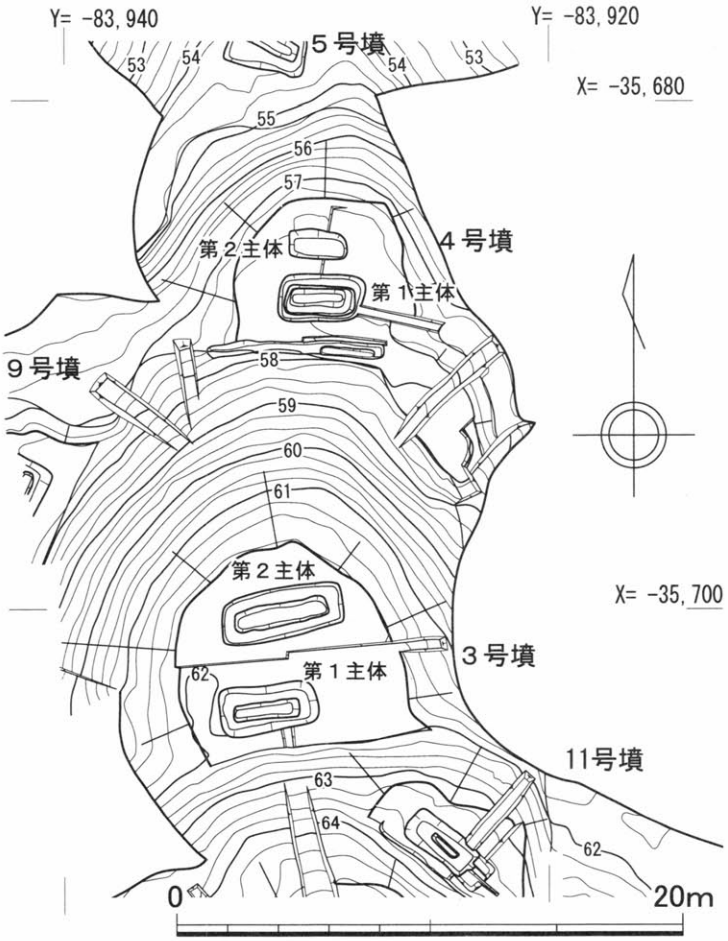
第９図　２号墳第８・９主体実測図（網部は木棺痕跡）

12号墳の構築以前に２号墳を占地した時点であるのかは不明である。

第８主体(第９図、図版第７－(1)・(2))　２号墳の西側斜面に作られた主体部で、９号墳と平行して、約２ｍの間隔を有して作られている。第８・９主体は、暗黄茶色土・暗褐色土斑混明灰白色土を厚さ10～30cm取りはずして地山上で検出したが、土層の観察では、これらの土層の上位から掘り込まれていた。このことから、暗黄茶色土層・暗褐色土斑混明灰白色土層は２号墳の墳丘盛り土と判断され、西側斜面に盛り土がなされてことが窺える。

第８主体は、幅が1.4ｍ、長さ3.1ｍの墓壙であるが、先述のように、遺構を数10cm掘り下げて検出したため、南東部等、明らかに削平されているところがある。二段目の墓壙は、一段目の墓壙内を約40cm掘り下げた、４層下面において検出した。一段目の掘形とは軸を異にし、幅0.6～0.65ｍ、長さ2.8ｍ、深さは最大で25cmである。この時点で、木棺の一部が土壌化して遺存しているのを平面的に確認した(第９図左図第９層)。また、土層の観察により、北辺の小口板が土壌化しているのを確認した(第８層)。７層は木棺を据えた際の埋土と判断され、両小口板と側板の外側を埋めるものである。墓壙の底面では木棺を据えた痕跡が溝状の窪み(幅５～15cm、深さ２～６cm)となって部分的に検出できた。その平面形状から、小口板を両側板で挟み込むＨ型の木棺であることが判明した。平面的に認めらた木棺痕跡の形状と矛盾しない。木棺の規模(内法)は0.4ｍ×1.7ｍである。10層については棺の底板の可能性があるが、確証はない。二段目の掘形の底面の幅は北側が広いこと、床面の高さは北側が約20cm高いことから、北頭位に葬られたもの復元できる。主軸は等高線に平行している。遺物は全く出土しなかった。

第９主体(第９図、図版第７－(1)・(3))　1.1ｍ×2.4ｍの墓壙の北寄りに、65cm×1.4ｍのやや不整形の二段目の掘形が認められた。当初、不定形の土壙墓と判断したが、一段目の掘形の南半がほぼ直線的に方形に検出されていること、一段目の底面が北と南でほぼ同じ高さであること、第８主体の項で述べたように平面的に検出する際に主体部を削平したことから、一段目の掘形の北半部は削平を受けて消失したものと考え、二段の掘形を有する墓壙と判断した。二段



第10図　３～４号墳墳丘測量図

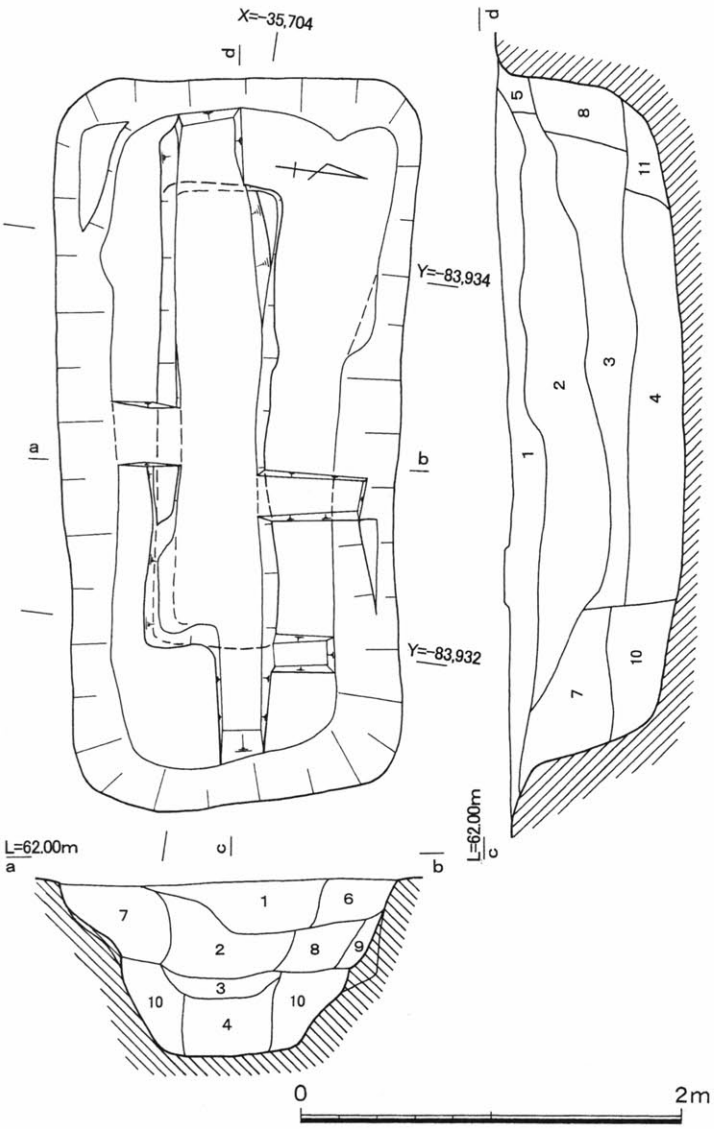
目の掘形を木棺を据えた墓壙とし、墓壙のほぼ中央に位置するものと復元すると、全長3.2m程度の墓壙に復元できる。1層が木棺陥没坑内の堆積土、2・3層が木棺を据えた際の裏込め土と判断される。木棺の形状は、土層断面や二段目の掘形の形状から、幅35cm、長さ1m程度の箱形木棺と推測される。木棺を据えた二段目の掘形は、北でやや広がるような復元ラインとなること、底面が南に2～3cm下がることから、北頭位であったものと復元できる。副葬品は全く出土しなかった。

出土遺物　2号墳の墳丘および各主体部内からの出土遺物はなかった。

②3号墳(第10～13図、図版第2－(1)、3－(1)、9、10)

墳丘　3号墳は2号墳の北側に造られた古墳で、標高62m付近にある。2号墳墳頂部と約4m低所に位置し、北側の4号墳とは4.5mの高所に造られている。古墳は南北8m、東西9mの半円状に平坦面を造り出し、丘陵尾根筋に直交する方向に2基の主体部を造っている。最終的に墳丘を断ち割ったところ、第2主体の位置より北側には最大80cmの盛り土がなされていた。

第1主体(第11図、図版第10－(1)・(2))　2基の主体部のうち、南側に位置する主体部である。東辺の幅1.75m、西辺の幅1.9m、長さ3.8m、深さ0.9mの段を有しない墓壙である。墓壙の横断面は逆台形を呈している。土層の観察では、木棺の陥没坑内に堆積した土砂(1～4層)と木棺を埋めた土砂(5～11層)に大きく二分できる。木棺を埋めた土砂のうち、5～9層は木棺陥没時に幾分かは動いたものではあるが、棺の上位を埋めた土砂であり、10・11層は木棺を墓壙内に据えた際に、棺の周囲に埋め置いた土砂と判断される。このように解釈すると、4層は本来木棺が置かれた空間と判断され、木棺の規模は幅0.4m、長さ2.2

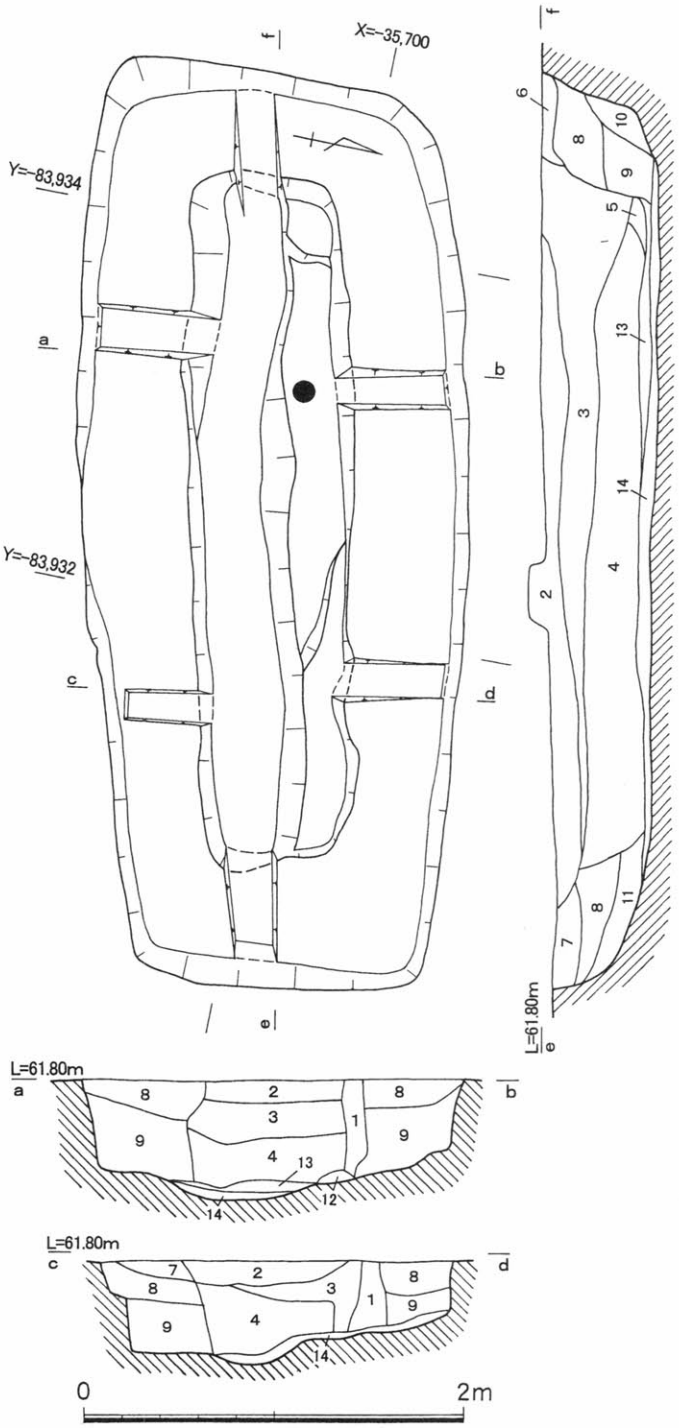


1．淡明黄褐色砂質土　2．淡明褐色砂質土　3．淡明褐色砂質土（2層より明褐色強い）　4．淡黄茶色砂（やや軟）　5．淡明褐色砂質土（2層より硬）　6．淡明黄褐色砂質土（1層より黄色強い）　7．淡明黄褐色砂質土（1層より淡い・硬）　8．淡黄褐色砂質土9．淡黄褐色砂質土（8層より硬）　10．淡明黄褐色砂質土（白色砂やや多い）　11．淡黄灰色砂（やや軟）

第11図　3号墳第1主体実測図

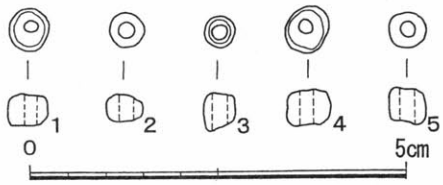
m程度に復元できる。棺の構造については不明である。第11図は、木棺の陥没坑内に堆積した4層の平面形を図示しているが、墓壙を50～60cm掘り下げて、10・11層上面で検出したものである。南東部分はやや掘りすぎており、本来の肩ではない。底面の傾斜は3cmほどわずかに西側が高いことより、西頭位と推定される。遺物の出土はなかった。

第2主体(第12図、図版第10－(1)・(3)) 一段目の墓壙が幅2.05m、長さ4.85m、検出高は最大で40cmである。墓壙内を20～25cm掘り下げて、棺を納めた痕跡を検出した。土層の観察より、棺の陥没坑内に堆積した土砂(2～5層)と棺の周囲に埋め置かれた土砂(6～11層)、先述のように、木棺の底面に敷かれた整地土(12～14層)が認められた。これらの土層より、0.5～0.7m、長さ3.4m程度の木棺が納められていたものと復元できる。墓壙底には、幅0.8m、長さ3.3mの窪み状の二段目の墓壙が掘削されていた。二段目の墓壙は、木棺を据え付けた壙とほぼ合致し、北西隅がやや合わないだけである。この墓壙は、一旦5～10cm程度掘り窪め、南半部1/2がさらに5～8cmの深さに、断面凸状に掘られていた。この墓壙の最深部には13・14層といった砂系の土が堆積しており、これらは墓壙底面に敷かれた整地土と判断されること、そのため、墓壙の底面は、掘削面が平らかではないが整地土によりある程度平坦に均されていたと推定されることから、箱形木棺を据え付けるための基礎と推測される(第12図は木棺を納めた墓壙内に、二段目の墓壙の平面を記録している)。底面はほぼ水平である。鏡片の出土位置から、



1. 淡茶褐色土（木の根）　2. 淡明褐色砂質土　3. 淡黄褐色砂質土
4. 淡明褐色砂質土（2層より細かい砂粒）　5. 淡黄褐色砂
6. 淡明褐色砂質土（締りあり）　7. 淡明黄褐色砂質土（締りあり）
8. 淡明黄褐色砂質土（7層より堅い）　9. 淡明褐色砂質土（やや汚れあり）
10. 淡黄灰色砂　11. 淡明黄白色砂質土（締りあり・地山由来の褐色シルト質塊混じる）　12. 淡明褐色土　13. 淡黄灰色砂（軟）　14. 淡黄灰色砂（地山由来のシルト質の褐色塊混じる）

第12図　3号墳第2主体実測図(●は鏡片出土位置)



第13図　３号墳出土遺物実測図

西頭位に葬られたものと判断される。

出土遺物としては、鏡片、ガラス玉がある。鏡片はすべて、棺痕跡を検出するために、一段目の墓壙掘形を検出した時点で設けた幅20cmの断ち割り内からの出土であり（第12図●位置）、層位的には13層の淡黄灰色砂（軟）の上面にあたる。その後、その周囲を平面的に掘り下げたが、他の破片は検出できなかった。おそらく、断ち割り幅に収まる程度の小破片であったものと想定される。最終的に棺内と想定される４・５層および13・14層の土砂をふるいにかけたところ、ガラス小玉５点が出土した。このうちの数点は、鏡片が出土した付近の土砂に含まれていたもので、鏡片の周辺に副葬されていた可能性が高い。

出土遺物（第13図、図版第30）　３号墳第２主体部から、ガラス小玉５点と鏡片が出土した。第13図はガラス玉の実測図で、径×高さを記すと、５㎜×４㎜、4.5㎜×3.5㎜、４㎜×５㎜、５～６㎜×4.5㎜、4.5～５㎜×4.5㎜である。すべて青緑色に発色している。鏡片は４片が出土したが、接合面は認められない。破片には、乳や圏線が観察され、おそらく獣形と思われる図象、櫛歯文が見て取れる。径が10cm内外の小型のものである。

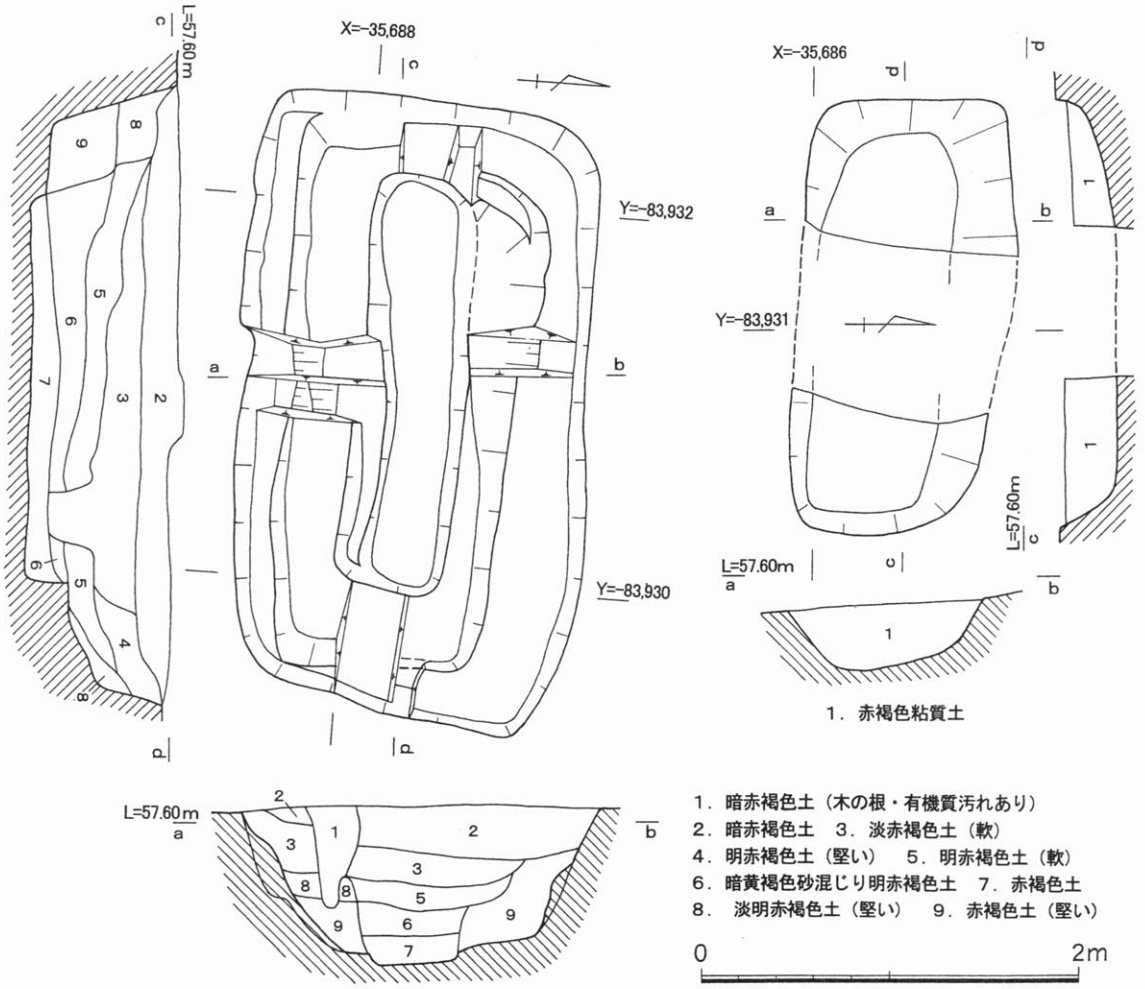
③４号墳（第10・14・15図、図版第２－(1)、３－(1)、９、11）

墳丘　４号墳は３号墳の下に造られた古墳で、３号墳とは4.5mの高低差を有しており、北側の５号墳は約３m下位にある。東西８m、南北６mの半円状に平坦面が作られている。平坦面では、丘陵尾根筋に直交する方向に主軸をもった主体部２基を検出した。南側のものが第１主体、北側のものが第２主体である。北側の第２主体は、第１主体の調査が終了した後に、墳丘を断ち割った時点で確認したため、中央部分については詳細は不明である。

墳丘上の土層は、表土下に淡明褐色砂混じり土が15～20cm堆積しており、南半ではその下面が地山となり、第１主体を検出した。北半の第２主体が造られている位置より北側には、約25cmの厚さで淡暗赤褐色土があり、墳丘を造った盛り土と判断される。

平坦面の南辺、３号墳の墳丘斜面が立ち上がる裾部で、幅60cm、深さ20cmの溝を７mにわたって検出した。この溝は、墳丘裾の曲線に沿って掘られたものではなく、尾根筋に直交する方向に、ほぼ直線的に掘削されていた。溝の両端は墳丘斜面にまで及んでいるものではなく、墳丘平坦面の中で終わっており、しかも溝の中央部分が最も深く、両端に向かうにつれて徐々に浅くなっていた。このような掘削のあり方から見て、雨水等を墳丘外に意図的に排水するために掘削されたものではなく、４号墳と３号墳を区画するための溝と判断される。溝内には暗黄褐色砂質土が堆積しており、２号墳の墳丘斜面から雨水と共に流出した花崗岩バイラン土が堆積したものと考えられる。

第１主体（第14図、図版第11－(1)・(2)）　二段に掘り込まれた主体部で、幅1.85m、長さ3.2m、深さ0.7mの一段目墓壙底の中央に、0.45m×2.0m、深さ最大で25cmの二段目の掘形を検出した。検出面より25～30cmの深さで掘り下げて、標高57.3～4mの９層上面付近で木棺を据えた

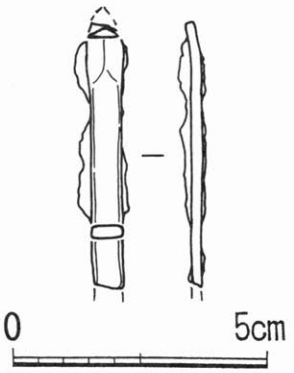


第14図　4号墳第1・2主体実測図

痕跡を検出した。第14図はその時点での実測図である。二段目の墓壙は、木棺据え付け痕の真下に位置する。二段目の墓壙底の規模から、0.4m×2.25m程度の木棺が復元できる。土層の観察では、二段目の掘形内に木棺を安置し埋め戻した後、木棺腐朽時に木棺内に陥没したのが2～7層の土砂、8・9層は墓壙内埋め戻し土が陥没時の影響をさほど受けずに残ったものと判断される。底面の傾斜は、西端が東端と較べて2cm、中央部と較べて4cmとわずかに高いことから、西頭位に葬られたものと判断される。掘削土中よりヤリガンナ1が出土した。

第2主体(第14図、図版第11－(3))　1.15m×2.25m、深さ25cmの土壙墓である。遺物は出土しなかった。

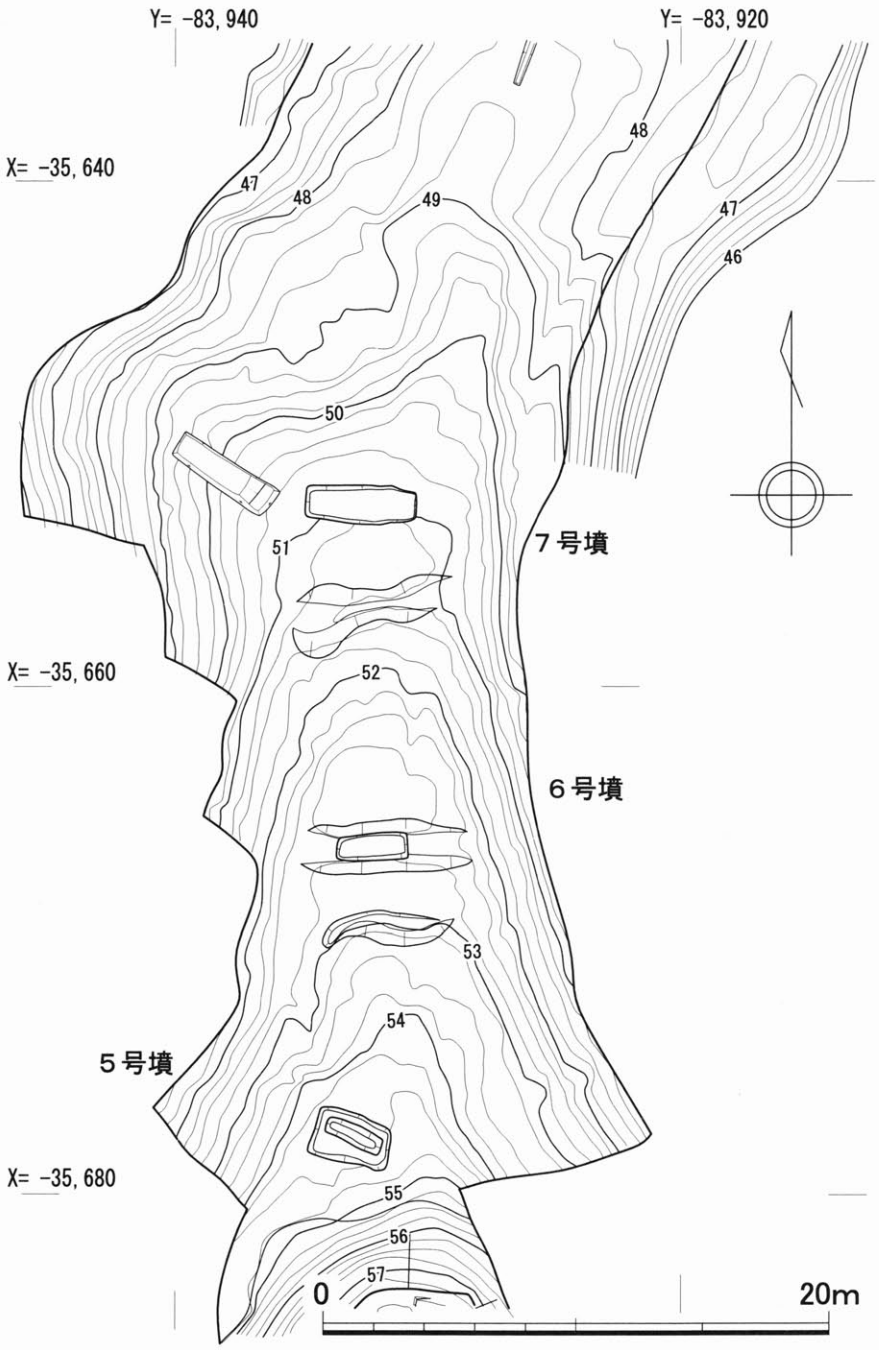
出土遺物　第15図は、第1主体から出土したヤリガンナである。先端部および体部は欠損している。現存長7.1cm、幅が1.05cmである。



第15図　4号墳出土遺物実測図

④5号墳(第16・17図、図版第2－(1)、9、12、13-(1))

墳丘　5号墳は、4号墳の北側に位置しており、4号墳とは高さ約3mの墳丘斜面で隔てられている。5号墳とこの北側にある6～8号墳は、南側に所在する2～4号墳と古墳の形状が異なる



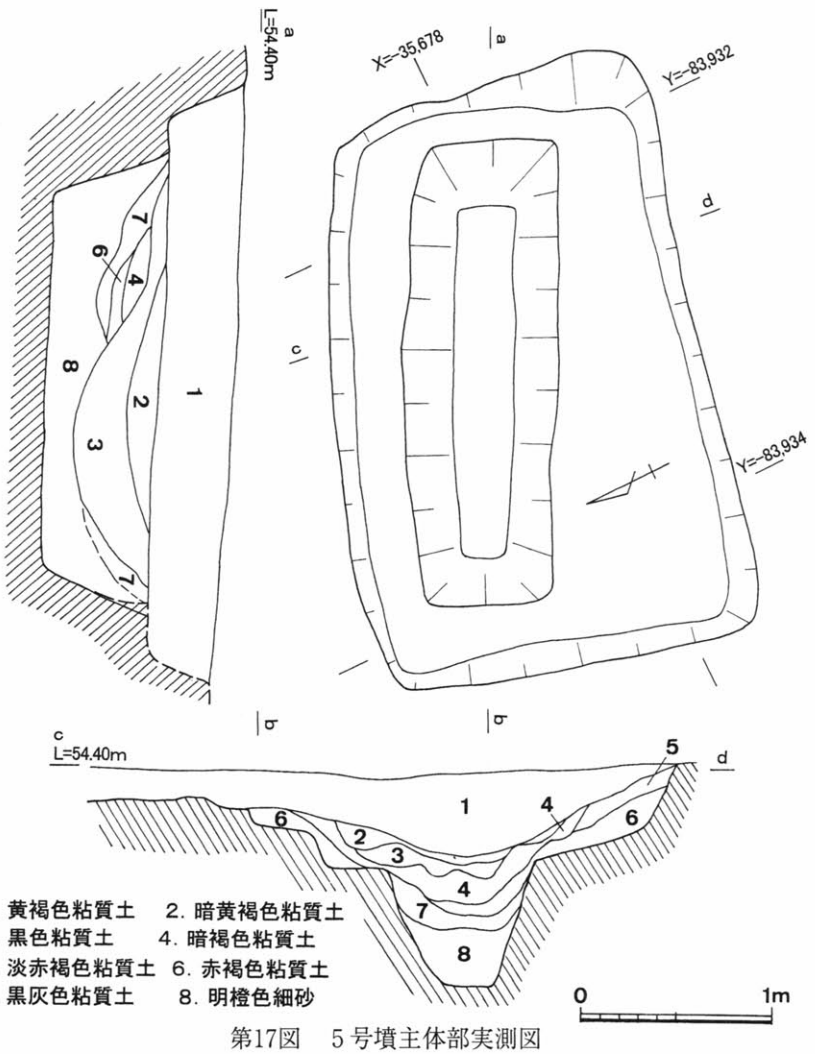
第16図　5～7号墳墳丘測量図

ものである。2～4号墳は、平坦な墳頂部と数mの比高差をもつ墳丘斜面を有しているのに対して、5～7号墳は墳頂部の平坦面が明瞭でなく、古墳と古墳の間の斜面も緩やかで高低差も小さいものである。また、3・4号墳は、平坦面を造り出す際に丘陵の低い方に盛り土をしていたが、5～7号墳、およびその北側にある8号墳は、墳丘に盛り土がなされず、すべて地山の削り出しにより墳丘を造っている。2～4号墳と較べて墳丘が低いため視覚的に貧弱な感じは否めず、墳丘の削り出しについても、さほど手を加えていないような印象を持つ。

5号墳と6号墳との間には、幅が最大で1.3m、深さ0.15mの溝が5.3mにわたって掘削されて、2基の古墳が区画されている。古墳の規模は、4号墳の墳丘裾から区画溝(溝心)の間が11m、幅については墳丘裾の傾斜変換点が不明瞭で、人為的な改変がどの範囲に加えられているのかは不明である。墳頂部の平坦面は南側に偏して南北7m、東西6mの台形で、この北側の区画溝までの3mの範囲は平坦面が崩れ、傾斜が強くなる。墳丘の高さは、溝底から1.8m、溝の肩部から1.5mである。

平坦面上で主体部1基を検出した。この主体部は4号墳の墳丘裾から3mの位置にあり、主体

部の北側６ｍは、空間地となっている。しかも丘陵尾根筋上にはなく、西側にややずれている。墳丘全体として見た場合、墳丘の西南部に偏って設けられている。しかし墳頂平坦面に限って見れば、そのほぼ中央に位置していると言える。平坦面には埋葬を行い、墳丘斜面には埋葬をしないと考えると、墳丘の大部分が空白で、西南部に寄って主体部が１基しか認められないことも納得できるものである。



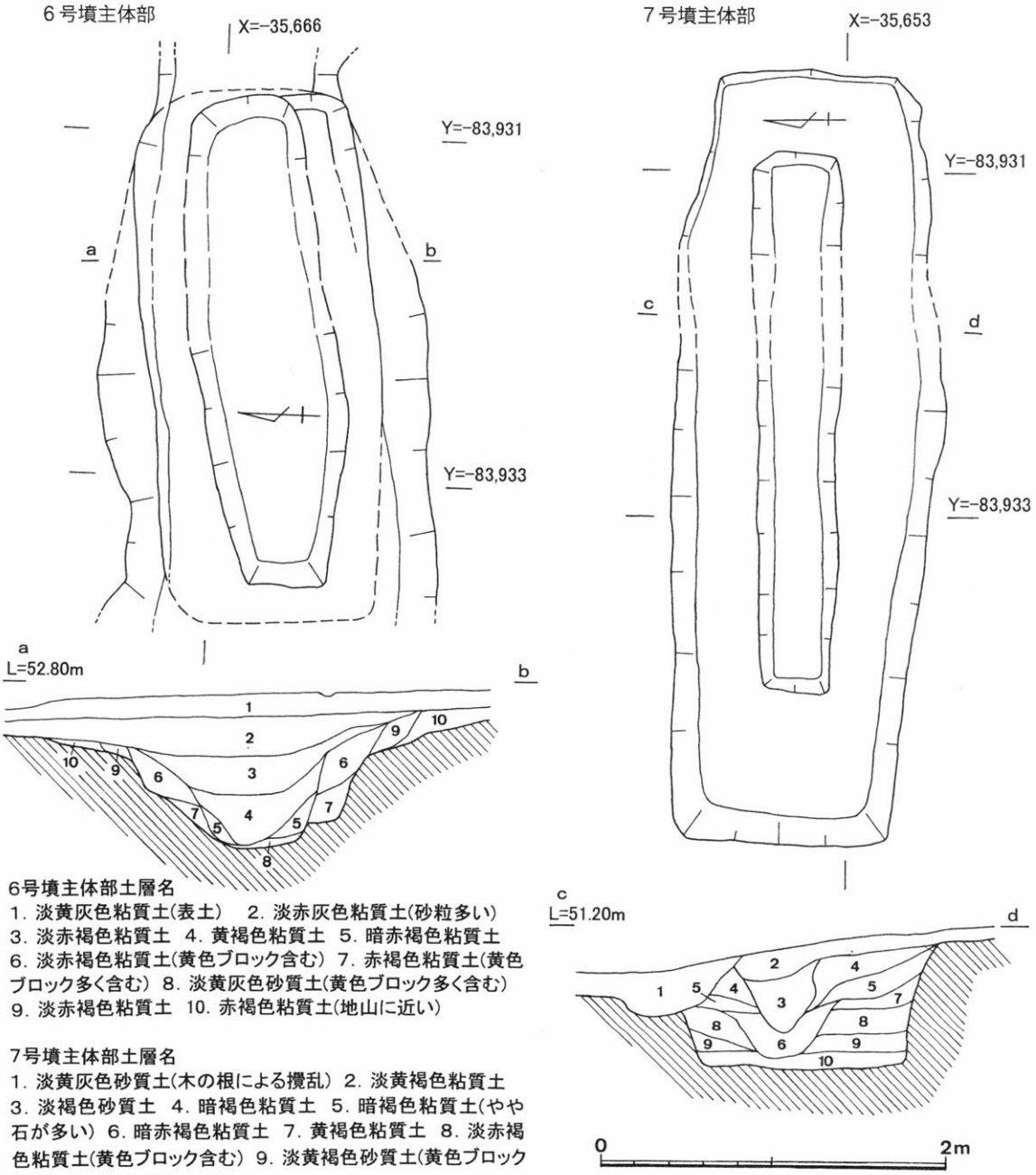
第17図　５号墳主体部実測図

主体部（第17図、図版第13－(1)）　2.0ｍ×3.1ｍ、深さ0.2ｍの墓壙内に、やや北側に偏して0.8ｍ×2.3ｍの土壙を検出した。１層は、後世に堆積した層である。２～４・７・８層は、陥没時に流入した土砂である。２・３・７層は、炭化物を多く含む層であった。５・６層は、墓壙の埋めた土砂で、陥没時に流れ込まず残った層である。また、８層内の下部で、土師器の破片が一点出土している。墓壙の深さが0.7ｍと深く、木棺の痕跡も確認できないことから、墓壙に直接蓋をして埋葬する有蓋土壙墓である可能性も考えられる。

⑤６号墳（第16・18図、図版第９、12、13-(2)）

墳丘　地山削り出しにより墳丘を形成している。北側と南側を溝によって区画されているのに対して、東・西側は調査範囲内においては、墳丘裾を形成するような傾斜変換点が見つからず、墳丘の東西方向の規模は不明である。墳丘の長さは、南北の区画溝心々で12.5ｍ、溝の肩部と肩部の間が11.4ｍである。墳丘の南側約3/5にあたる、南北７ｍ、東西７ｍのほぼ方形状に平坦面が広がっており、北側約2/5の４ｍの範囲は北に下る傾斜面をなしている。墳丘の高さは、北側の区画溝底より２ｍ、南側肩部より1.8ｍを測る。主体部は１基を検出したが、一見すると、台状部の南側1/4のところにあり、かなり南に寄せて造られているような印象をもつ。しかし、先述の墳丘平坦面に限って見ると、主体部はそのほぼ中央やや南側で検出したこととなる。

主体部(第18図、図版第９、12、13-(2))　上位には尾根を切るような東西方向の溝状にみえる掘形があり、その内部に幅1.4m、長さ2.8mの墓壙が掘り込まれていた。この二段墓壙の主体部は、土層の観察により、３層より下層が主体部に伴う埋土である。一段目の墓壙は、10層から掘り込まれていた。３～５層が木棺陥没時に棺内に流入した土砂の堆積である。６・７層が木棺を埋めた土、８層は砂質が強く、掘形内の最下層にわずかに堆積していることから、木棺を据えるために敷かれた整地土と考えられる。９層は一段目の墓壙の埋土である。10層は地山の直上にあり、土質も酷似していた。二段目の掘形の規模から、0.8m×1.8mの箱形木棺が納められていたものと推測される。



6号墳主体部土層名
1. 淡黄灰色粘質土(表土)　2. 淡赤灰色粘質土(砂粒多い)
3. 淡赤褐色粘質土　4. 黄褐色粘質土　5. 暗赤褐色粘質土
6. 淡赤褐色粘質土(黄色ブロック含む)　7. 赤褐色粘質土(黄色ブロック多く含む)　8. 淡黄灰色砂質土(黄色ブロック多く含む)
9. 淡赤褐色粘質土　10. 赤褐色粘質土(地山に近い)

7号墳主体部土層名
1. 淡黄灰色砂質土(木の根による攪乱)　2. 淡黄褐色粘質土
3. 淡褐色砂質土　4. 暗褐色粘質土　5. 暗褐色粘質土(やや石が多い)　6. 暗赤褐色粘質土　7. 黄褐色粘質土　8. 淡赤褐色粘質土(黄色ブロック含む)　9. 淡黄褐色砂質土(黄色ブロック含む)　10. 淡赤褐色粘質土

第18図　６・７号墳主体部実測図

⑥**7号墳**(第16・18図、図版第9、12、13-(3))

墳丘　7号墳の南辺は溝によって区画されているのに対して、北側には区画溝が造られていないが、49mから50.5mの等高線が密に巡っているように、墳丘斜面が見て取れる。ちなみに、49mの等高線の中央部分が抉られた形状になっているのは、木の根の伐痕のためである。北辺－西辺は丁寧に四角く成形されており、標高49m付近が傾斜変換点となっている。南側の区画溝心から49mの等高線付近までを墳丘と考え、墳丘の長さは10mを測る。東辺の墳丘裾は、49.5m付近で平坦面が形成されているのが見て取れるが、これは調査時における作業用の通路であり、墳丘裾の平坦面ではない。そこで、北東部の舌状の高まりに着目すると、この舌状の高まりは北方向に延びており、墳丘成形以前の形状を残しつつ陸橋として利用されたものと考えられる。この陸橋の東辺は標高49m付近にあり、この等高線がほぼ南北に走ることから、このラインを南に延ばした線上に墳丘裾が想定される。先の西側の裾との長さは、約15mである。この舌状の高まりの北端を見ると、49m付近で平坦になっているが、これは、この北側にある8号墳を造営した時の造作によるものであろう。

墳頂部は、墳丘の南側1/2程度が平坦面となっており、北側1/2は先述のように墳丘斜面となっている。平坦面の大きさは南北5m、東西8mで、墳丘の高さは2.3m程度である。主体部は古墳の南側に寄せられ1基を検出したが、5・6号墳と同じく、北側1/2を墳丘斜面で埋葬には用いられないと理解すると、墳頂平坦面のほぼ中央に位置していることになる。

主体部(第18図、図版第13-(3))　幅1.6m、長さ4.45m、深さ0.7mの墓壙である。墓壙内を10～40cm掘り下げたところ、8層上面よりやや掘り込んだ位置で木棺を埋設した痕跡を検出した。長さ3.1m、幅は最大で0.5mで、東側が西側に較べて約5cm幅広となっている。1・2層は主体部が完全に埋没した後に上位に堆積した土層で、3層以下が主体部に伴う土層である。土層の観察より、3～6層が木棺の陥没坑内に堆積した土層で、7～9層が木棺を納めた際に木棺と墓壙の間に詰められた土砂、10層が整地土と理解できる。木棺はこの土壙よりも一回り小さくなるものと推測されるが、棺痕跡等は確認できなかった。木棺を埋めた痕跡が東側でやや幅広であることから、東頭位に葬られたものと考えられる。主軸はほぼ東を向く。

出土遺物は全く認められなかった。

⑦**8号墳**(第19～23図、カラー口絵2、図版第9、14～18)

墳丘　8号墳は丘陵先端部に造られた古墳で、平面形は不整形な楕円形を呈する。墳頂部の平坦面は、東西14m、南北13mを測る。墳丘裾の傾斜変換点は明瞭ではなく、西側斜面では、標高46.7m付近で傾斜変換点が認められる。南側においては、墓壙より約10mの位置に、深さ1m程度の溝状の窪みが東側・西側から穿たれている。一方、尾根線上の北側斜面では、約3m下位にわずかな傾斜変換点を認めることができる程度であるが、この位置は南・西側の傾斜変換点と合致しない。

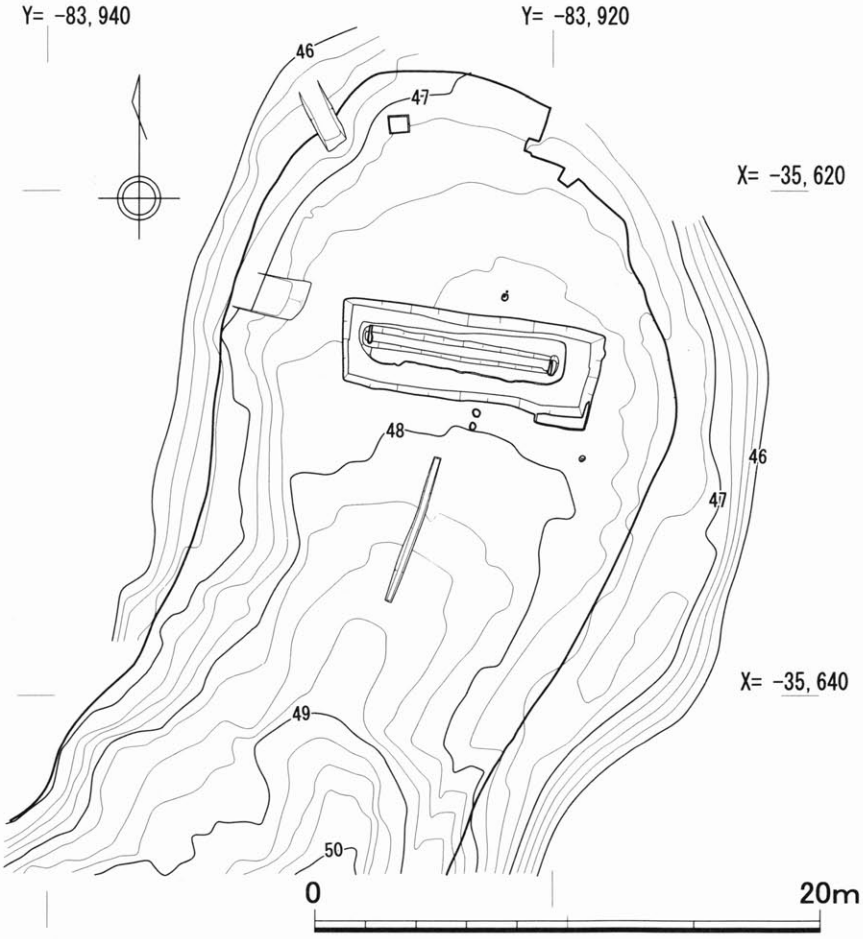
墳丘は、他の古墳と同様、地山を削り出して造っており、盛り土は認められない。墓壙の輪郭は、表土・淡灰褐色粘質土を深さ約20cmを掘削し、地山面で検出した。この淡灰褐色粘質土から

は土師器皿が出土しており、古墳に伴う盛り土ではない。また、墓壙上の包含層中からは家形埴輪片が40点程度出土した(第22図、図版第30)。埴輪片は細片に割れており、墓壙上に据えられた状態のものはなかった。この家形埴輪以外に埴輪の出土が無く、しかも中世段階の土器片と同じ層中から出土していることから、この古墳に伴うものか、後世に他の古墳からもたらされたものであるのかは判断はつかない。

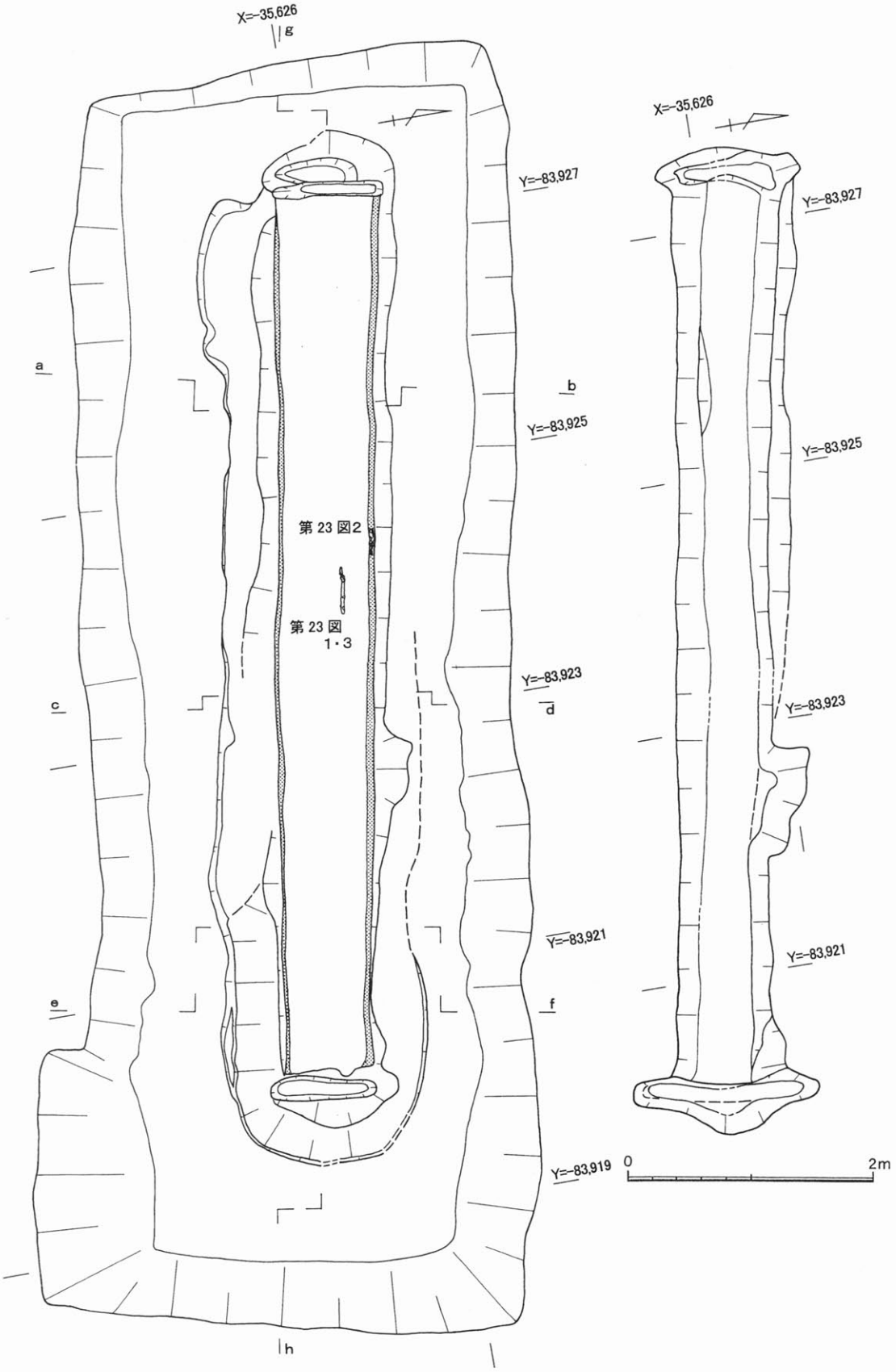
主体部の南側では、径15cm程度の小ピット４基を検出したが、遺物の出土もなく、直線的に並ぶものも認められなかった。８号墳に伴うものであるのかどうかを含めて、その性格は不明である。

主体部(第20・21図、カラー口絵２、図版第14～18)　幅4.1m、長さ10.4m、深さ1.2mを測る墓壙掘形内に、幅0.75m、長さ7.3mにおよぶ割竹形木棺が据えられていた。木棺は、一段目の墓壙の中央よりやや北西に寄って据えられていた。そのため、一段目の墓壙で設定した土層観察用畦が二段目の木棺を納めた墓壙の中心とずれる結果となった。そのため、一段目の観察用畦を除去したのち、改めて二段目の墓壙用の土層観察用畦を設定した。第21図の縦断・横断土層図は、それらを合成して作成したものである。それぞれの土層位置については、第20図に一段目と二段目の土層位置を折れ線で表示した。

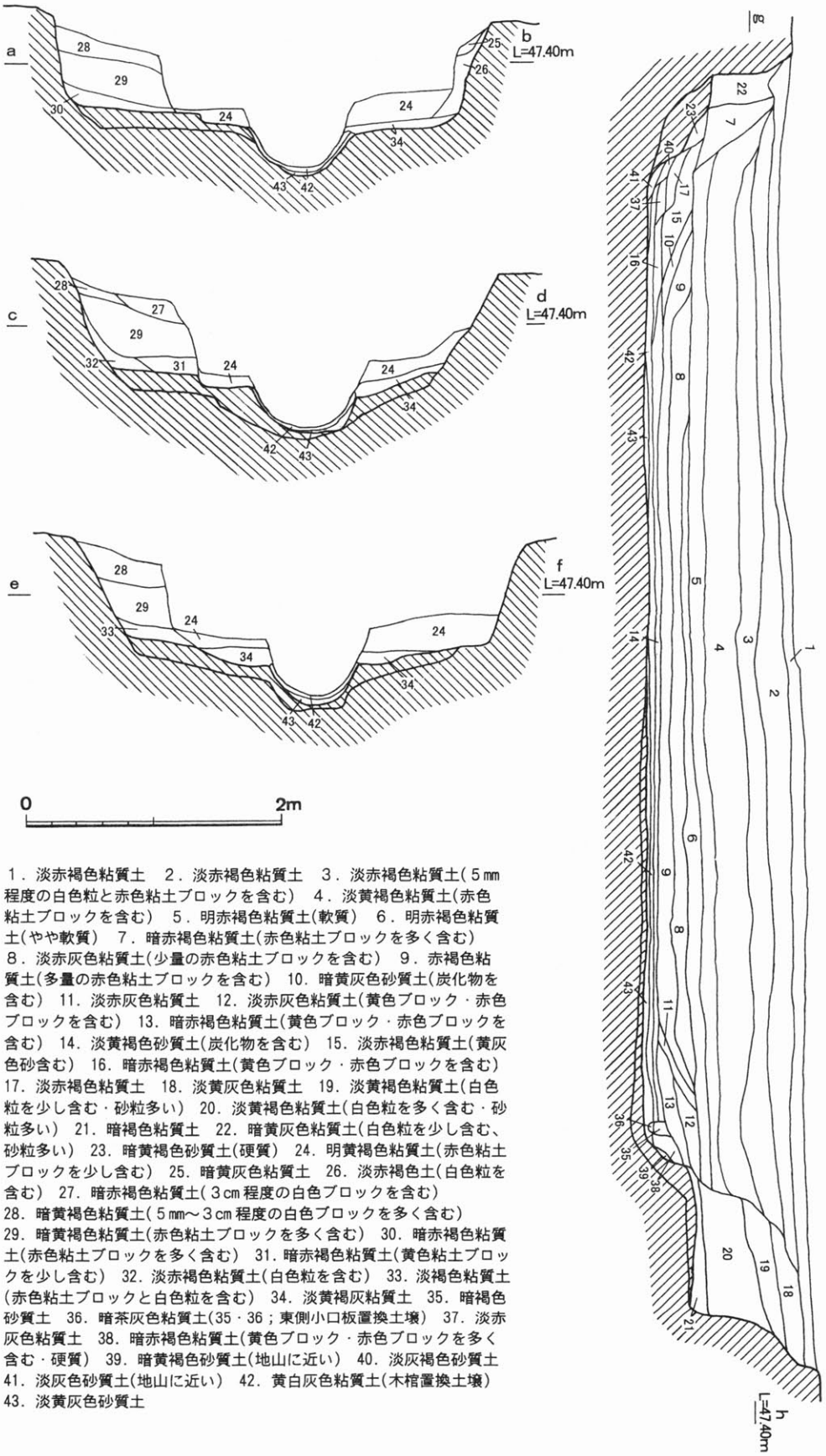
１層は、後世に堆積した土砂である。２～17層は、割竹形木棺を据えた後に、墓壙の上面までを埋めた埋土のうち、棺蓋が朽ちて棺内に落ちた後に陥没した土層である。18～32層は、棺蓋の陥没による影響がおよんでいない本来の墓壙の埋土である。33層は硬く締まっており、33層の上面がほぼ一段目の墓壙底と水平になっていることから、水平になるように整地した土と考えられる。この上面からは鉄鏃が出土している。35・36層は、東側小口板の据え付け穴と解釈した。38・39層は東側小口の板材を支えるた



第19図　８号墳墳丘測量図



第20図　8号墳主体部実測図(平面図)

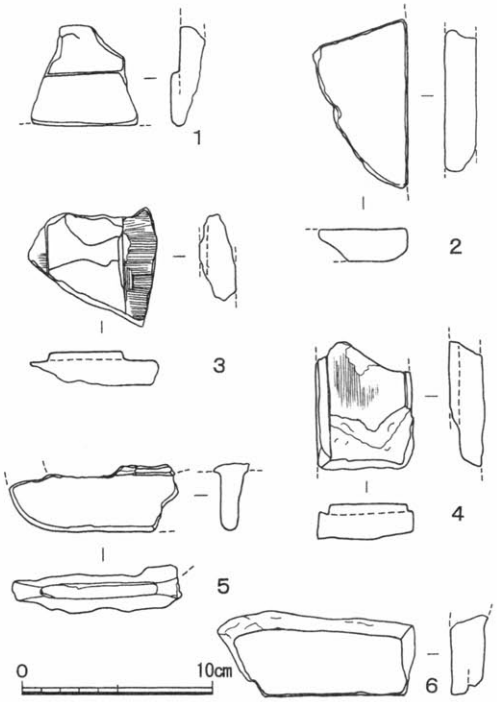


1．淡赤褐色粘質土　2．淡赤褐色粘質土　3．淡赤褐色粘質土(5㎜程度の白色粒と赤色粘土ブロックを含む)　4．淡黄褐色粘質土(赤色粘土ブロックを含む)　5．明赤褐色粘質土(軟質)　6．明赤褐色粘質土(やや軟質)　7．暗赤褐色粘質土(赤色粘土ブロックを多く含む)　8．淡赤灰色粘質土(少量の赤色粘土ブロックを含む)　9．赤褐色粘質土(多量の赤色粘土ブロックを含む)　10．暗黄灰色砂質土(炭化物を含む)　11．淡赤灰色粘質土　12．淡赤灰色粘質土(黄色ブロック・赤色ブロックを含む)　13．暗赤褐色粘質土(黄色ブロック・赤色ブロックを含む)　14．淡黄褐色砂質土(炭化物を含む)　15．淡赤褐色粘質土(黄灰色砂含む)　16．暗赤褐色粘質土(黄色ブロック・赤色ブロックを含む)　17．淡赤褐色粘質土　18．淡黄灰色粘質土　19．淡黄褐色粘質土(白色粒を少し含む・砂粒多い)　20．淡黄褐色粘質土(白色粒を多く含む・砂粒多い)　21．暗褐色粘質土　22．暗黄灰色粘質土(白色粒を少し含む、砂粒多い)　23．暗黄褐色砂質土(硬質)　24．明黄褐色粘質土(赤色粘土ブロックを少し含む)　25．暗黄灰色粘質土　26．淡赤褐色土(白色粒を含む)　27．暗赤褐色粘質土(3㎝程度の白色ブロックを含む)　28．暗黄褐色粘質土(5㎜～3㎝程度の白色ブロックを多く含む)　29．暗黄褐色粘質土(赤色粘土ブロックを多く含む)　30．暗赤褐色粘質土(赤色粘土ブロックを多く含む)　31．暗赤褐色粘質土(黄色粘土ブロックを少し含む)　32．淡赤褐色粘質土(白色粒を含む)　33．淡褐色粘質土(赤色粘土ブロックと白色粒を含む)　34．淡黄褐灰粘質土　35．暗褐色砂質土　36．暗茶灰色粘質土(35・36；東側小口板置換土壌)　37．淡赤灰色粘質土　38．暗赤褐色粘質土(黄色ブロック・赤色ブロックを多く含む・硬質)　39．暗黄褐色砂質土(地山に近い)　40．淡灰褐色砂質土　41．淡灰色砂質土(地山に近い)　42．黄白灰色粘質土(木棺置換土壌)　43．淡黄灰色砂質土

第21図　8号墳主体部実測図(土層断面図)

めの裏込め土と判断した。また、西側小口の据え付け穴は断面では確認できなかったが、37層が相当するものと推測する。このことから、40・41層が小口板の裏込め土の可能性が考えられる。42層は、割竹形木棺の身の部分と考えられ、黄白灰色粘質土に置き換わっており、置換土壌の厚さは2cm程度認められた。割竹形木棺は、幅は西側で約0.8m、東側で約0.6mを測り、東側が狭くなる。このことから、頭位は西側であったと考えられる。46層は棺を納める際に墓壙底に敷かれた整地土と判断した。割竹形木棺の下位及び上位には、粘土で被覆した痕跡は認められなかった。木棺内部に朱の付着は認められなかった。

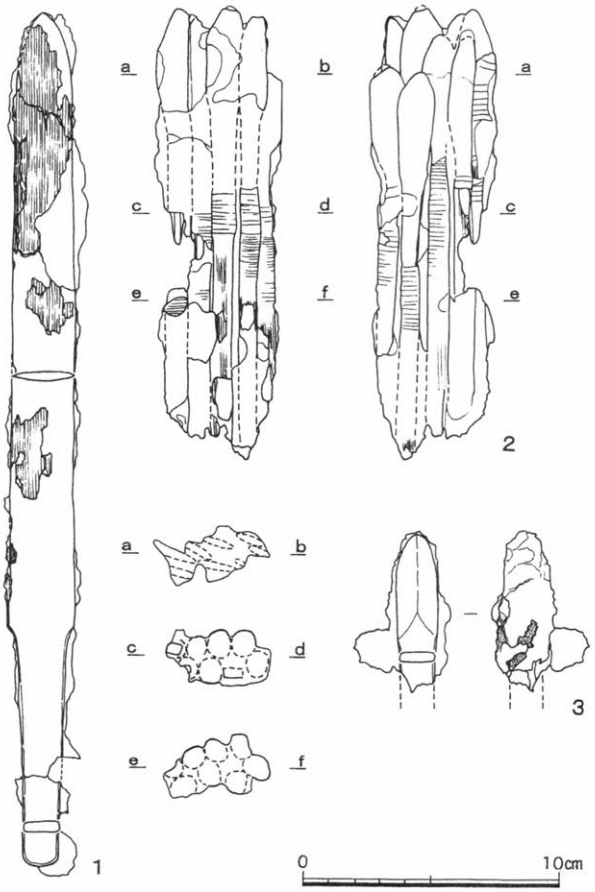
割竹形木棺のほぼ中央北側、西頭位で葬られた被葬者の右側で、木棺内部より、鉄剣1振りとヤリガンナが圧着された状態で出土し、棺外の木棺に接して鉄鏃一括(8本)が出土した。ともに切っ先は東の方向を向ける(図版第18-(1)・(2))。



第22図　8号墳出土遺物実測図；家形埴輪

出土遺物(第22・23図、図版第30)　第22図は家形埴輪の実測図である。1は屋根の軒先部分、2は破風板、3・4が柱および壁部分、5が裾廻りの突帯、6が埴輪の基部である。5の突帯はL字状に屈曲する部分であり、家のコーナー部分を巡るものである。4の柱部分には、裾廻り突帯が剥離した痕跡が認められるが、この柱部は突帯を越えてさらに下方向にも続いていくものである。このことから、この柱は二階の床付近の柱であるものと推測され、これらの家形埴輪は重層の建物であったものと推測される。

第23図は棺外および棺内より出土した鉄器の実測図である。1は鉄剣で、全長38.6cm、刃部の幅が2.6cm、茎の長さが9.4cmである。目釘穴は錆のため、確認できない。切っ先から刃部全体に木質が残っており、鞘に納められていたものと判断される。2は鉄鏃で、錆化して8本が一括となったもので、矢柄と接合部の桜の樹皮が良好に遺存している。保存



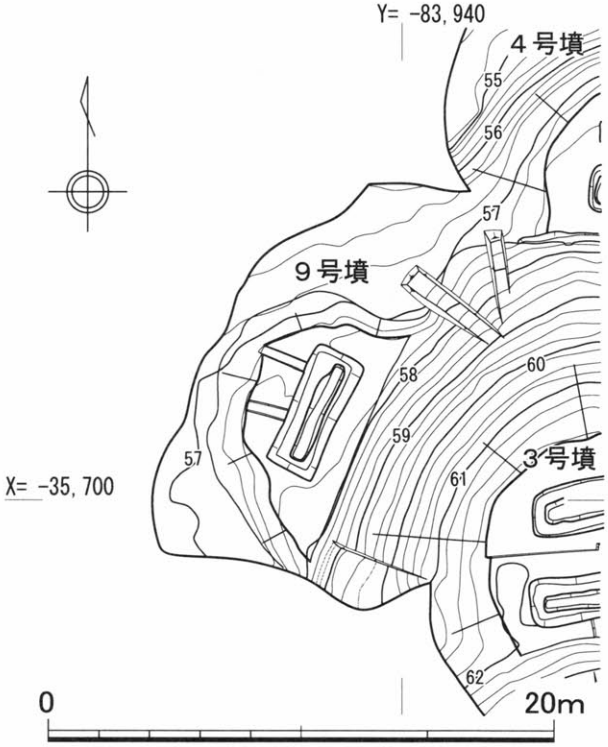
第23図　8号墳出土遺物実測図；鉄器

処理を行うため、錆のクリーニングは矢柄を壊さない程度にしか行っていないため、すべての鏃についてその形状を明らかにしたものではない。観察できる鏃は、柳葉式のもので逆刺がつかないタイプである。刃部が4.0cm、刃部幅1.9cmである。最もよく残っているものは、矢柄を含めて長さ9.3cmである。3はヤリガンナの刃部と判断される鉄器である。表面が皮状の皮膜と錆に覆われており、幾分、推測を交えたところがある。鉄錆の表面に木目状の模様が見て取れ、出土状況が鉄剣と一体になって出土したことから、鉄剣の装具の模様が圧痕として写し取られたものと判断される。長さは5.6cmで、柄の部分の幅が1.3cmである。

⑧**9号墳**(第24・25図、図版第2-(1)、3-(1)、19)

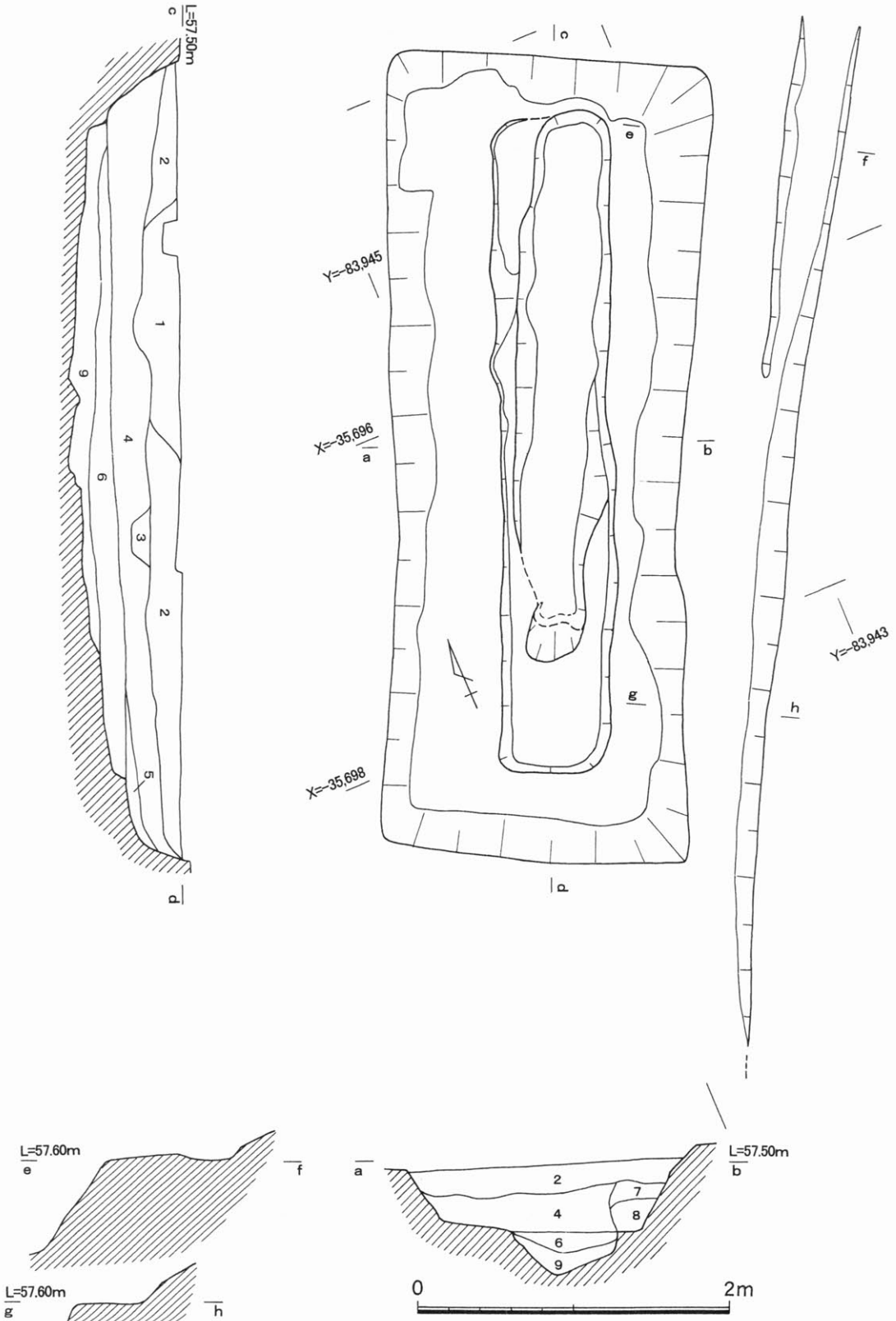
墳丘　9号墳は3号墳の北西側、4号墳南西側に、4号墳と同じく標高58m付近に造られた古墳である。谷奥古墳群の主たる丘陵の尾根筋は、2号墳から3～8号墳へと延びており、この9号墳はそこからはずれた小さな尾根筋に位置している。墳丘上の土層は、表土下に斜面からの流出土である暗黄褐色土が20～30cmの厚さで堆積しており、東半部はその下が地山面となる。主体部中央より西半には、暗黄褐色土の下に明褐色土が厚さ20cm堆積しており、東側の地山面と西側の明褐色土上面がほぼ水平となることから、この明褐色土は墳丘盛り土と理解できる。古墳の墳頂平坦面は南北8.2m、東西4.5mの半円状を呈している。平坦面の中央で、主体部1基を検出した。

3号墳の墳丘裾部と9号墳の平坦面との境で、溝1条を検出した。この溝は、幅40cm、深さ最大で5cm程度と浅く、6.6mにわたって直線的に検出した。主体部と平行しており、傾斜変換点よりも斜面側を浅く掘り込んでいる。北半部では両肩を検出したが、南半では東肩、3号墳の墳丘斜面側の肩部だけを検出し、西側の肩は不明瞭である。断面で見ると、墳丘裾を15～20cmの高さで斜めにカットしたような状況であるが、きっちりと削り込んだようなものではない。溝がしっかりと掘られていないことから、排水を目的としたものとは考えられない。内部には墳丘斜面に堆積している土砂と同じく、暗褐色土が堆積していた。



第24図　9号墳墳丘測量図

主体部(第25図、図版第19)　幅2.1m、長さ5.1m、深さ0.55mの墓壙内底面で、やや東側に偏して幅70～75cm、長さ4.2m、深さ5～15cmの二段目の掘形を検出した。二段目の掘形の平面形は、両小口が隅丸になっており、この北側3/4は軸がやや東に振れて、三段目の土壙状を呈している。長さは3.5m、幅60cmで、二段目墓壙底より12～30cm掘り下げられている。二段目の掘形の



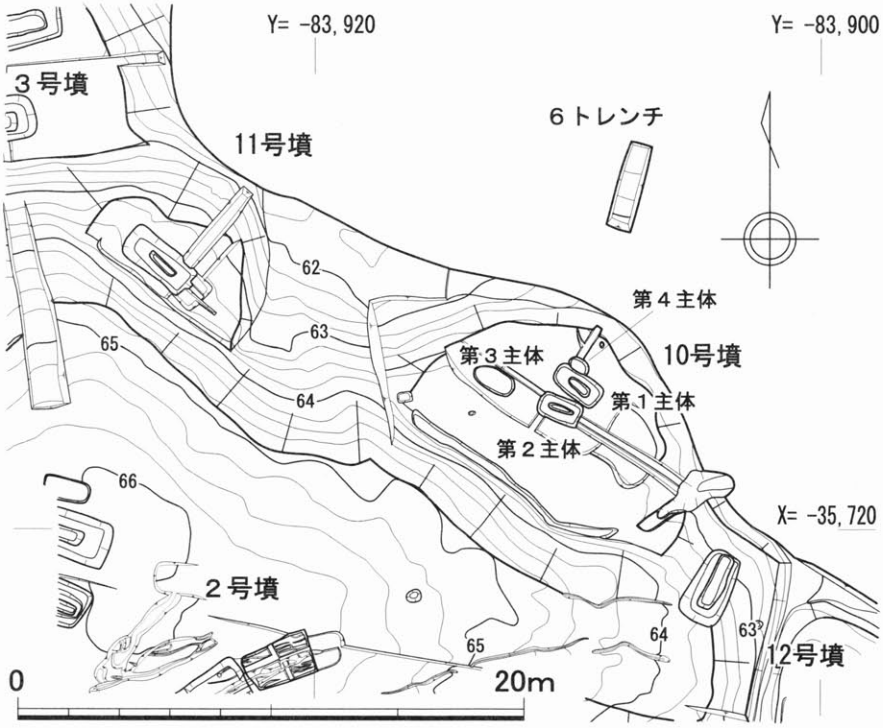
1．暗黄茶色土（有機質による汚れあり）　2．暗黄茶色土　3．淡暗褐色土
4．明黄褐色土　5．淡褐色砂質土　6．淡黄茶色砂質土　7．淡暗褐色土（さくい）
8．淡暗褐色土（灰白色砂混じり）　9．淡黄灰色砂質土

第25図　9号墳主体実測図

底面が南側の平坦面よりもやや深く掘り窪められ、横断面で見ると、底面の中央部分が最も深くなっており、しかも凸凹で、平坦には掘られていない。このままの形状では木棺を据えるのに不適当であること、この掘形状の落ち込みには淡黄灰色砂質土(９層)で埋められており、水はけのよい土砂で埋めていることから、湿気抜き等の目的で掘られたものと判断する。木棺は、三段目の掘形内に一旦土砂を入れて平らに均した９層上面・６層下面に据えられたものと判断する。１～６層が木棺陥没坑内に堆積した土砂であり、横断土層では、木棺を押さえたと判断される７・８層が認められる。この土壙の規模から、0.7m×3.2m程度の木棺が据えられたものと考えられるが、その種別については不明である。二段目の掘形の底面の高さに木棺を据えたと判断されることから、この掘形に着目すると、平面形は南側と較べて、北側が約５cm幅広であることと、北側の底面のレベルが約３cm高いこと、北側に湿気抜きの施設を設けていることから、北側頭位に葬られたものと判断される。遺物の出土はなかった。

⑨**10号墳**(第26～28図、図版第２-(2)、３-(1)、20、21)

墳丘　10号墳は２号墳の北東斜面に造られた古墳で、墳頂平坦面は７m×12mで半円状を呈している。２号墳の墳丘を削って造られていることから、２号墳に後出するものと判断される。墳丘は主として地山の削り出しであるが、北東部分の平坦面先端部のみ若干の盛り土を行っている。丘陵の主尾根からはずれた位置に造られているにも関わらず、墳丘平坦面はほとんどが地山である。２号墳との間は、最大1.7mの崖面となっており、かなりの土量を削り出したものと判断される。また、西北側の墳丘斜面もまた地山で形成されているが、この北西側の11号墳との間には小さな谷地形となっており、この部分についてもかなり人為的な手を加えられているものと判断される(11号墳の項参照)。



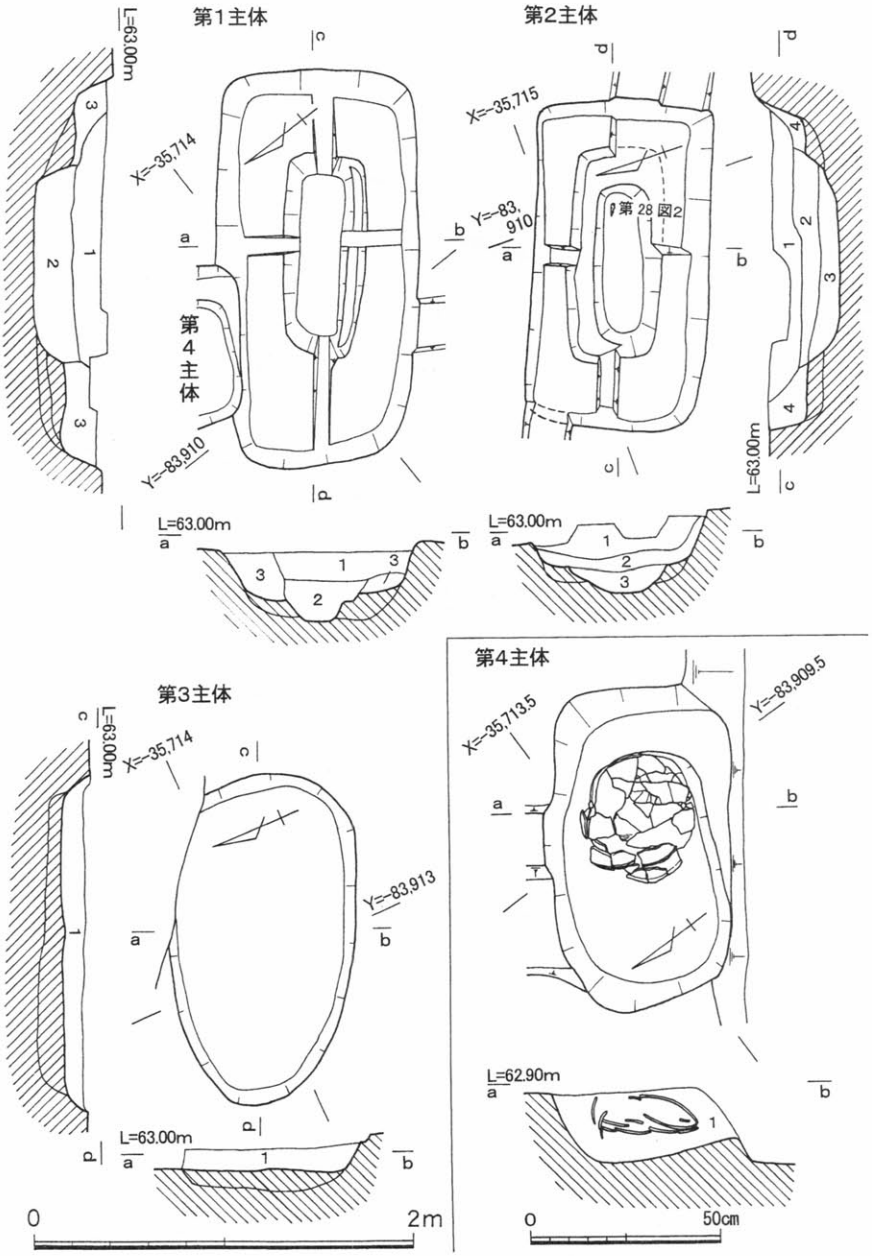
第26図　10・11号墳墳丘測量図

２号墳側の墳頂部南辺および東辺には、区画溝が掘削されている(図版第21-(2))。南辺の溝は、幅50cm、深さ最大で15cmで、中央部分が最も低く、北・南に向けて浅くなる。9.7mにわたって検出したが、北西端は墳丘斜面の手前で終わっており、南東端については約１mの間途切れて、東辺を区画する溝となっている。東辺溝

は墳丘斜面の等高線に直交して掘られており、北に向けて深くなって、その先端部分は調査地外に延びる。長さ3.5mにわたって検出した。東辺溝については、雨水を墳丘外に速やかに排出するためのものと言うことはできる。しかし、南辺溝と東辺溝は平面的な配置を見ると両溝が一体のものとして掘削されたと判断できる位置関係にあること、それにも関わらず南辺溝と東辺溝とは接合しておらず南側斜面から流れ落ちた雨水は東辺溝に導かれないこと、南辺溝はその中央部分が最も深く掘削されていることから、全体として見た場合、これらの溝は雨水を排水するのに適したものではない。4・9号墳と同じく、区画溝と判断するものである。

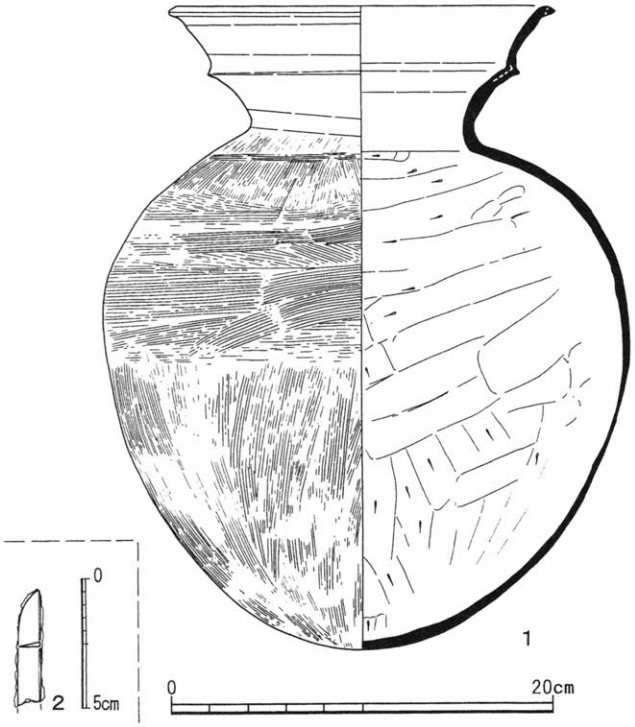
10号墳では、木棺2基、土器棺1基、土壙1基を検出した。これらの木棺・土壙の規模から、小児ばかりが葬られたものと推定される。

第1主体（第27図、図版第21-(1)）　平坦部のほぼ中央で検出した主体部で、第4主体と重複関係を有し、第4主体が後出するものである。幅0.9～1.1m、長さ2.1m、深さ20cmの墓壙底面に、0.45m×1.05m、深さ20cmの二段目の墓壙を検出した。二段目の墓壙は地山面から掘り込まれている。1・2層が木棺陥没坑内に堆積した土砂、3層が木棺を埋めた土砂と判断され、掘形の形状から、20cm×70cmの箱形木棺が納められていたものと推定される。遺物の



第1主体土層；1．暗黄褐色砂質土（軟）　2．赤褐色土混じり黄褐色土　3．黄褐色土混じり赤褐色土
第2主体土層；1．赤褐色混じり黄褐色土　2．赤褐色混じり黄褐色砂質土　3．淡赤褐色砂質土
4．淡明褐色土
第3主体土層；1．淡明黄褐色土
第4主体土層；1．淡赤褐色土

第27図　10号墳第1～4主体実測図



第28図　10号墳出土遺物実測図

出土はなかった。

第２主体(第27図、図版第21-(1))　墳頂部やや南側で検出した主体部で、0.9m×1.75mの墓壙内で、0.35m×0.85mの二段目の墓壙を検出した。二段目の墓壙を検出したことと、土層の観察により、木棺内に落ち込んだと判断される１～３層と木棺を裏込めしたと判断される４層とを確認したことから、箱形木棺が納められていたと判断される。箱形木棺の規模は、二段目の墓壙の大きさから、0.25m×0.75m程度に復元できる。刀子１点が出土した。

第３主体(第27図、図版第21-(2))　平坦面の西側で検出した主体部で、1.0m×1.75m、深さ15cmの土壙墓である。

第４主体(第27図、図版第21-(1)・(3))　第１主体と重複関係を有し、第４主体が先行するものである。0.5m×0.85m、深さ20cmの墓壙内に、甕(第28図１)が西側に口を向けて、ほぼ完形で納められていた。甕は土圧により押し潰されていた。小児用の土器棺と判断される。

出土遺物(第28図、図版第30)　第28図１は第４主体から出土した二重口縁を有する土師器甕で、ほぼ完形である。口縁端部はやや外側に引き出されており、頸部もやや太い印象を持つ。体部外面は細かいハケメで、内面はケズリにより調整している。口径は20.2cm、頸部が11.7cm、器高が33.8cmである。淡茶褐色に発色しており、布留Ⅱ式の範疇のものである。２は第２主体から出土した刀子である。刃部のみの出土で、全長6.0cm、幅が1.2cmである。

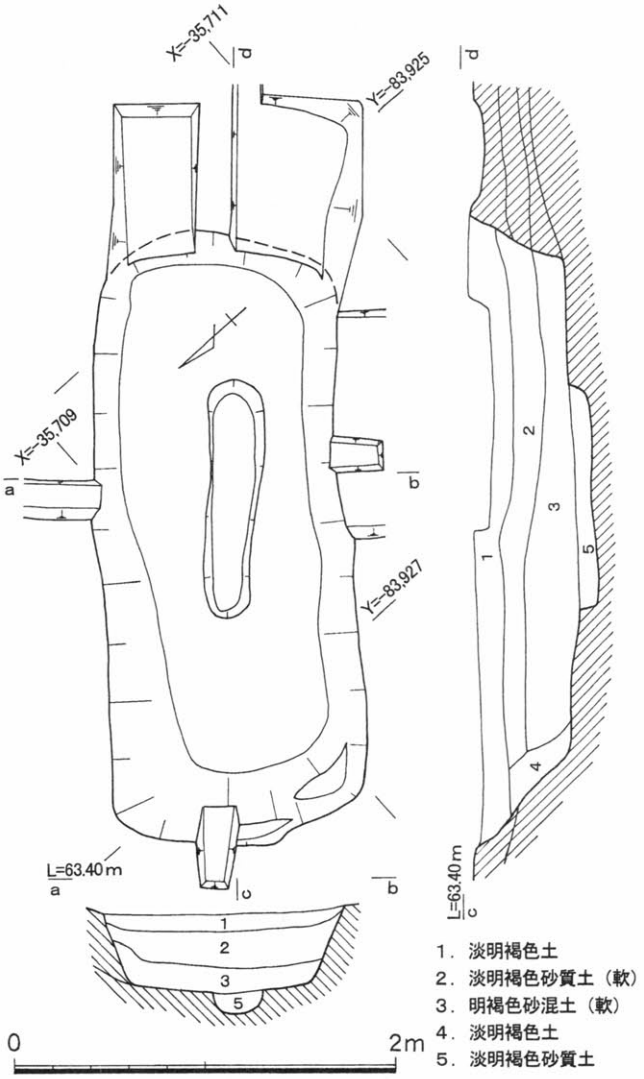
⑩11号墳(第26・29図、図版第３-(1)、22)

墳丘　11号墳は２号墳の北東部にあり、３号墳と10号墳の間に位置する。墳丘を断ち割って土層を観察すると、主体部北辺付近より北側で約50cm盛り土を行っていたが、他はすべて地山を削り出しで墳丘を構築していた。墳頂部は４m×７mの半円状を呈しており、墳丘の高さは２mである。主体部１基を検出した。

２号墳と10・11号墳の先後関係について見ておきたい。11号墳の西北側にある３号墳と２号墳の間は斜面で隔てられているが、この斜面にある等高線の下半分、62～63mの等高線は、そのまま11号墳の墳丘斜面に巡っており、２号墳の等高線と11号墳の北側斜面の等高線とは整合している。それに対して、２号墳の上半分の等高線、63～65mの等高線は11号墳の直上で幅が狭くなっており、傾斜を強めている。これらの等高線のあり方から、２号墳・３号墳よりも11号墳が後出するものと考えられる。さらに、11号墳の北斜面を巡る等高線は、東斜面で急激に曲げられているので、10号墳と11号墳の間の谷地形も、両古墳が造られる際に大きく手を加えられたものと推

定される。以上をまとめると、おそらくまず2号墳、次いで3号墳が造られ、その時には11号墳から10号墳はなく、両古墳を覆い包むような丘陵斜面――なだらかな斜面が2号墳から北東側に広がっていた。10・11号墳を造築する際には、それぞれの墳丘の上に位置する2号墳の斜面を削り取って平坦部を確保し、さらに10号墳と11号墳との間の斜面を深く削り込んで、谷状の地形へと改変したものと復元できる。

主体部(第29図、図版第22)　墓壙は墳頂部中央で検出した。東南側の平面形を誤認して調査を進めたため、一部掘りすぎた部分がある。一段目の土壙の規模は、長さ3.2m、幅は東辺で1.3m、西辺で1.35mで、西北部の斜面は他と較べてやや緩やかである。一段目の墓壙の底面を見ると、東部が幅90cm、西部が80cmと、東側が幅広となっている。二段目の掘形ラインも同じく、東側が幅広となる土壙である。長さ1.25m、幅20～30cm、深さ10cmを測る。この掘形は木棺を納めるには小さ過ぎるものである。

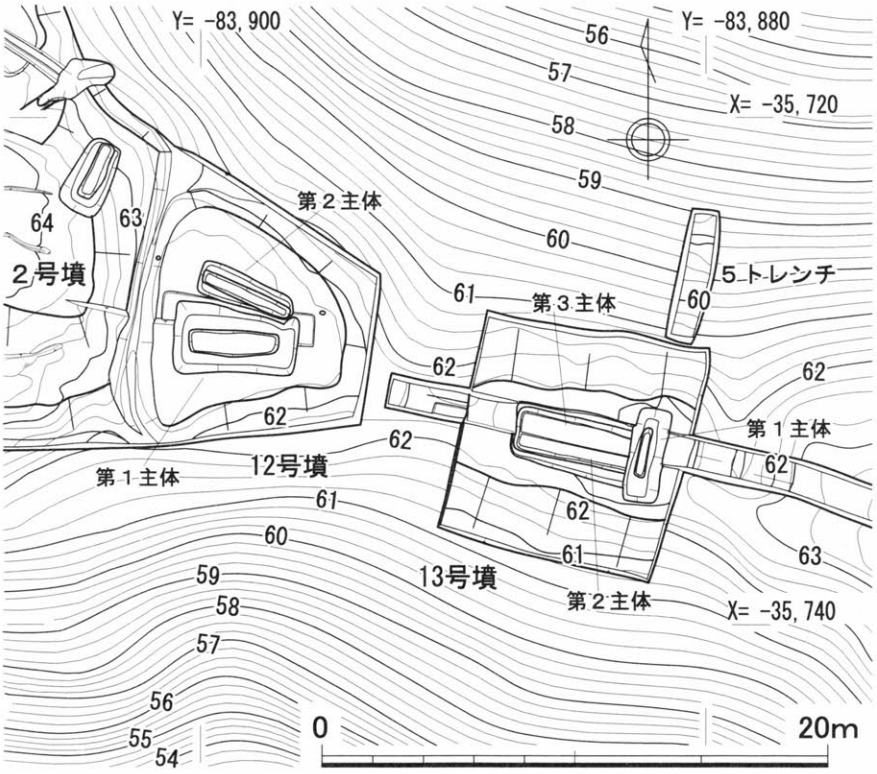


第29図　11号墳主体部実測図

13号墳第1主体でも同様の小土壙を検出したが、同じく砂質の強い土で埋まっていた。そのため、湿気抜きの施設と判断するものである。以上のことから、一段目の墓壙内に木棺を納めたものと推測されるが、木棺の痕跡を平面的にも土層の観察でも確認できず、内部主体は不明である。掘形の形状と墓壙底の高低差より、東南頭位であったと判断される。遺物の出土はない。

⑪12号墳(第30～32図、図版第2-(2)、3、23)

墳丘　12号墳は、2号墳の西側に造られた古墳で、すべて地山を削り出して成形されている。2号墳との間は幅1mの直線的な溝で区画されている。東側の13号墳との間は、深さ0.3m、幅約2.6mの溝によって区画されている。この溝は、調査着手前の現地表面でも確認でき、幅3m、深さ20cmの窪みとして観察することができた。墳丘の長さは、東西の区画溝の溝心々で約10.5mを測る。北と南の墳丘裾は、傾斜変換点が認められないため不詳である。墳頂部は南北8.5m、東西7.5mの三角形に近い台形状を呈しており、2号墳が造られた丘陵裾が、12・13号墳の間で狭くなって収束していることから、この墳形は元々の地形に規制されたものと考えられる。重複して造られた2基の主体部を検出したが、試掘トレンチにより重複を有する部分を消失してしま



第30図　12・13号墳墳丘測量図

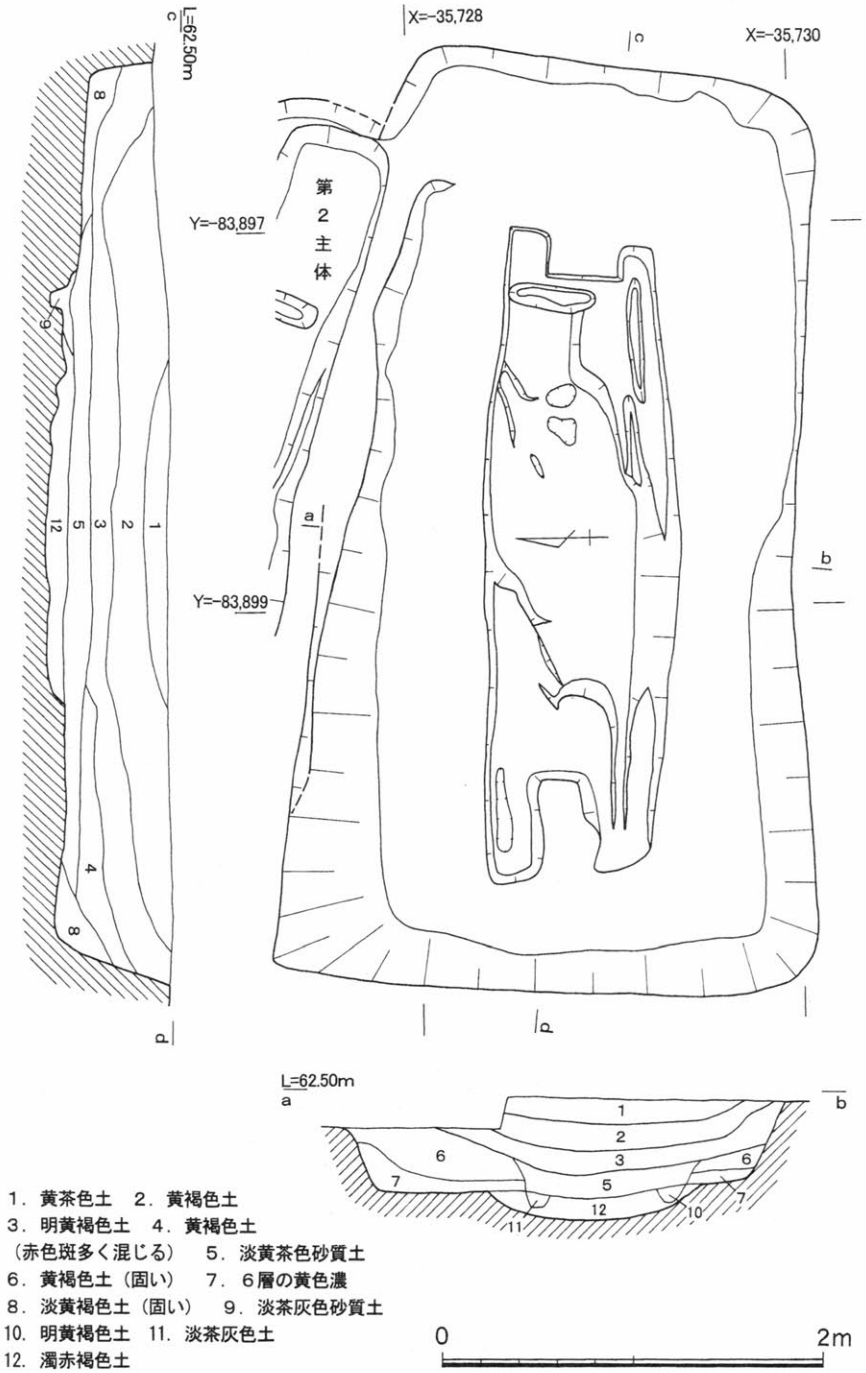
い、先後関係を確定できなかった。

第１主体（第31図、図版第23-(1)・(2)）幅2.2～2.8m、長さ4.85m、最大の検出高60cmの墓壙底で、箱形木棺（H型）を納めた痕跡と判断される土色・土質の違いを検出した。木棺の痕跡は12層上面で検出した。木棺の形状に合わせて深さ２～15cm程度の窪み状の土壙を掘削しているが、その底面は不整形で凸凹である。この土壙を12層の濁赤褐色土で埋め戻して、一段目の墓壙底を平らかにし、その上に木棺を据えつけるものである。この12層は木棺を据えるための整地土と判断され、部分的に側板や小口板の圧痕と判断される溝を検出した。土層の観察により、１～５層が木棺陥没坑内堆積土、６～８層が木棺を据えつけた土砂と判断した。木棺が土壌化した土層と判断される土層も観察され、９層が南側小口板、10・11層が木棺の側板が土壌化したものと考えられる。木棺の圧痕溝やその掘形の形状より、内法0.6m×2.4m程度の木棺が納められたと復元できる。一段目の墓壙底の傾斜は東が約10cm高くなっていることから、東頭位に葬られたものと判断される。遺物は出土しなかった。

第２主体（第31図、図版第23-(1)・(3)）　第１主体の北側に位置しており、幅1.3m、長さ3.95m、深さ最大で40cmの墓壙内のほぼ中央に、幅0.7m、長さ3.7m、深さ25cmの二段目の墓壙を検出した。東西の小口側は一段目の墓壙から段を有さないで掘削されている。二段目の墓壙底面では小口板をはめ込んだと判断される溝状の土壙（長さ35cm、幅15～20cm、深さ12～14cm）を２ヶ所で検出し、その距離から内法の長さ1.5mの木棺が据えられていたと復元される。土層の観察では、12層が小口板を差し込んだ坑の間に分布していることから、棺身が土壌化したものと判断した。横断土層を見ると、この12層は下に丸くなっていることから、割竹形木棺が納められていたものと推測される。１～５層が木棺陥没坑内に堆積した土砂、６～11層が木棺を押さえ、埋め戻した土砂、13層が小口板が土壌化したもの、14層が木棺を据えるための整地土と判断される。棺を納めた墓壙底が西に約８cm低くなっていることから、東頭位に葬られたものと復元できる。遺物は出土しなかった。

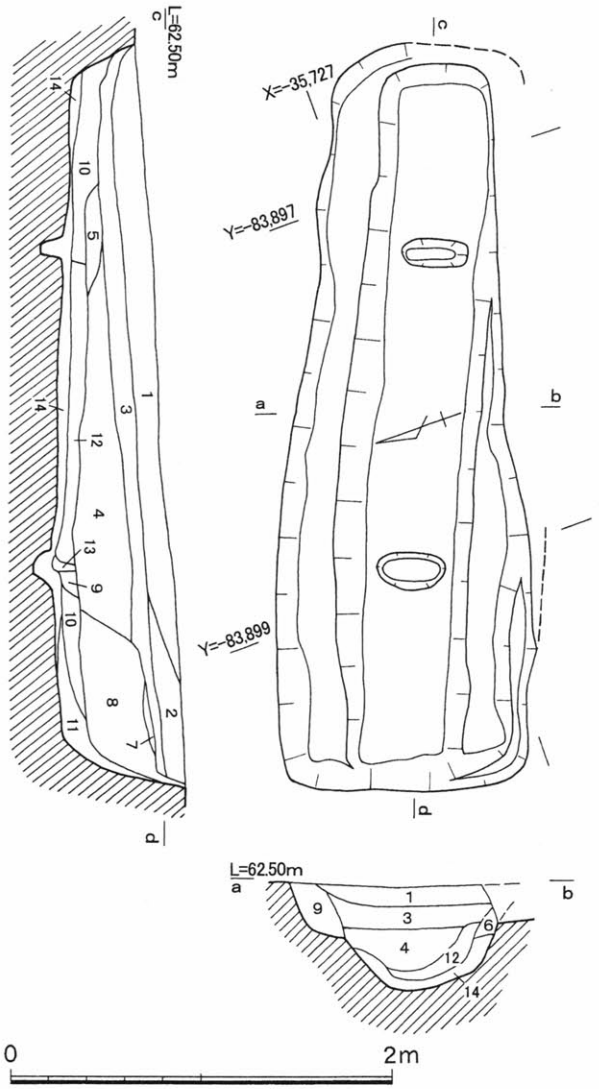
⑫13号墳(第30、33～36図、図版第２-(2)、３、24、25)

墳丘　13号墳は12号墳の東側に位置し、墳丘は盛り土が全く認められず、地山を削り出して成形したものである。東西の溝は、それぞれ現地表面で幅５m、３m、深さ0.7m、0.2mの溝状の窪みが観察された。調査により、西側の12号墳とは幅約2.6m、深さ0.3mの南北溝で区画されており、東側は幅3.5m、深さ60cmの溝によって区画されている。それに対して、北・南辺は地山を削り出しただけで、墳丘裾は、調査地内に明瞭な傾斜変換点がなく、不明である。東西長は、溝の心々で13.5mを、溝の肩部の間は10mを測る。墳丘の高さは、西側の区画溝の底から測ると70cm、肩部から測ると40cm程度である。墳頂部の平坦面は南北４m、東西９mと細長い方形である。平坦面のほぼ全域を利用して、３基の主体部が設けられていた。これらは重複関係を有しており、東西方向に並ぶ２基のうち、北側の第３主体、南側の第２主体、南北に造られた第１主体の順に古→新となる。なお、試掘トレンチ内では、墳丘の西側を区画する溝の東側に接して古い段階の溝を確認した。溝の規模は、幅1.8m以上、深さ70cmを測り、13号墳の第２・３主体の西辺と0.6mの間隔しかなく、極めて近接していた。この状況から、古墳築造以前の溝と判断されるが、出土遺物もなく、その性格は不明である。



第31図　12号墳第１主体実測図

第１主体(第33図、図版第24、25-(1))　平坦面の東辺に南北方向に造られた主体部で、第２・



1．淡黄褐色土　2．淡黄褐色土（砂礫多）　3．淡黄褐色土（汚れあり）
4．白色砂混淡明褐色土　5．4層より明褐色濃い　6．明黄褐色砂質土
7．橙褐色砂質土　8．淡明褐色土（やや砂質）　9．橙褐色土
10．淡黄褐色砂質土　11．淡橙褐色砂質土　12．淡明褐色砂質土
13．淡黄灰色砂質土　14．淡黄灰色砂

第32図　12号墳第２主体実測図

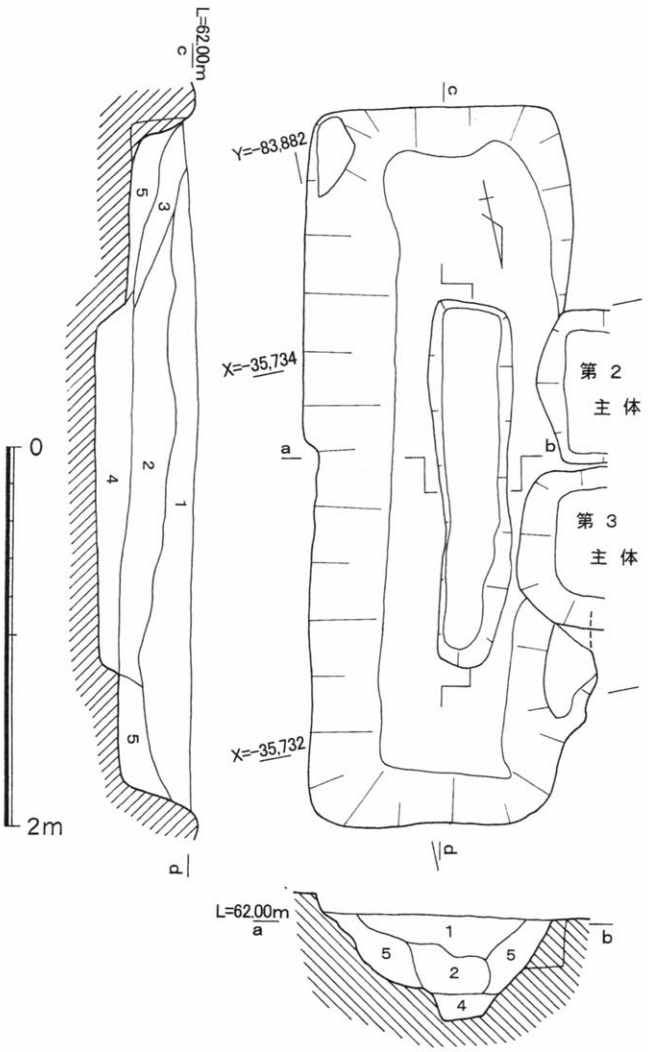
３主体に切り勝つものである。幅は南辺が1.35m、北辺が1.3mで、長さ3.8m、深さ55cmの墓壙底に、幅30～45cm、長さ1.9m、深さ15cmの二段目の土壙が穿たれている。この掘形の横断はU字形を呈しており、箱形木棺を納めた場合には、木棺の幅が10cm程度にしかならないため、現実的ではない。内部には砂質土で埋まっていたため、湿気抜きの下部構造と理解される。５層が木棺をおさえた土砂とすると、木棺の大きさは二段目の土壙とほぼ同じ大きさと考えることが可能で、0.45m×1.8m程度の木棺に復元できる。二段目の墓壙底はほぼ水平であり、二段目土壙の平面形は、南辺の幅が北辺の幅よりも広くなっていることから、南頭位に遺体を納めたものと考えられる。遺物の出土はなかった。

第２主体（第34・35図、図版第24、25-(2)）　当初、第２・３主体は１つの主体部と認識して調査を進めたため、東西の土層観察用畦は、第２・３主体のほぼ中央の１か所にしか設定していなかったため、第２・３主体については、墓壙上面からの土層図は作成できていない。

第２主体は、東西に造られた主体部のうち、南側のもので、北・東辺は第１・２主体により壊されている。現存の幅は1.2～1.4m、長さ4.7mであるが、南北横断土層図では、墓壙幅1.4mを測る。一段目の墓壙は深さ30cmで、底面に0.45m×4.75m、深さ30～35cmの墓壙が穿たれている。二段目の墓壙は一段目の墓壙と軸を異にしており、一段目の斜面に接しているため北辺、西辺の段は明瞭ではなく、南東部分のみにテラスが設けられている。墓壙内を30～35cm掘り下げたところ、二段目の墓壙上面で、木棺両側板の一部が土壌化しているのが平面的に観察することができた。４層上面に相当する。木棺の小口部分は平面的に認めることができなかったが、土層観察用畦で木棺内外の埋土の違いを認めることができた。土壌化した両側板の位置関係と土層より、内法で幅0.6m、長さ2.3mの箱形木棺（H型）に復元できる。１層は２・３層が木の根の影響により土色・土質が変化したものと理解している。そのため、２・３層が木棺の上位を埋めた土砂、４層が木棺内の空間に堆積した土砂、５

～９層が木棺を納めた際の裏込め土、10層が側板が土壌化したもの、11層が整地土と判断する。木棺痕跡が東側に狭まる形状をとること、墓壙底は西側が東側より約３cm高くなることから、西頭位に葬られたものと復元できる。棺内より、ヤリガンナ１点が出土した。刃先を北側に向け、遺体の左側に置かれたと推測される。

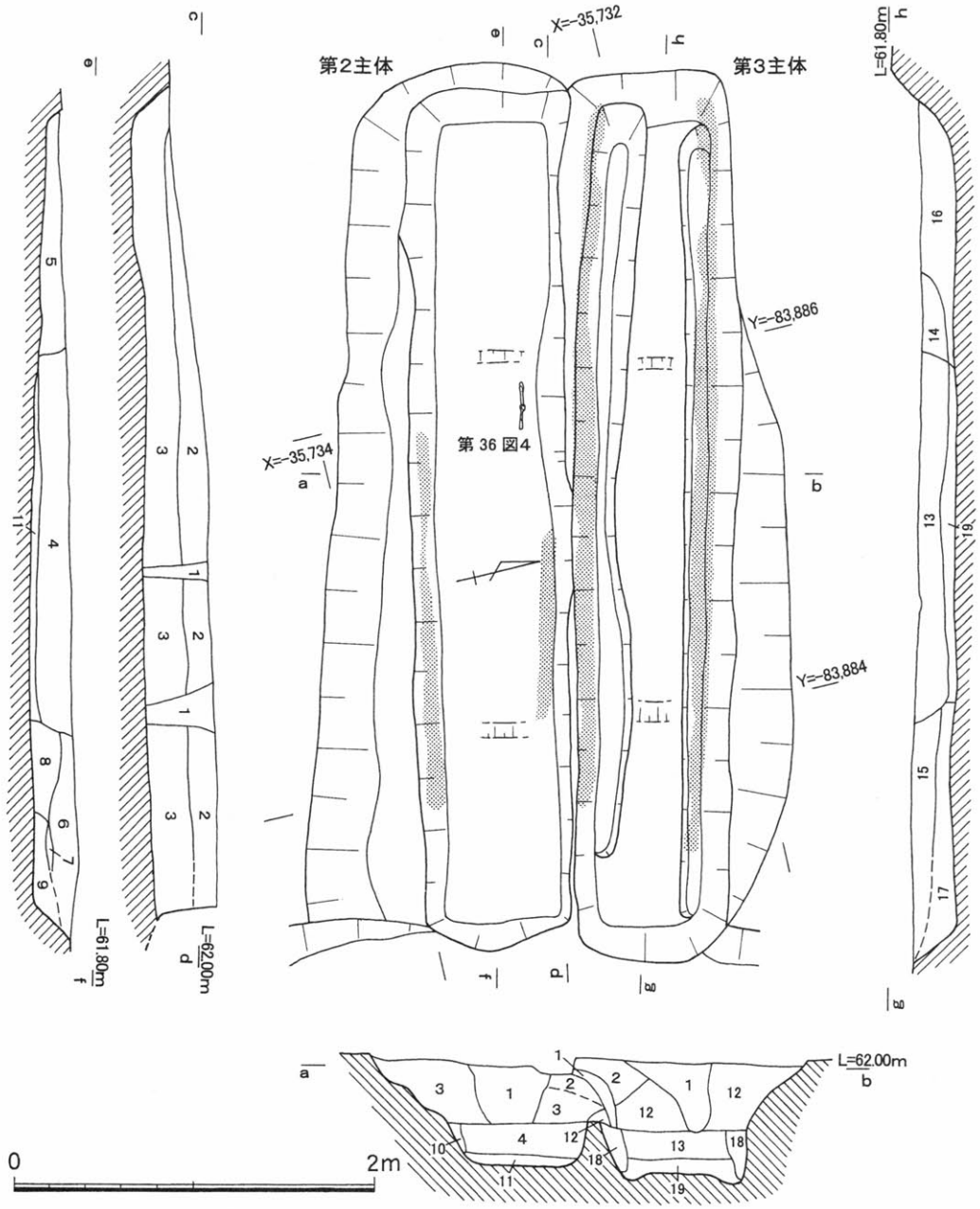
壺・高杯・器台等を墓壙上面で検出した(第35図、図版第25-(3))。１層は２層が木の根の影響により土色・土質が変化したものと理解しているため、これらの土器は墓壙最上位の２層中に供献されたものと推定される。壺は1/4程度しか遺存していないが、高杯・器台は接合するとほぼ完形に近くなること、高杯は二群に分かれてやや離れて出土したことから、破砕した上で埋置したものと考えられる。



１．黄茶色土　２．黄褐色砂質土　３．黄褐色土（全体に橙色強い）
４．濁黄褐色土（砂質強、黄灰色砂粒多く混じる）　５．明黄茶褐色砂質土
第33図　13号墳第１主体実測図

第３主体(第34図、図版第24、25-(2))　第２主体の北側に造られたもので、第２主体に先行するものである。東半は一段目が斜めに掘り窪められて、直に掘られているが、基本的に一段掘りの墓壙である。墓壙は南側を第２主体、東側を第１主体により破壊されているため、現存長を記すと、北辺の東側が斜めに幅広に掘られているところが最大で1.2m、西側で幅1.0m、長さは4.9mである。墓壙内を約40cm掘り下げて13層上面で、木棺の両側板の一部が土壌化しているのを平面的に確認したが、小口板の位置については平面的に確認できず、土層観察用畦で、木棺内の埋土と木棺を押さえた土砂との違いを確認した。これらの知見を総合すると、内法の幅が55cm、長さ2.1mの箱形木棺(H型)に復元できる。墓壙底面では両側板をはめ込んだと判断される幅10～30cm、深さ１～５cm程度の溝を北側で長さ4.15m、南側で長さ3.95mにわたって検出した。

１層は木の根の影響により周囲の土壌が変質したもので、木棺腐朽時に陥没したものとは理解していない。第２主体内の埋土である２層が１層に切られた層序となっているが、これは木の根により変質しているだけで、２・12層が１層の中にも続いていると理解する。12層が木棺の上を埋めた土砂、13層が木棺内の空間に堆積した土砂、14～17層が木棺小口の外側を押さえた土砂で



1．淡黄灰色土（木の根）　2．淡赤褐色土（砂質強）　3．赤褐色土（砂質強）　4．淡黄褐色砂質土　5．明褐色土
6．淡黄褐色砂質土（固い）　7．淡明褐色砂　8．黄褐色砂　9．黄褐色細砂質土　10．暗黄褐色砂質土　11．淡褐色砂質土
12．濁赤褐色土　13．淡黄灰色砂質土　14．淡明褐色土（軟）　15．淡黄褐色砂質土（固い）　16．淡明褐色土（固い）
17．黄灰色細砂質土　18．暗黄褐色砂質土　19．淡褐色砂質土

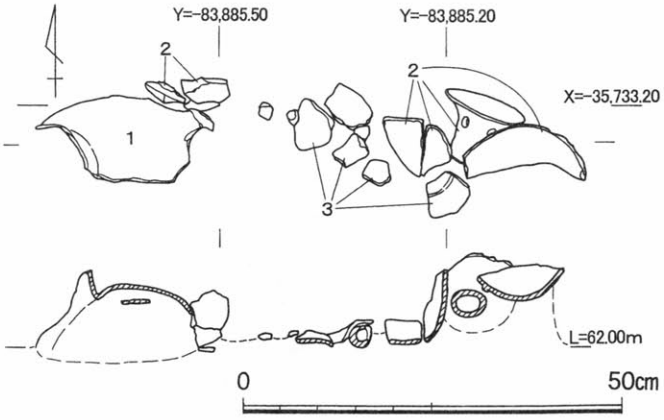
第34図　13号墳第２・３主体実測図(網部は木棺痕跡)

ある。18層は側板が土壌化した層、19層は木棺底板が土壌化した層とも考えられるが、砂質が強く軟らかいため、木棺を納める際の整地土と理解する。

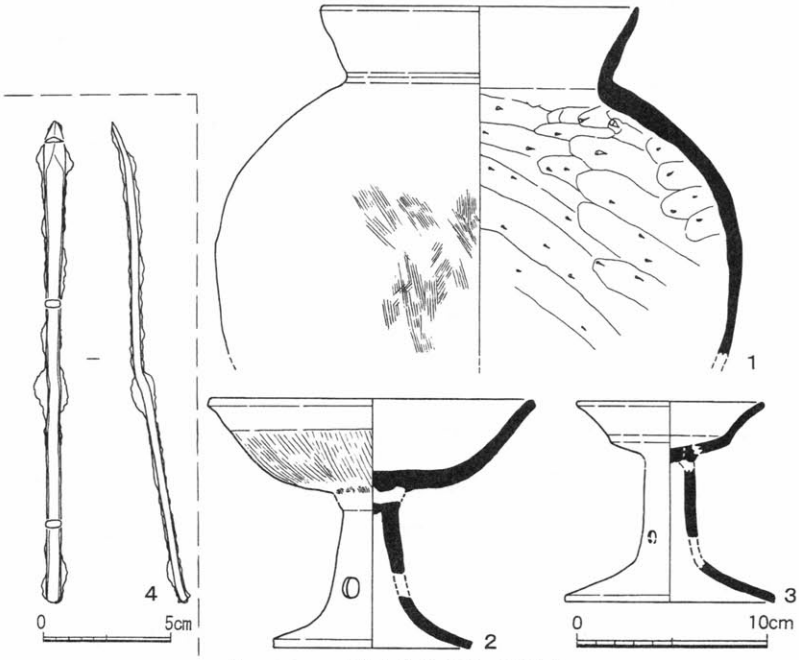
墓壙底は中央部が低く両端がわずかに高くなるが、木棺を納めた範囲に限っては、東側が西側よりも約５cm低くなっている。第２主体とは逆に東頭位であろう。遺物の出土は全く認められない。

出土遺物(第36図、図版第30)　遺物は第２主体に関係してのみ出土した。棺内からはヤリガンナが１点出土し、墓壙の上面からは壺、高杯、器台が出土している。

第36図１は甕で、1/3程度遺存していた。口径16.6cmに復元でき、器高は18.5cm残存していた。内面は削りによって成形されており、外面は細かいハケによって調整されている。頸部から口縁にかけての内外面は丁寧にヨコナデで調整している。淡橙褐色に発色している。２は高杯で、杯部と脚部は同一個体であるが、接合しない。ともに80％程度残存しており、明橙褐色に発色している。杯部は、口径16.9cm、高さ4.8cmで、外面はハケにより調整している。脚部は底径10.3cm、高さ7.7cmで、外面の一部に縦方向のハケが残存している。図上で復元した高杯の器高は、13cm弱である。３は器台で、脚部と受け部とは接合しないが、同一個体である。受け部は、口径9.6cm、脚部底径は11.0cm、復元の器高は10.4cmである。淡橙褐色に発色している。布留式Ⅱ期でも新しい段階の土器群で、４世紀後半頃の実年代が与えられる。４は、第２主体棺内から出土したヤリガンナである。完存しており、柄の中央が屈曲している。全長25.1cmで、幅が1.4cmである。



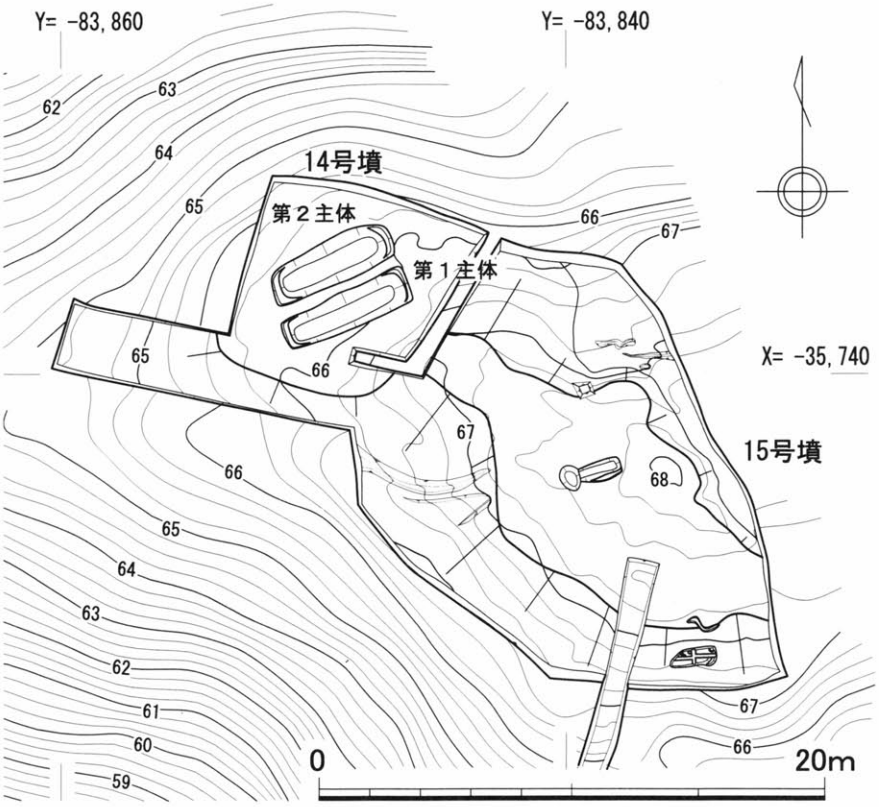
第35図　13号墳第２主体上面遺物出土状況実測図



第36図　13号墳出土遺物実測図

⑬**14号墳**（第37～40図、図版第２-(2)、26、27、28-(1)）

墳丘　尾根筋上に第４トレンチを設定して試掘調査を行ったところ、標高65m付近で布留式土器甕片が出土したことから、北側に拡張して確認した古墳である。15号墳の北西側に位置し、14号墳の位置は、15号墳から13号墳に伸びる主たる尾根筋上に位置しておらず、やや北側に振れた方向に造られている。14号墳では地山を削り出して北西－南東が６m、南西－北東が約10mの平坦面が造られている。平坦面の全面を調査してはいないが、調査地内では盛り土は認められなかった。２基の主体部が平行に配置されており、南側が第１主体、北側が第２主体として調査を行った。これらの主体部は、後述の15号墳の主体部とほぼ同じ方向に造られており、14・15号墳の並びに直交する方向にある。これらのことから、西尾根を中心に造られた２～13号墳とは別のグ



第37図　14・15号墳墳丘測量図

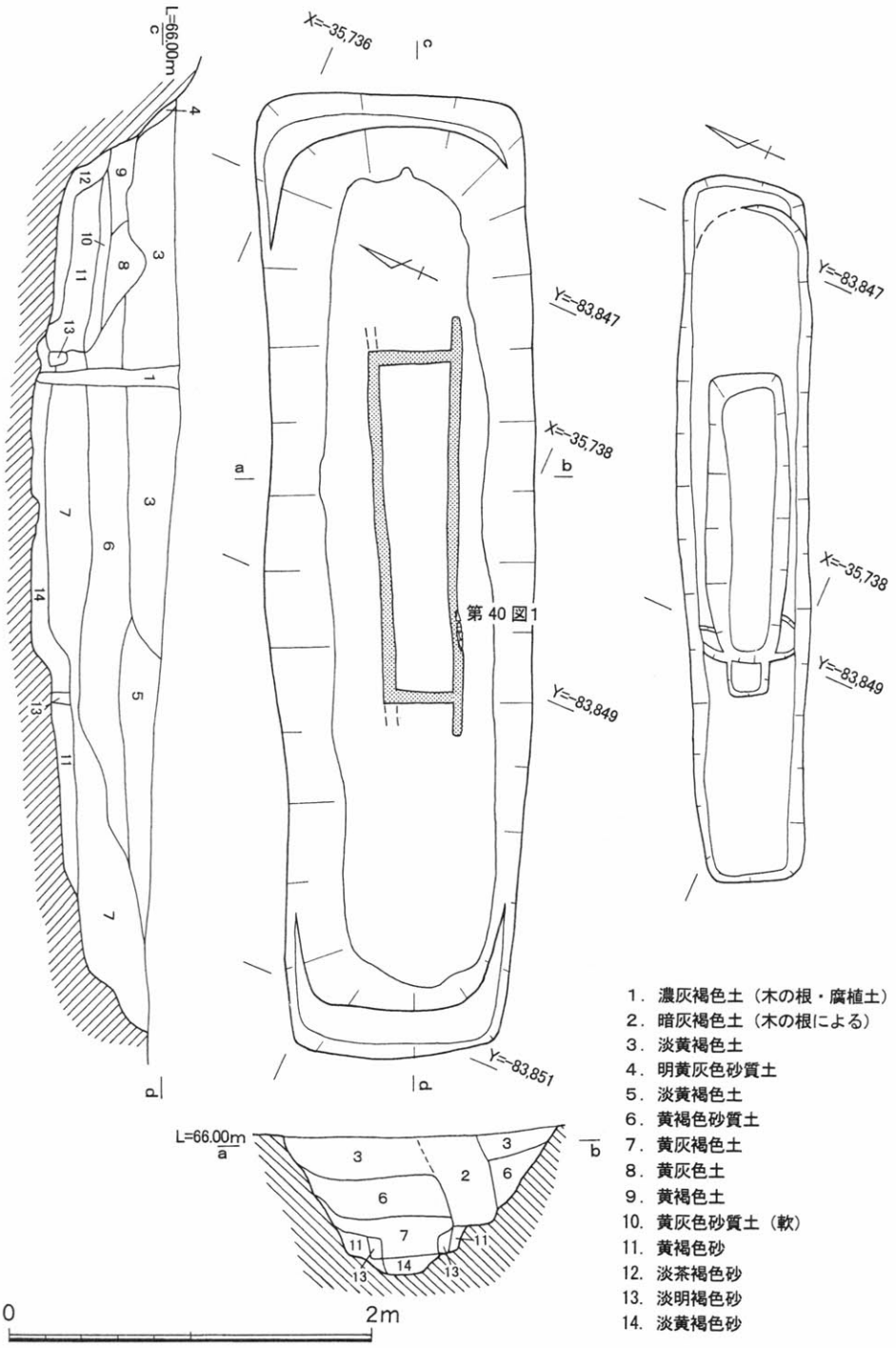
ループに属するものと判断される。試掘４トレンチ内の標高64.75m付近で等高線の幅が広くなっており、この付近に墳丘裾があるものと理解できる。

13・14号墳の間の、２トレンチを西側に拡張した地点でも無数の皺を地山面で検出している。14号墳の上に位置する15号墳でも、地震に伴う皺を検出しており、地震に伴うものと判断される。ほぼ東西に分布しており、標高63m付近である。

第１主体(第38図、図版第26、27-(1)・(2))　幅1.3～1.5m、長さ5.3mの墓壙内を掘り下げたところ、底面近くで木棺痕跡を検出した。11層上面および７層中で検出したもので、幅４～５cmの板材が土壌化した痕跡が明瞭に見て取れた。側板の間に小口板を挟み込むＨ形の箱形木棺で、東側が幅広となることから、東頭位に復元できる。右側板は一部消失しているが、左側板が完存しており、長さ2.3mである。棺の内法は、幅32～40cm、長さ1.8mである。鉄剣１が木棺左側板とテラスの境から出土した。木棺の南辺西側、東頭位の遺体の左脚位置の棺外で、切っ先を頭の方向に向けていた。棺内からの副葬品の出土はなかった。

木棺は二段目の墓壙内に据えたもので、東側は一段目の墓壙の壁と連続しており明瞭ではないが、幅55～75cm、長さ3.7mで、深さ３～15cmと浅いものである。この墓壙内に木棺(13層)を納め、11・12層で埋めており、木棺を固定したようである。13層の棺材が土壌化したものは、最大でも17cmしか遺存していなかった。木棺の直下には三段目の土壙が掘られており、幅0.5m、長さ1.6m、深さ最大で15cmを測り、底面は凸凹である。この土壙中には主として14層が堆積しており、木棺を据える際の整地土と判断される。この他の土層としては、３～７層が棺内に落ち込んだ土砂で、８～12層が木棺を埋めた土砂と判断される。

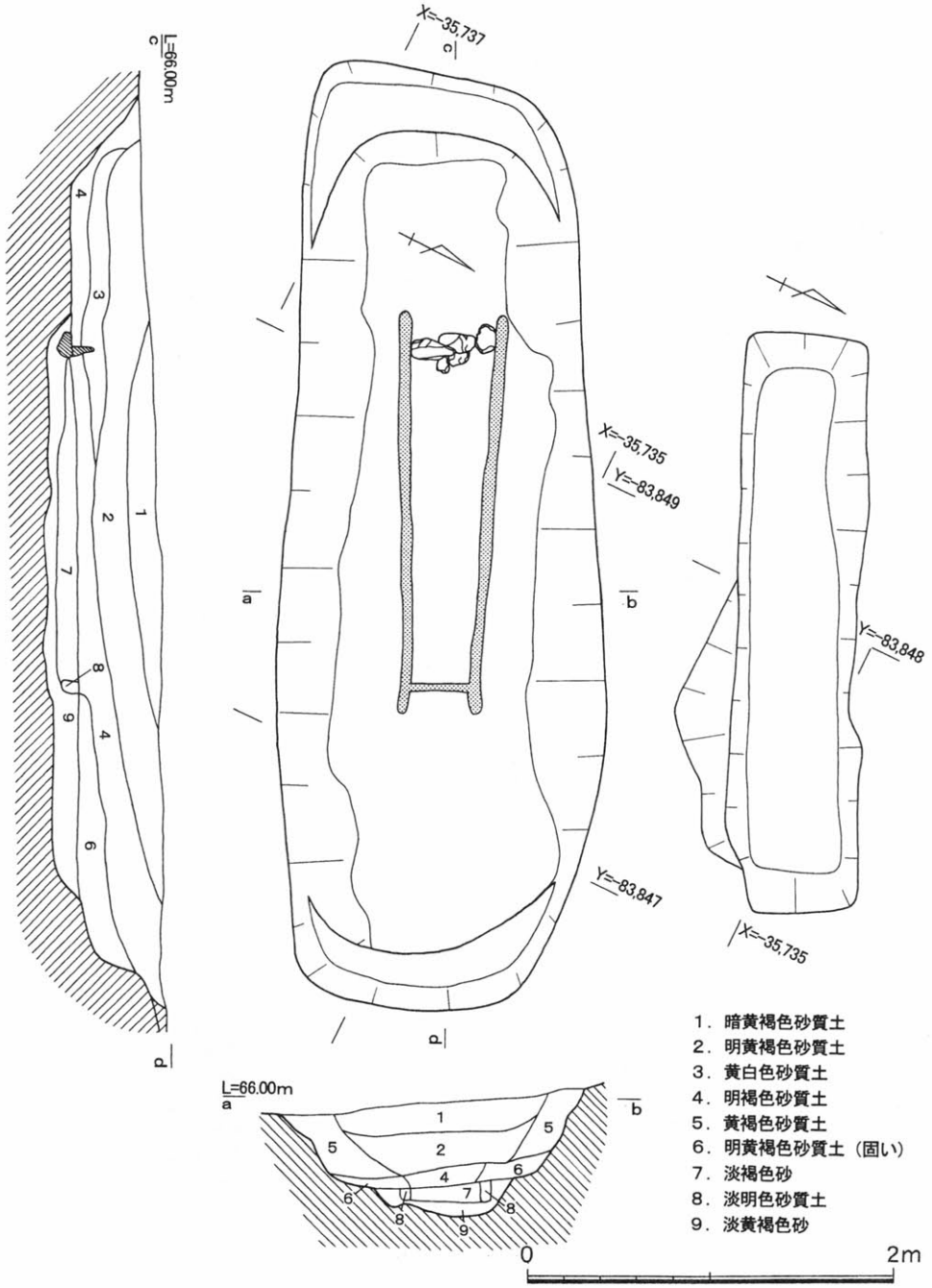
第２主体(第39図、図版第26、27-(1)・(3))　幅1.7m、長さ5.1mの墓壙内で、Ｈ形の木棺痕跡を検出した。側板の痕跡は長さ2.2mにわたって遺存しており、小口板は東側でのみ確認した。西側には人頭大の６石が、最大で二段分集められていた。高さは15cmしかないため、積石だけで小口板の代用としたとは考えにくく、小口板の根元を押さえたものと理解できる。木棺の側板は、



第38図　14号墳第１主体実測図（網部は木棺痕跡）

西側に向けてハの字状に広がっていることから、西側頭位であったことがわかる。第１主体とは頭位を逆にして埋葬されたようである。木棺の痕跡は深さ５cmしか遺存しておらず、木棺の基底部のみを確認したものである。内法は幅32～40cm、長さ1.85mである。

木棺痕跡の下には、幅0.7m、長さ3.2m、深さ15mの土壙が穿たれている。木棺の西辺をほぼ揃えており、東側は約１mほど大きく穿たれている。この土壙内に淡黄褐色砂（９層）を敷き、その上に木棺を据えて、集石をおこなっている。整地土と判断される。７層の淡黄褐色砂は、両側板と小口板に挟まれた状態であることから、木棺の底板が土壌化したものである可能性がある。



第39図　14号墳第２主体実測図（網部は木棺痕跡）

木棺の東側、二段目の土壙内には７層上面に相当する位置まで整地土である９層で埋めている。５・６層が木棺を埋めた土砂で、１～４層が木棺腐朽時に陥没した土砂と理解できる。遺物は出土しなかった。

出土遺物（第40図、図版第30）　第40図１は第１主体の木棺左側板上より出土した鉄剣である。調査中に刃部中央を欠失してしまった。現地で確認した長さは20.5cmである。木質の束が遺存しており、黒漆を塗布しているのが観察される。目釘穴が観察できるが、鉄釘は遺存していないので、木質のものを目釘穴に差し込んでいたものと思われる。刃部の幅は２cmである。２は、布留式土器の甕片で、口径12.6cmで、残存高が3.3cmである。口縁端部内面が肥厚し、布留Ⅱ式の範疇で捉えられるものである。試掘トレンチ内の墳丘裾にあたる位置から出土した。

⑭**15号墳**(第37・41図、図版第2-(2)、28)

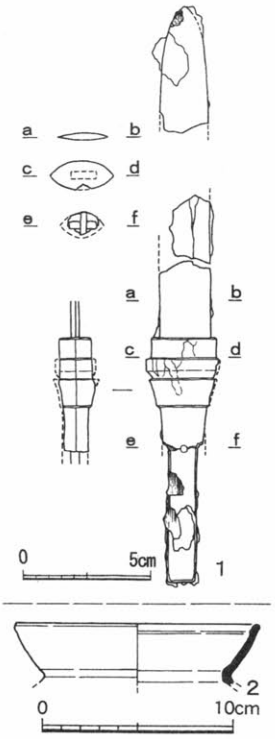
墳丘　2号墳から西に延びる東尾根の頂部に位置する古墳である。表土直下が地山で、盛り土はまったく認められず、すべて地山を削り出して造られたものである。墳丘の西・南斜面は比較的丸く成形されているが、北斜面は凸凹が目立つものである。2号墳と同じく、墳丘の北東部、南西部に地割れが認められることから、北斜面については地震による地滑りのため、崩落面が現れているものと推測される。そのため、等高線で見ると、標高67m付近より上がほぼ平坦面となり、8m×11m程度のいびつな楕円形を呈しているが、本来の墳頂部は円形を基調とした、10数mの規模に復元できる。墳丘裾の傾斜変換点は明瞭ではなく、その規模は不明である。

墳丘の東側は、幅1m以上、深さ40cmの溝状の落ち込みとなっている。この東側の未調査部分には平坦面が続いているため、地滑り痕とは考えにくく、墳丘の東を画する区画溝と想定できる。

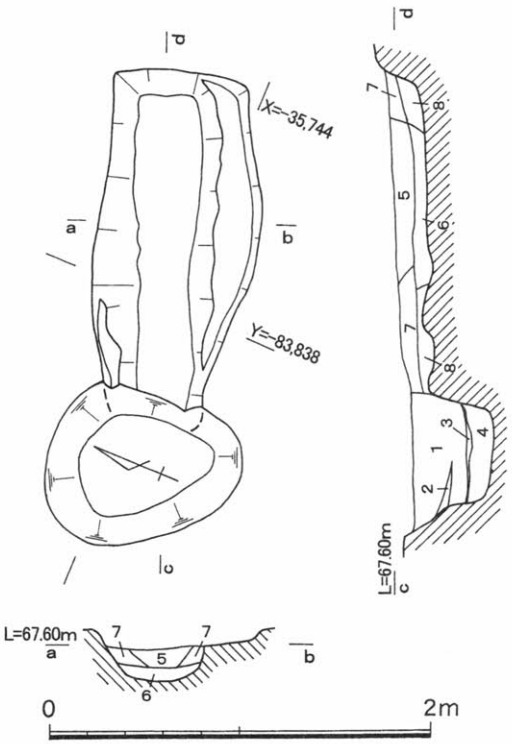
平坦部の北側に偏して、小規模な主体部1基を検出したが、中心主体となるような大形の主体部は検出できなかった。当初、表土直下が地山となっていたため、墳丘が流出した際に主体部も流失したと考えたが、小規模ながらも主体部1基を検出したことから、墳丘の流出・削平は主体部を破壊するほどにはなされていないことが判明した。そのため、当初からこの主体部以外は造られていないと考えられる。

また、南斜面に土坑を検出したが、底面が平らかではなく、2号墳とこの15号墳では地震痕跡と判断される地割れが見つかっているため、その一つと判断した。

主体部(第41図、図版第28-(2)・(3))　西端を時期不明の円形の土坑により破壊されている。平面形は長方形で、幅0.85m、長さ1.8m(現存)、深さ20cmの墓壙である。土層の観察より、5～7層が木棺陥没時に落ち込んだ土砂、8層が木棺を押さえた土砂と判断され、幅30～35cm、長さ0.7m程度の箱形木棺が納められていたと復元できる。墓壙底の傾斜は東端が約8cm高くなることより、東頭位と想定できる。遺物は出土しなかった



第40図
14号墳出土遺物実測図



1．黄褐色土・茶褐色土・黄茶色土の互層　2．明黄白色土(地山塊を含む)　3．炭化物　4．黄茶色砂質土
5．淡黄灰色砂質土(有機質の汚れ)　6．淡黄灰色土
7．明褐色砂質土　8．6層の黄色濃い　9．明褐色土

第41図　15号墳主体部実測図

4．まとめ

谷奥古墳群として２～15号墳の14基の古墳を調査した。これらの古墳は北近畿地方の中小古墳に通有に見られる“階段状古墳”、“座布団古墳”であり、丘陵尾根を削り出して低い側に若干の盛り土を行い、平坦面を造り出して、埋葬施設１～２基を設置するものである。

１号墳は直径30m、高さ６mの円墳で、２号墳の西側に位置しているが、この間には比高差４mの切り通しが掘られて、両古墳が分けられている。２号墳は地山を削り出して墳丘を造り出すタイプであることから、この切り通しは２号墳の造営に伴って造られたものではなく、おそらく１号墳の造営に伴い、丘陵の先端を切断し、墳丘に盛り土したものであろう。また、１号墳が造られた丘陵を踏査すると、この丘陵は南に向けて延びていくもので、数基の古墳が存在するように見受けられる。２～15号墳は少なくとも、北側の平地を意識して造営されているのに対して、１号墳およびその南側に造られたであろう古墳は、南側の平地を意識して造営されたものと言える。

こういったことから、１号墳と２～15号墳とは、近接して造られているが、その造営によって意図するところは異なっており、異なった古墳群と考えてよいであろう。

谷奥古墳群の築造順位について検討したい。出土遺物は概して少なく、３号墳第１主体のガラス小玉５、鏡片、４号墳第１主体の刀子片、８号墳主体部上の家形埴輪、主体部内の鉄鏃８、鉄剣１、ヤリガンナ１、10号墳第２主体の刀子片、第４主体の甕、13号墳第２主体上の甕・高杯・小型器台、第２主体部内のヤリガンナ、14号墳第１主体の鉄剣である。

これらのうち時期の特定できるのは、８・10・13・14号墳出土の土器・埴輪類であり、10・13・14号墳出土の土器が４世紀後半、８号墳の家形埴輪が５世紀代でも早い段階と判断される。築造時期が推定できる古墳が少ないが、基本的には高所から低所に向けて古墳が築造されたものと理解し、以下、検討したい。

まず、14基の古墳群をグルーピングすると、13号墳と14号墳の間に空間があること、14・15号墳が小さな尾根筋に沿って造られていることから、大きく、Ⅰ群；２～13号墳、Ⅱ群；14・15号墳に２分することができる。14号墳の下位には調査地外のため調査を実施していないが、さらに古墳がある可能性が高い。さらに、２～13号墳については、２号墳を最高所に、ａ群；北尾根筋状に連なる３～８号墳、ｂ群；東尾根筋状に展開する12・13号墳、ｃ群；主尾根に造られず、各古墳に取り付いて造られている９～11号墳に三分できる。

まず、直線的に連なるⅠａ・ｂ群、Ⅱ群を見ると

Ⅰａ群は、２号墳→３号墳→４号墳→５号墳→６号墳→７号墳→８号墳

Ⅰｂ群は、２号墳→12号墳→13号墳

Ⅱ②群は、15号墳→14号墳→(　　)

と順に造られたのであろう。

さて、２～８号墳については、２～４号墳と５～８号墳で古墳のタイプが異なる。前者が平坦

な墳頂部と数mの比高差をもつ墳丘斜面を有しており、平坦面を造り出す際に丘陵の低い方に盛り土をしている。後者は墳頂部の平坦面が明瞭でなく、古墳と古墳の間の斜面も緩やかで高低差も小さいもので、墳丘に盛り土がなされず、すべて地山の削り出しによるものである。このタイプの違いが丘陵の形状に規制された、自然の要因によるものなのか、は分からない。しかし、概ね、半世紀弱の間に古墳群が築造されたこと、他の群が3基程度であることを考えると、4号墳より上(-1群)5号墳以下は別系統と考えたい(-2群)。西尾根上の古墳は、2号墳と5号墳を基点に古墳が造営されたと考えるのである。

このように考えると、主尾根に造られない、Ⅰc群の古墳が理解できる。9号墳は、4号墳の下に造られるべきものが、西側に回り込んだ位置に造られたと解釈できるのである。すなわち、4号墳の下には、すでに5号墳が造られていたために、回り込んだ位置に造らざるを得なかったのである。同じ事情は10・11号墳でも見て取れ、2号墳の下にはすでに3号墳が造られていたがゆえに西北斜面を削って10・11号墳を造らざるを得なかったのであろう。このように、Ⅰc群は主尾根に造られない古墳であるが、これらは、造られるべき場所が他の古墳によって占有されていたために、場所を代えて造られたと言えるのである。以上のことから、Ⅰc群の9号墳は、Ⅰa-1群の最後尾に付け加えられる。

築造順位をまとめると、次のようになる。

Ⅰa-1群　　2号墳→3号墳→4号墳→9号墳

Ⅰa-2群　　5号墳→6号墳→7号墳→8号墳

Ⅰb群　　2号墳→12号墳→13号墳

Ⅰc群　　2号墳→11号墳→10号墳

Ⅱ群　　15号墳→14号墳→(　　)

以上のように小群に分け、築造順位を復元すると、谷奥2～14号墳は5系列に分かれる。このうちの3系列が、2号墳がその基点となっている点に着目したい。また、Ⅰa-2群は、2号墳を基点に造られていないが、同じ丘陵の途中から造られている点を重視すると、2号墳との強い関連が想定できる。

ここで想起されるのが、2号墳の主体部のあり方である。墳丘は成形や盛り土をしているが、平面形は不整形で、その上に1～3基の主体部が、5群に分かれて分布するもので、極めて、共同墓地的なあり方であった。2号墳から順次、少なくとも3系列の古墳が造られていくが、これらの古墳は共同墓地的なものではない。2号墳上の小群を造った集団が、それぞれが独立した古墳を造っていったと解釈できるのである。

谷奥古墳群全般での遺物の出土は概して少なかったが、これは丹後地域における中小古墳にあっては通有のことである。しかし、8号墳については、長大な割竹形木棺を備えており、墓壙・木棺規模は、王墓クラスに比定できるものであるが、副葬品として鉄剣と鉄鏃が出土しただけで、極めて貧弱なものである。

谷奥古墳群の被葬者像は、網野町銚子山古墳、丹後町神明山古墳、弥栄町黒部銚子山古墳など

の大型前方後円墳に葬られた丹後地域の王を支えた、小地域の首長層と考えられる。その中でも、８号墳の被葬者は、王墓クラスの墓壙を有し、単純に、小地域の首長層とは位置づけられないであろう。また、谷奥古墳群の周辺ではやや遅れてニゴレ古墳が造られている。谷奥古墳群の被葬者、特に８号墳の被葬者と、ニゴレ古墳の被葬者との関連等、検討すべき課題は多い。

今回の調査により、丹後全域を支配した大首長と、それを小地域で支えた小首長層、その間を取り持った中位の首長という視点を提供することができた。そして、その実態を明らかにするための資料を得たといえるであろう。

図　　版

(1)谷奥古墳群全景１(北東から)

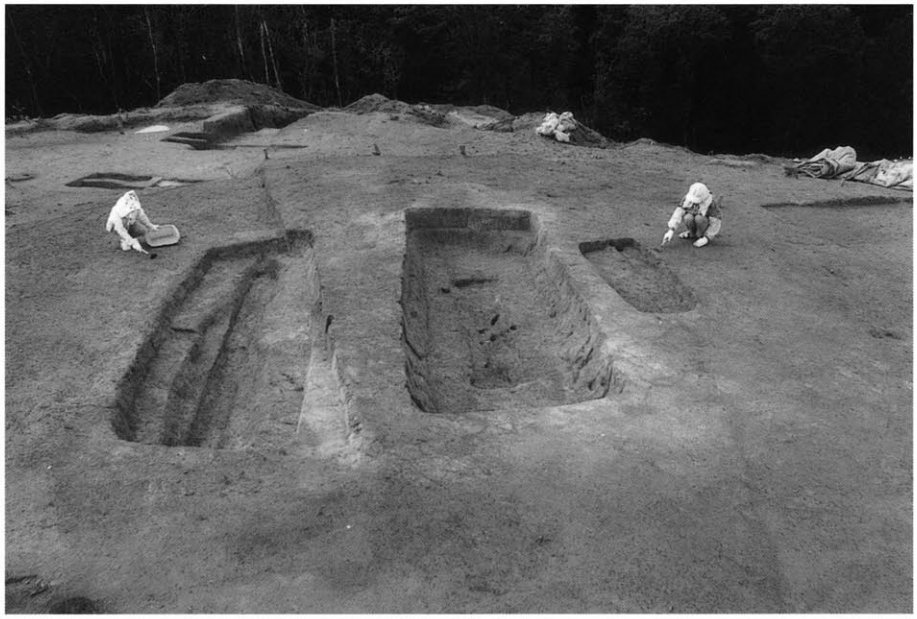
(2)谷奥古墳群全景２(北西から)

(1)谷奥古墳２～７・９・11号墳(上が南西)

(2)谷奥古墳２・10・12～15号墳(上が南)

(1) 2 号墳周辺古墳分布(上が南)

(2) 2 号墳遠景(東南東から)



(1) ２号墳第１～３主体部
（南東から）

(2) ２号墳第１主体部（北西から）

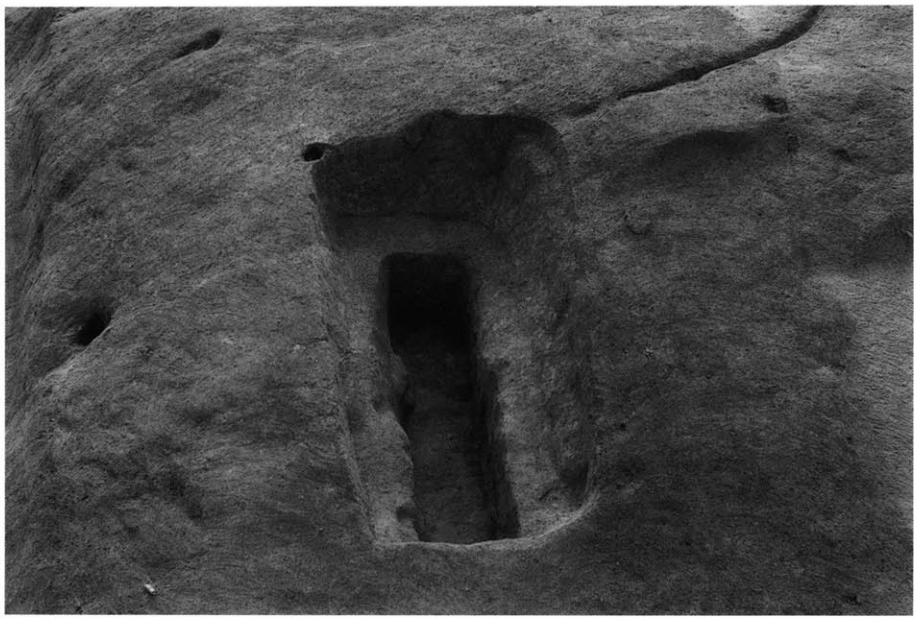
(3) ２号墳第２主体部（東から）

(1) ２号墳第４・５主体部
（北東から）

(2) ２号墳第４主体部（南西から）

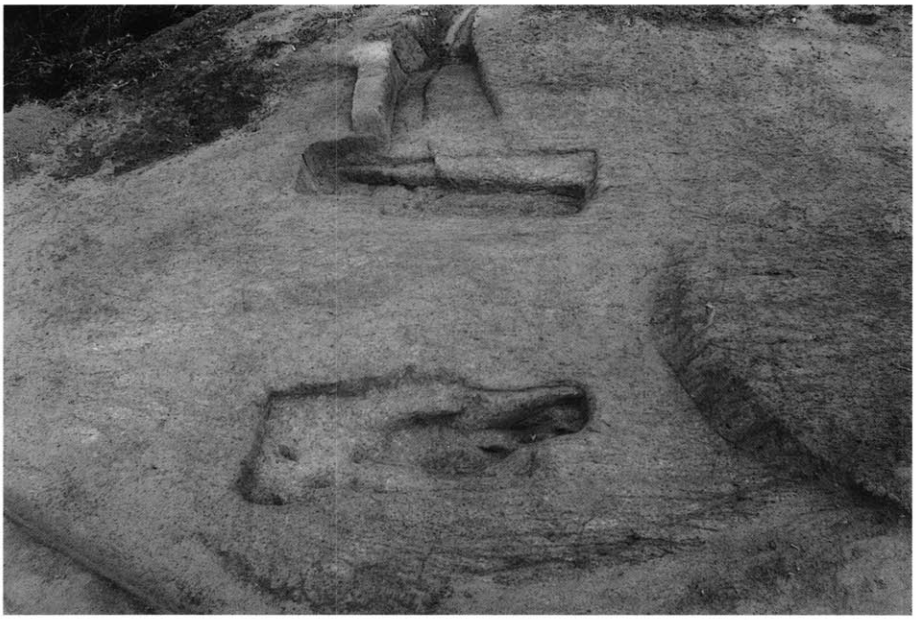
(3) ２号墳第４主体部横地滑り
（北東から）

(1) 2号墳第6主体部
(北北西から)



(2) 2号墳第7主体部
(北北東から)

(3) 2号墳第7主体部(南西から)



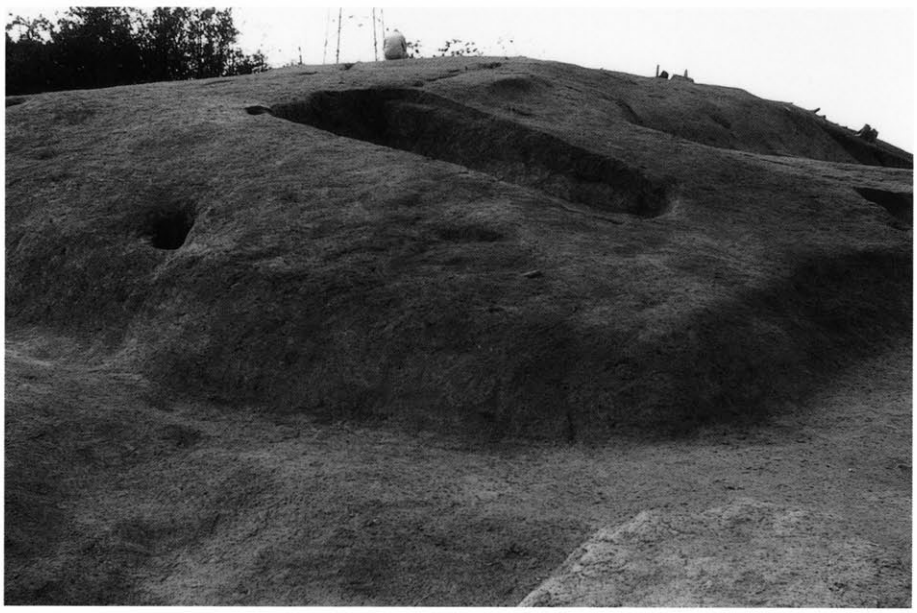
(1) ２号墳第８・９主体部
（南東から）

(2) ２号墳第８主体部
（南西から）

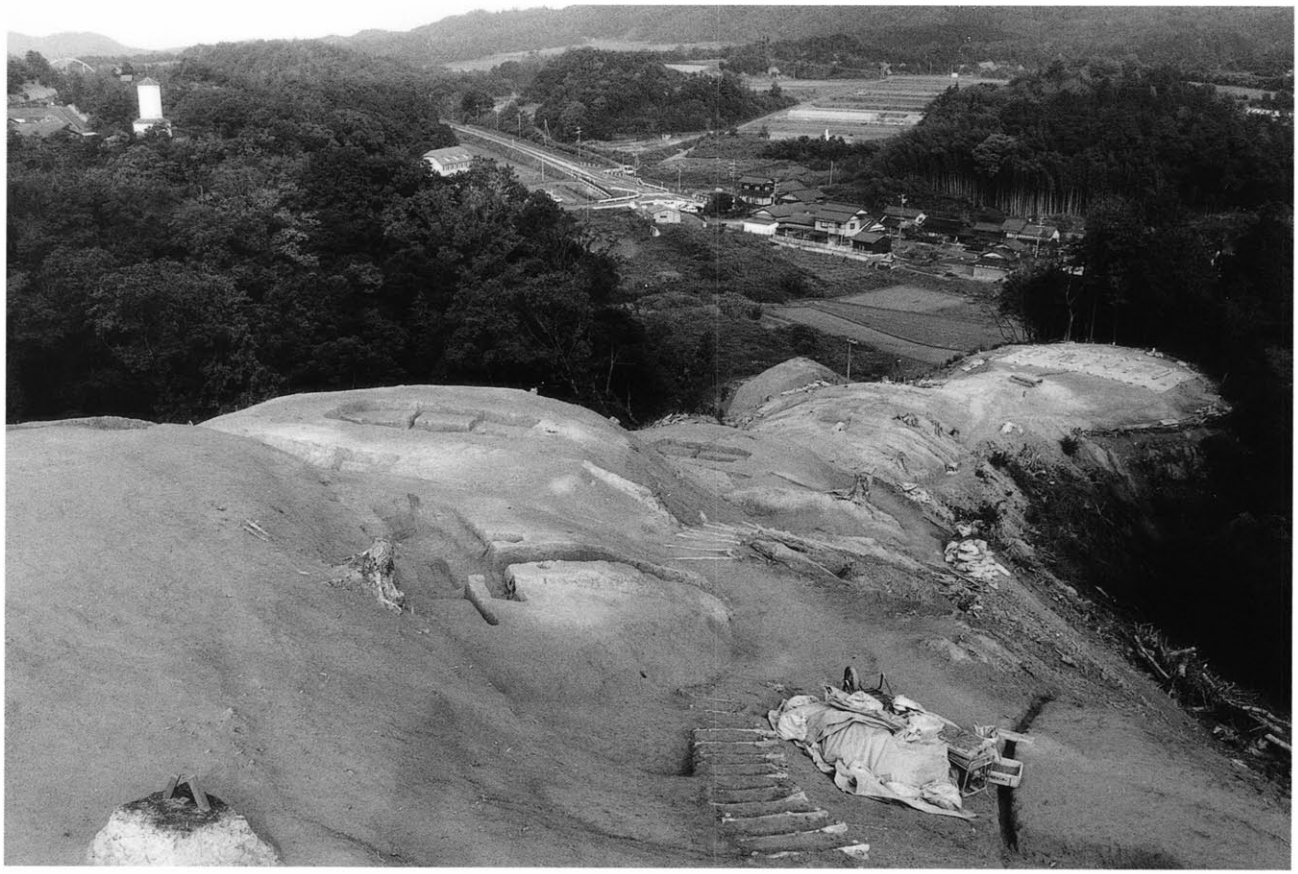
(3) ２号墳第９主体部
（西南西から）

(1) 2 号墳東辺土層(北東から)

(2) 2 号墳東辺整形状況
(北東から)



(3) 2 号墳東辺整形状況(東から)

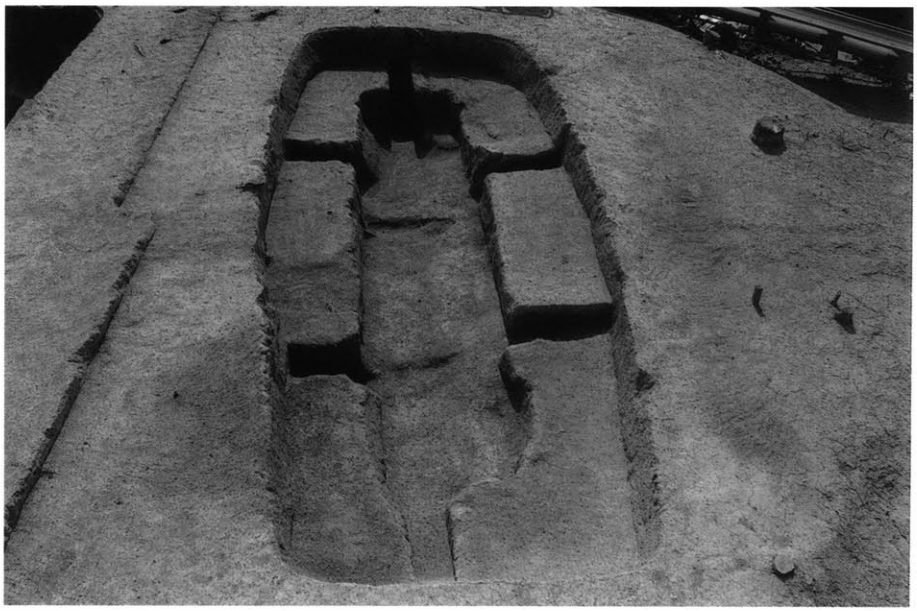


(1) ３～８号墳遠景(南東から)

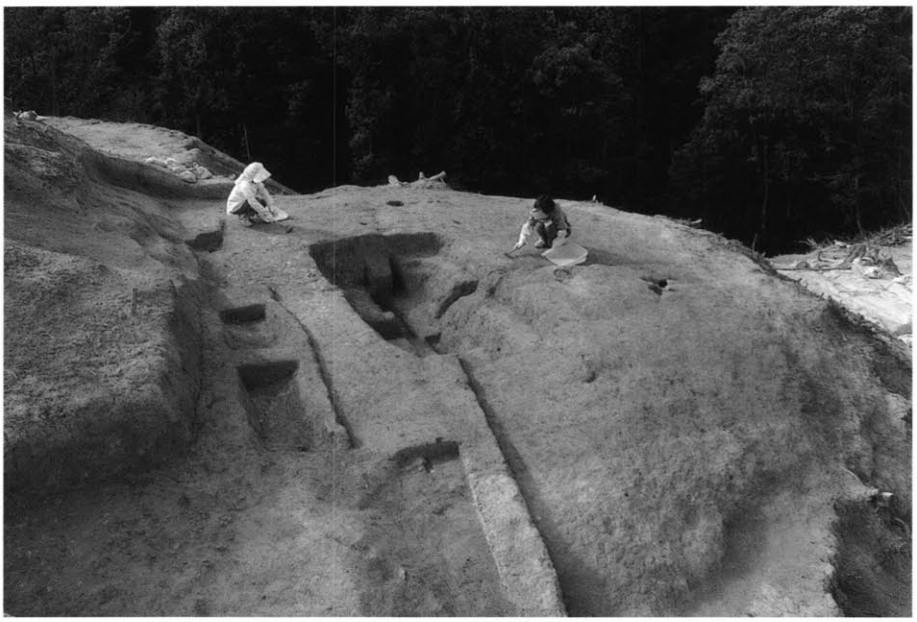
(2) ３～８号墳遠景(南西から)

(1) 3号墳全景(南から)

(2) 3号墳第1主体部(東から)



(3) 3号墳第2主体部(東から)



(1) 4号墳全景(東から)

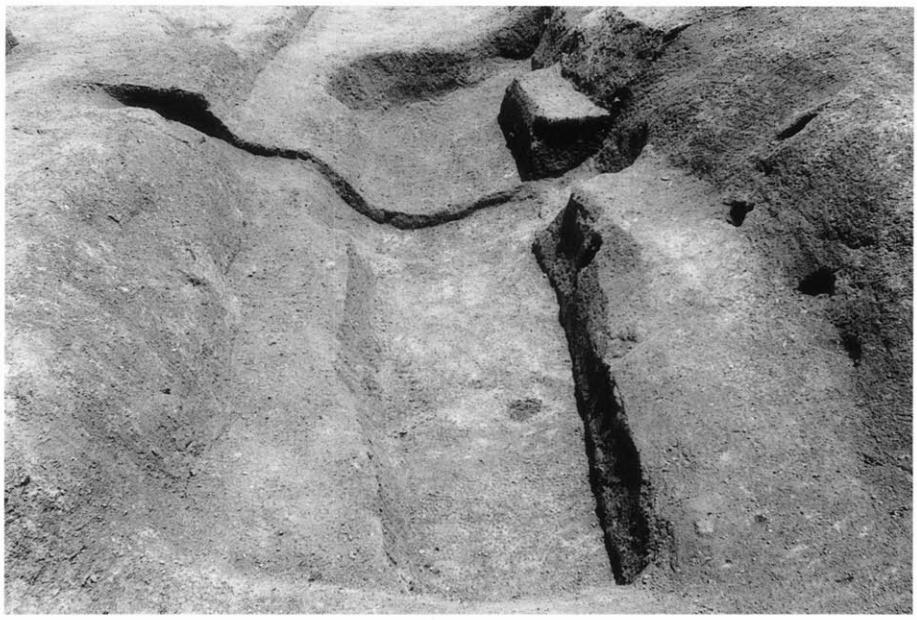
(2) 4号墳第1主体部(東から)

(3) 4号墳第2主体部(北東から)

(1) 5～7号墳全景(上が西)

(2) 5～7号墳全景(北から)

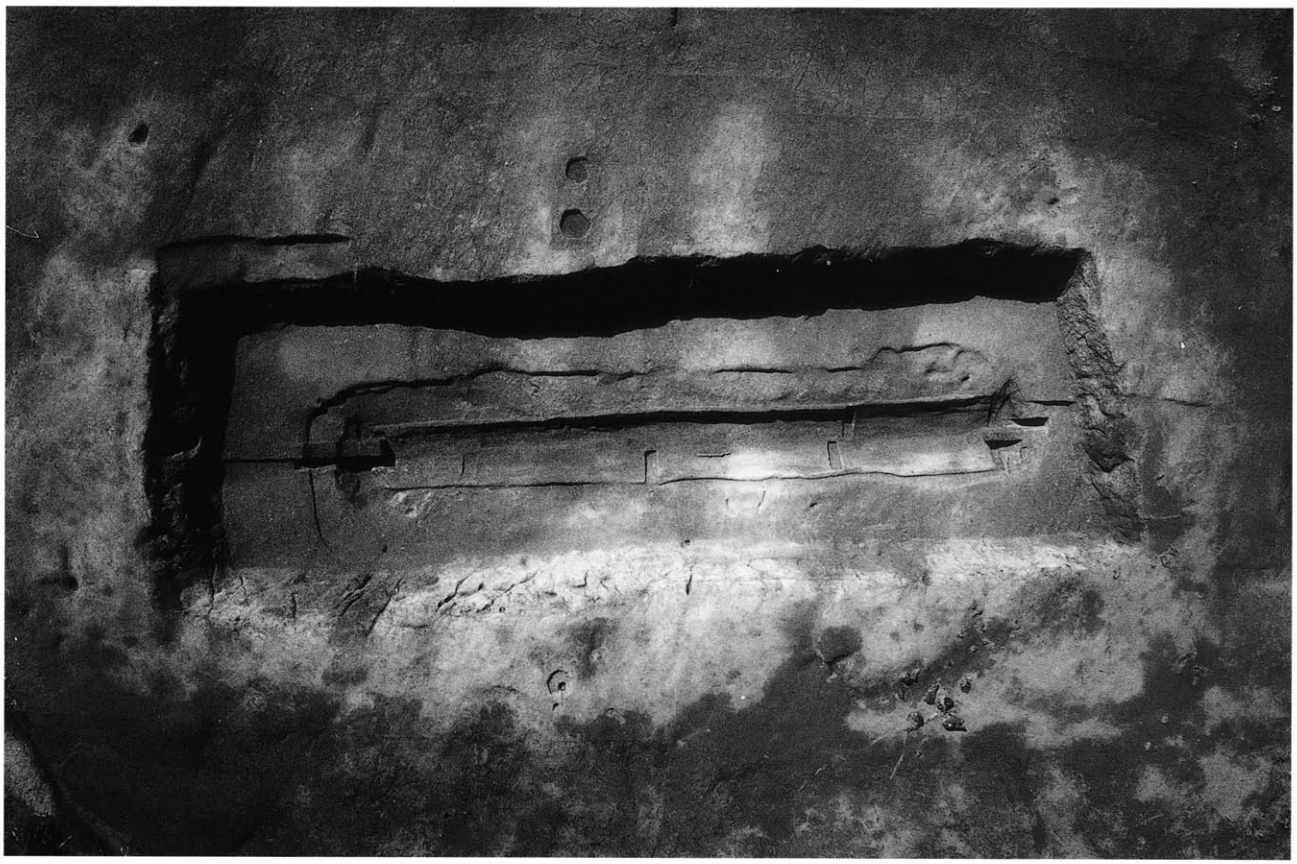
(1) 5号墳主体部(東南東から)



(2) 6号墳主体部(西から)

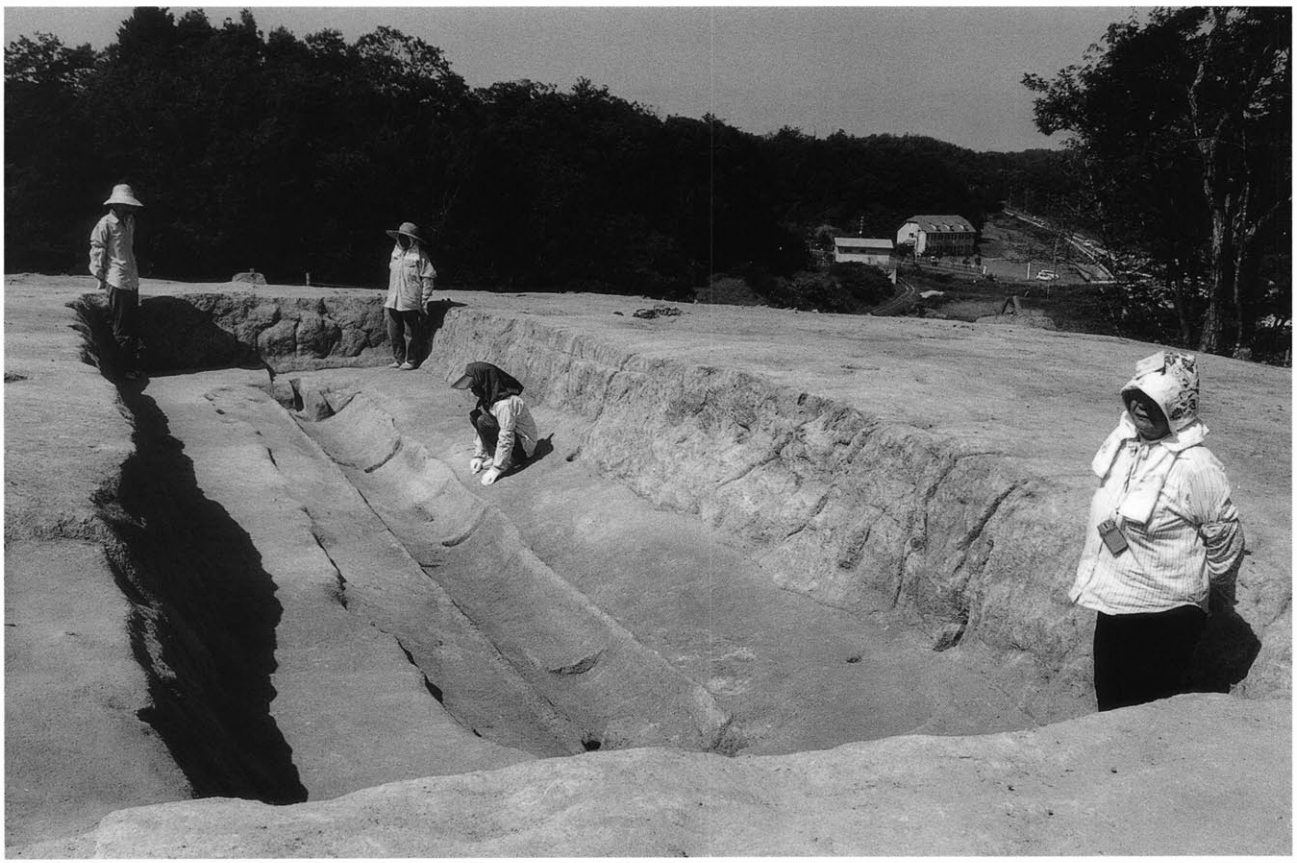
(3) 7号墳主体部(東から)

(1) 8号墳全景(北西から)



(2) 8号墳主体部全景(北から)

(1) 8号墳主体部　割竹形木棺1（東から）



(2) 8号墳主体部　割竹形木棺2（東南から）

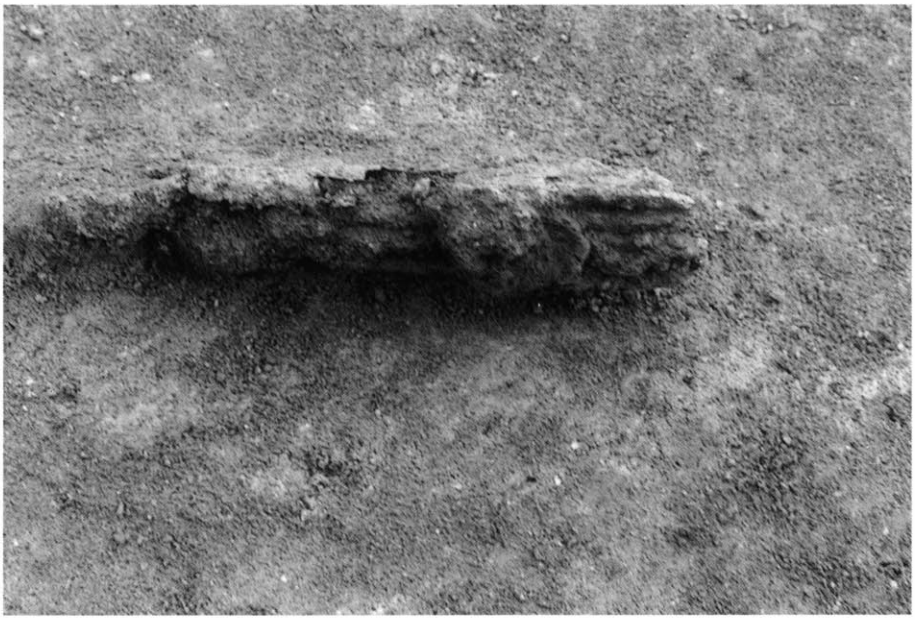
(1) 8号墳主体部木棺除去(東から)

(2) 8号墳主体部完掘状況(西から)

(1) 8号墳主体部東辺小口痕跡
（南から）

(2) 8号墳主体部東辺小口土層
（北から）

(3) 8号墳主体部西辺小口痕跡
（東から）



(1) 8号墳主体部出土遺物
（鉄鏃、北から）

(2) 8号墳主体部出土遺物
（鉄剣、南から）

(3) 8号墳主体部　木棺断面

(1) 9号墳全景(東から)

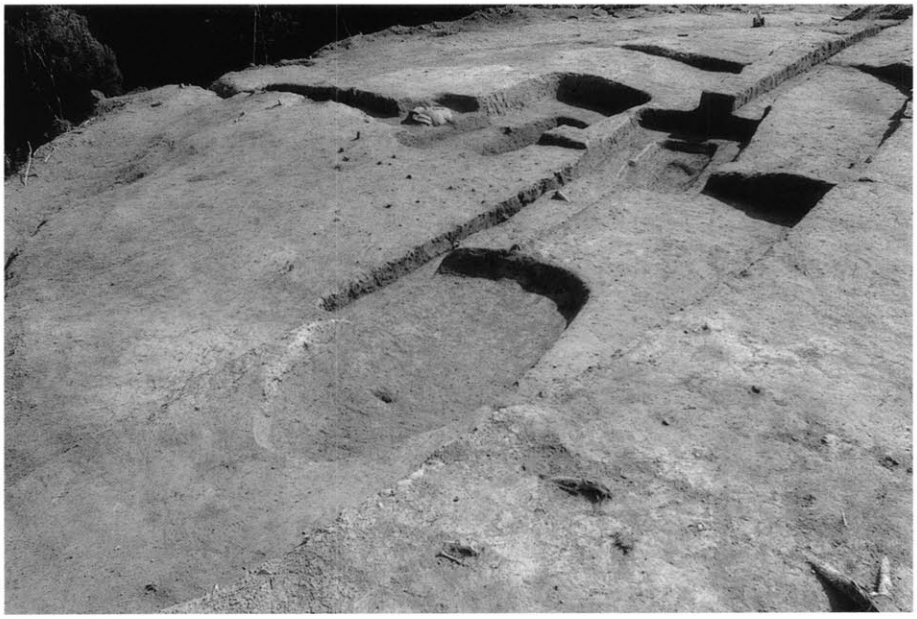
(2) 9号墳主体部検出状況
(北東から)

(3) 9号墳主体部完掘状況
(北東から)

(1)10号墳全景(北西から)

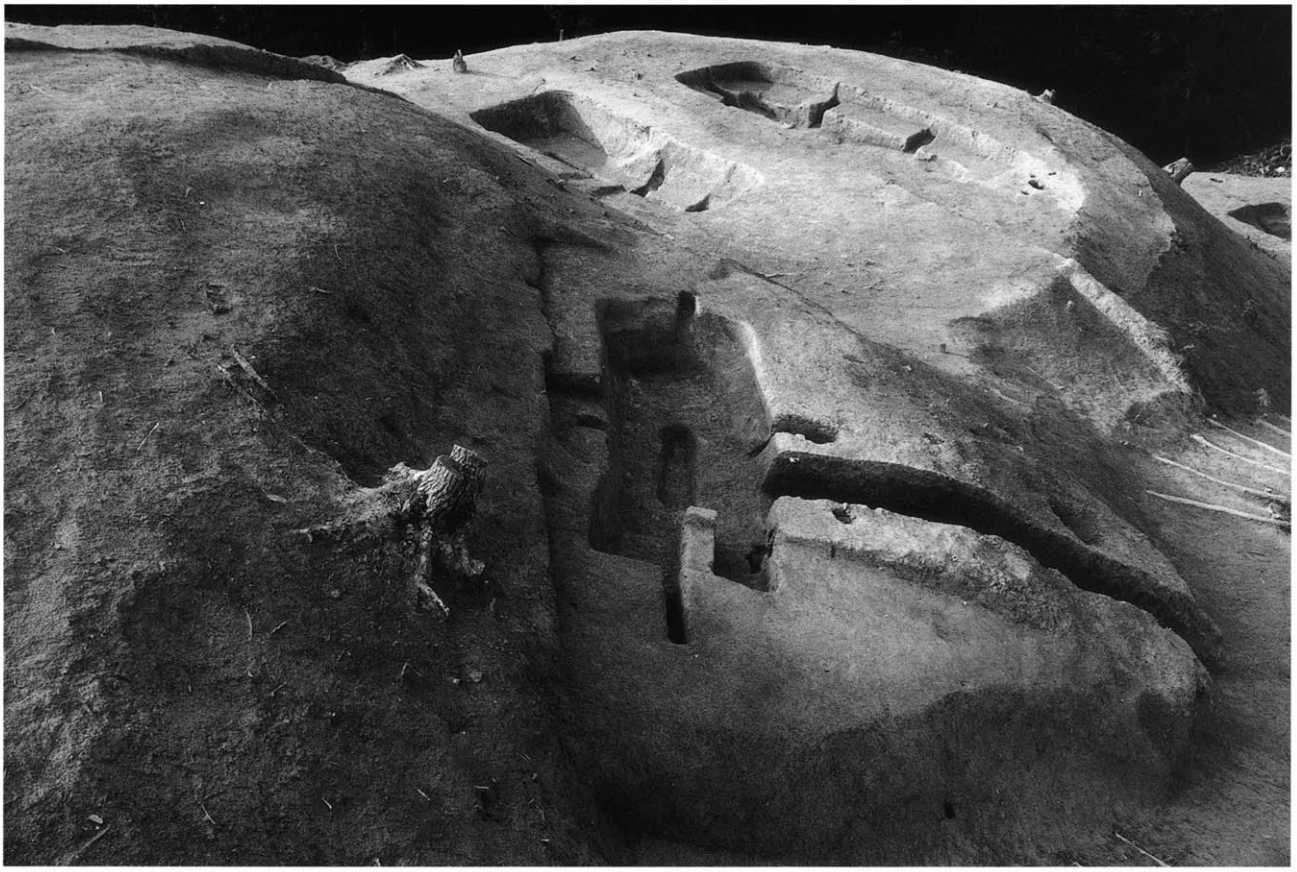
(2)10号墳南辺溝(南東から)

(1)10号墳第１・２・４主体部
（北西から）



(2)10号墳第３主体部完掘状況
（西から）

(3)10号墳第４主体部完掘状況
（西から）

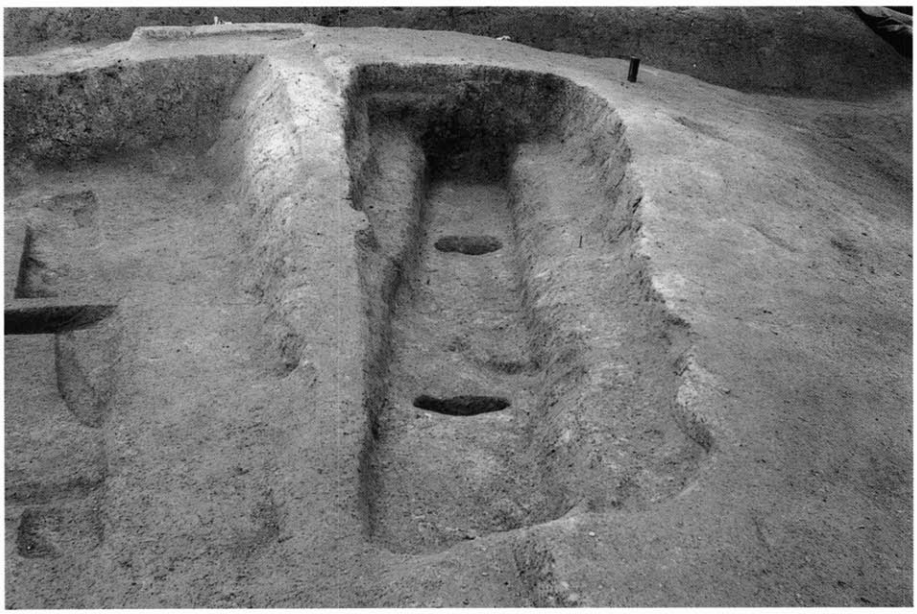


(1)11号墳全景(南東から)

(2)11号墳主体部(南西から)

(1)12号墳全景(西北西から)

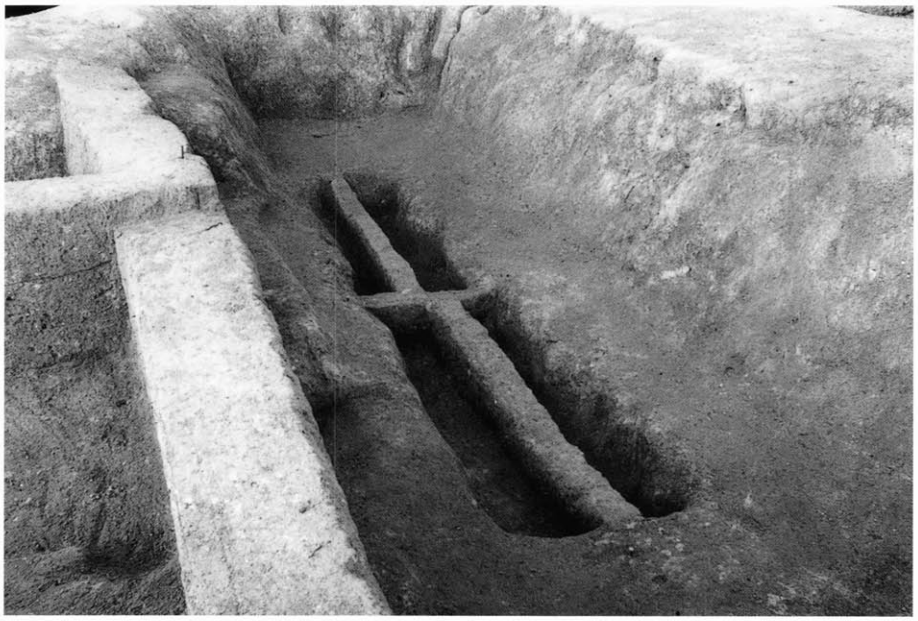
(2)12号墳全景(東南東から)



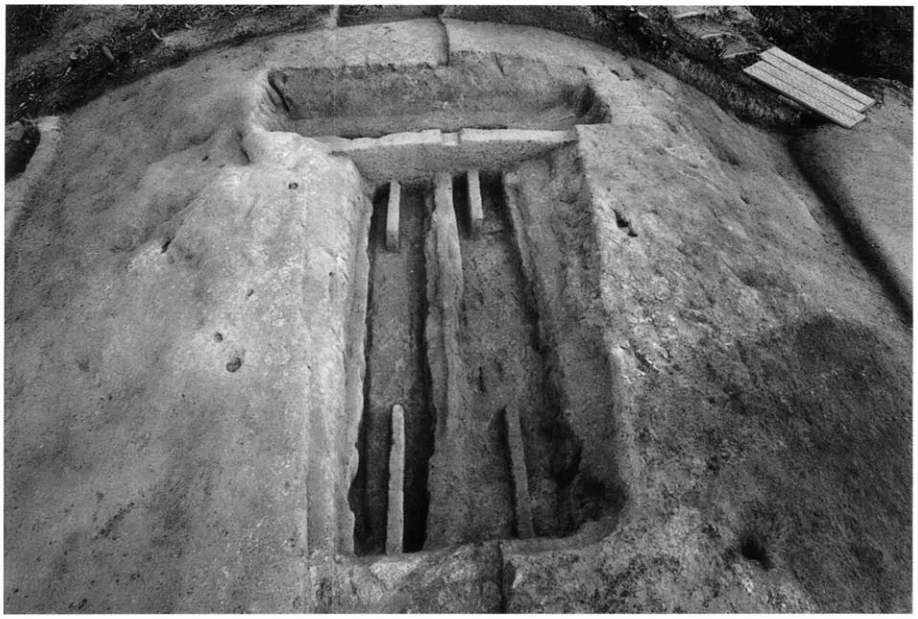
(3)12号墳主体部２完掘状況
(東南東から)

(1)13号墳全景(西北西から)

(2)13号墳全景(東南東から)

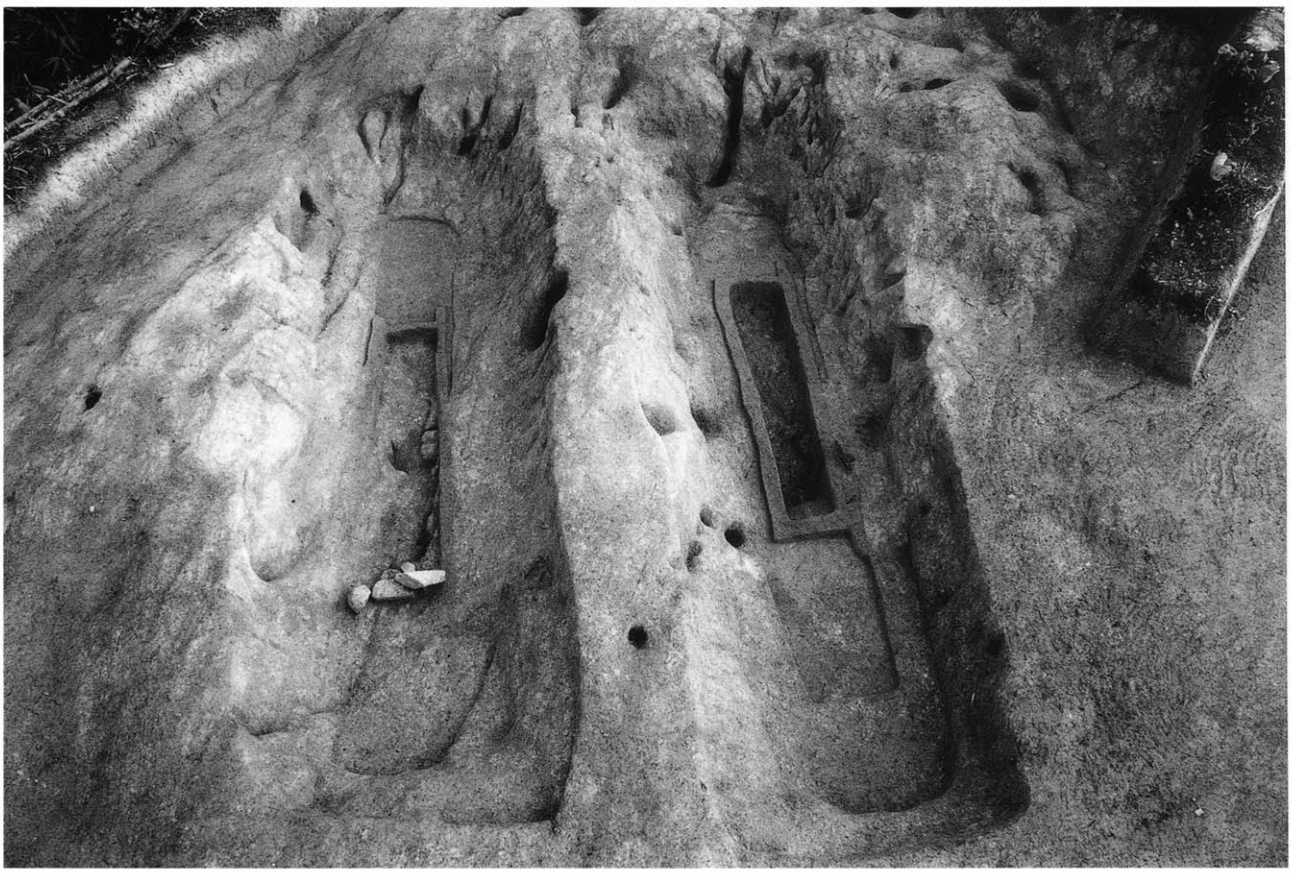


(1)13号墳主体部１(南西から)



(2)13号墳主体部１・２
(西北西から)

(3)13号墳主体部２上遺物
出土状況(北から)



(1)14号墳全景　木棺検出状況(南西から)

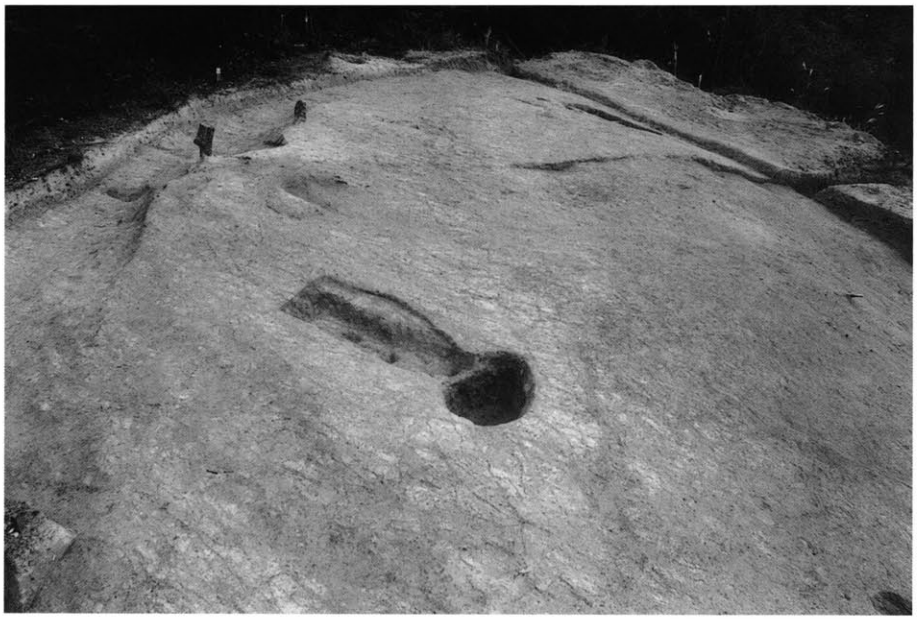
(2)14号墳全景　完掘状況(南西から)

(1)14号墳主体部１・２検出状況
（南西から）

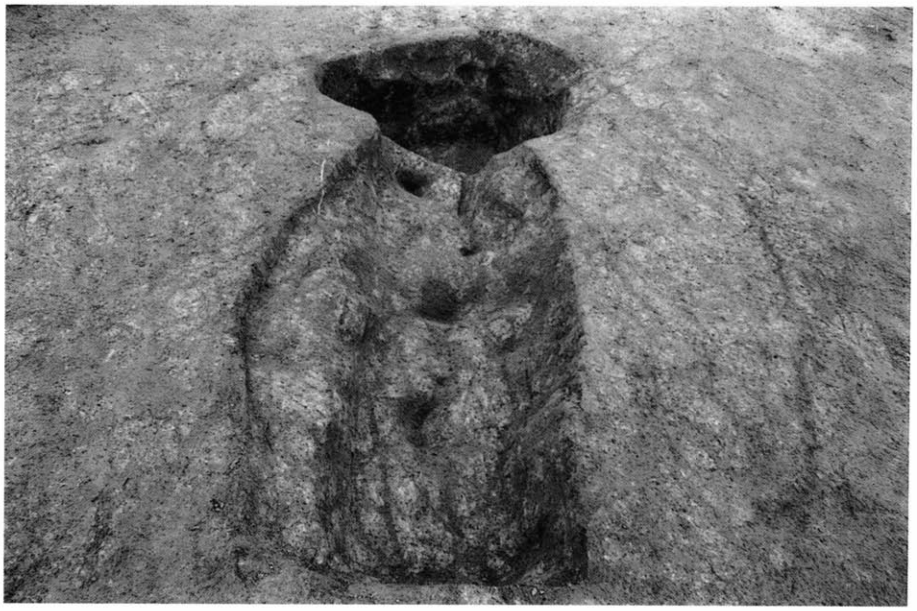
(2)14号墳主体部１遺物検出状況
（南東から）

(3)14号墳主体部２小口石礫
検出状況（東から）

(1)15号墳全景(上が東)



(2)15号墳第1主体(北西から)



(3)15号墳第1主体完掘状況
(北東から)

(1)試掘トレンチ２(北北西から)

(2)試掘トレンチ３(南南西から)

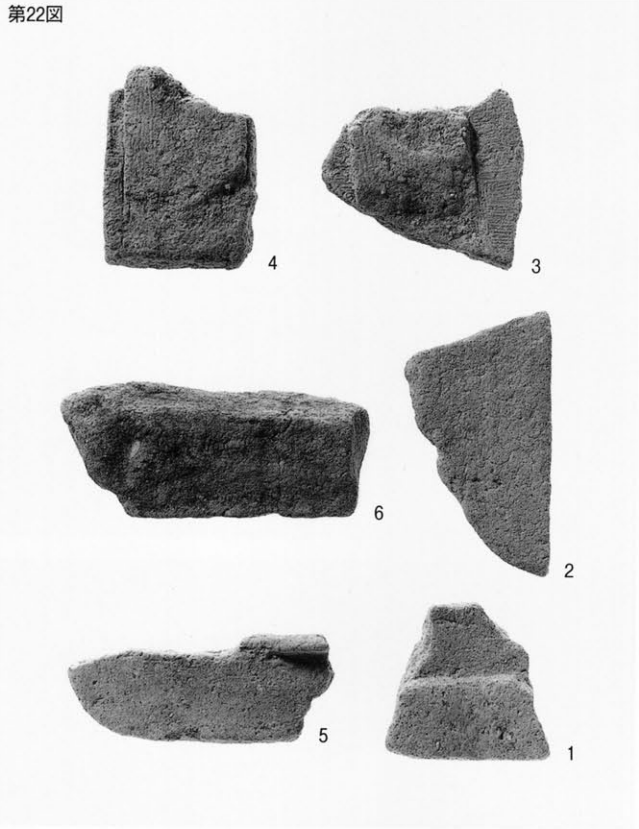
(3)試掘トレンチ５(南南西から)

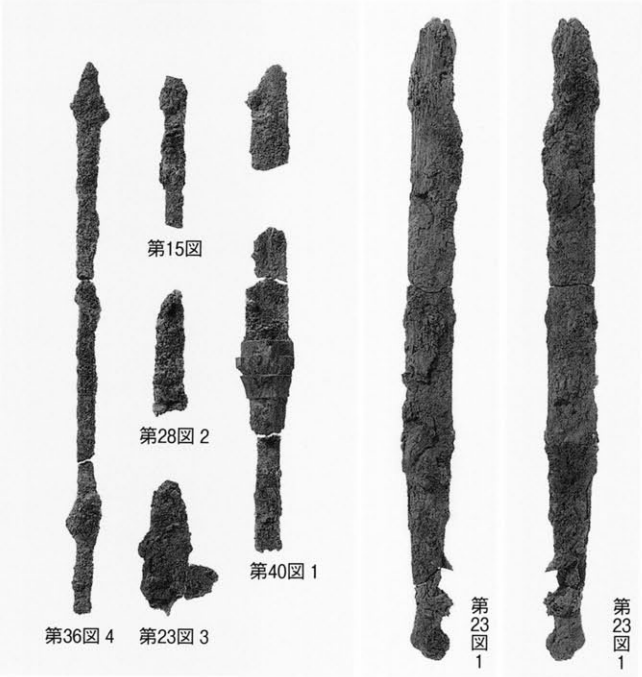
第28図 1

第36図 2

第36図 2

第22図





3 号墳第 2 主体 鏡片

第13図

出土遺物